昭和 59 年度

都 倫 研 紀 要

第 23 集

東京都高等学校倫理・社会 研究会

研究活動の充実・活性化を願う

会長　寺　島　甲　祐

本年度の研究活動も2月4日の四谷商業での第44回の例会で一応幕を閉じることになった。年々歳々人同じからずで若い人が多く出席して下さり嬉しい事この上ないものがあり、また、世代交替の感を一入強くさせられるものである。さて、本年度の研究課題は「現代社会・倫理の課題と指導内容の基礎的研究」となっている。本年度で新教育課程も完成し、われわれは「現代社会」と選択の「倫理」を指導し研究しなければならなくなった。そこで、第三分科会として選択倫理の研究を行い以て、現代社会と倫理との関連を追求することになったのである。何か二足のわらじを履くような気がしてならないが、われわれの研究会は飽くまでも人間・倫理の研究にその主体を置かなければならない。昨今、共通一次より現代社会が姿を消すとの噂が流れているが、（そんな事はないと考えるが）そんな噂に左右される事なく、われわれは、両科目に就いて真摯に研究を積まなければならない。われわれの科目は戦前よりいろいろ名称も変えられ、その内容も一寸ばかり入れ替えられて、その都度新規蒔き直しの感を免れぬものであるが、一貫して必須科目として設定されてきたものである。

人間は精神生活をするものである。そこに精神の哲学が誕生するのは当然である。それを無視しよう、権言より除外しようと思っても所詮出来ないものである。われわれの担当する科目は人間教育の根幹をなすものである事を自覚し誇りに思わなければならない。自我に目ざめる高校生にとって、生徒の心を育成し、人生観・世界観の形成に寄与する科目は他に存在しないのである。人間存在の現実に目を開かせ、現存在に意味と了解を与え、価値と理法を認識させ、それを把握させなければならない。そして、ヘーゲルの主張する精神の発展をきさなければならない。即ち、単に法則を認識する対象意識の段階より、自己の内面を対象とする自己意識に、更に両者を止揚した理性の段階に迄、精神を昂揚させて行かなければならない。それが、現代社会、倫理の科目なのである。精神科学は難しいものであるが、それなくしては、われわれは一日も安心立命できないものである。

われわれは今後とも大胆にかくあるべき理念・提言・提案を行わなければならない。臨教審に振り廻されている昨今、教育課程の改訂は当分ないものと考える。われわれは、地道に研究を行い、お互い、同学同志の仲間としての良き友となり、切磋琢磨する研究会として益々都倫研を発展させて行かなければならない。

目　　次

はじめに

Ⅰ　研究主題と研究体制および紀要の編集方針　3

Ⅱ　研究会報告

総　会　昭和59年5月22日（火）東京都教育会館

研究発表　新設高と『現代社会』　田無高校　坂本清治

講　演　現代社会と学問の再構成　東大講師　中山　茂…　5

第1回研究例会　昭和59年6月22日（金）玉川聖学院

公開授業　水資源　玉川聖学院　幸田雅夫…　7

研究発表　柳田国男と社会科教育　日野高校　杉本　仁…　8

講　演　空海の人と思想　東洋大学教授　金岡秀友…　9

第2回研究例会　昭和59年10月15日（月）本所高校

公開授業　F・ベーコンと経験主義の考え方　本所高校　勝田泰次…　11

研究発表　「韓国・朝鮮問題」を扱って　青山高校　渡辺　潔…　12

講　演　私のカント像　都立大助教授　久保元彦…　14

第3回研究例会　昭和59年11月17・18日　上野高校　全倫研紀要参照

第4回研究例会　昭和60年2月4日（月）四谷商業高校

公開授業　パーソナルコンピューターを使った資源エネルギー問題授業例　四谷商業高校　和田倫明…　16

研究発表　異端的「現代社会」論への試み　東村山高校　新井　明…　18

講　演　教育とその思い出　田園調布高校　寺島甲祐…　25

教倫研と私　葛飾商業高校　浅香育弘…　26

Ⅲ　研究報告

〔第一分科会…「現代社会」の基本的問題の研究〕

研究経過報告　清瀬東高校　上村　肇…　27

「現代社会」経済的内容におけるグループ学習の実践　東高校　渡辺敦子…　29

三人の少女たち—青年期の諸問題を考える私にとっての土台　豊島高校　岸本次司…　35

1・2学期の授業から一生徒の授業感想を通して学ぶ「現代社会」一
荒川工業高校　富塚　昇……　39
肢体不自由養護学校における社会科　清瀬東高校　上村　肇……　45
〔第二分科会…「現代社会と人間の生き方」の研究〕
研究経過報告　小金井北高校　古山良平……　49
地域環境を考える　竹台高校　斉藤　規……　52
チャート作成の指導　府中高校　永上肆朗……　56
現代社会「青年と自己探究」を授業でどのように構成するか
水元高校　大野稍一……　60
〔第三分科会…選択「倫理」の研究〕
研究経過報告　八王子東高校　井上　勝……　64
視聴覚教材を通して生徒の意識の『社会化』を　京橋高校　宮澤眞二……　66
内村鑑三と明治国家一戦争と植民地をめぐって一
八王子東高校　井上　勝……　71
「現代社会」「倫理」を担当するに当たって一産休代替教員の立場から一
荻窪高校　藤田ナツ子……　76
Ⅳ　特集"MY　PLAN　「現代社会」"
「則天去私」について　葛飾商業高校　浅香育弘……　79
「私の倫理」授業草稿一新渡戸稲造一　本所高校　勝田泰次……　84
学習意欲のわく「現代社会」を目指して　大森東高校　木村正雄……　89
生徒と読む一倫理の共同学習一　秋川高校　水谷禎憲……　93
知る権利の保障について一情報公開制度一　北野高校　井川哲夫……　96
「現代社会、こんな㊙マルシュク」　江北高校　宮崎宏一……101

Ⅴ　あとがき　…………………………………………………………104

Ⅵ　東京都高等学校倫理・社会研究会規約

昭和５９年度

研究主題と研究体制および紀要の編集方針

研究部長　小嶋　孝（東）

副部長　和田倫明（四谷高）　水谷禎憲（秋川）

幸田雅夫（玉川聖学院）

〔本年度の研究主題〕

「現代社会」「倫理」の課題と指導内容の基礎的研究

〔研究主題設定の趣旨〕

本年度は、「現代社会」が実施されて３年目を迎える。本研究会は、これまで「現代社会」のねらいを生かした授業展開を工夫し資料・教材の開発に努めてきた。また「現代社会」の趣旨は学習する生徒を主体としているので、現代の高校生がおかれている状況やかかえている問題について様々な角度から探究してきた。このような活動の中であらためて問われたことは、「現代社会」の指導内容をどのように生徒の生きる課題と結びつけていくかということであった。そのためには、「現代社会」の指導内容のもつ意味を生徒の課題とかかわらせながら根本的にとらえ直すこと、「現代社会」の内容を総合的・多角的により深く理解していくことが必要である。選択「倫理」についても同様のことがいえよう。

そこで本年度は「『現代社会』『倫理』の課題と指導内容の基礎的研究」という主題を設定し、下記の方針にもとづいて研究を進めることにした。

(1) 「現代社会」の指導内容について、生徒の生きる課題と結びつき、生徒にとって社会に生きる上で基本的な問題とうけとめられるような内容を選定し深める。また「ものの見方、考え方」を育て深い理解に導くような教材・資料の開発に努める。

(2) 現代高校生の意識や行動を明らかにすることを通して高校生が直面している課題に対応した授業を工夫し、資料・教材の開発に努める。

(3) 選択「倫理」について「現代社会」の学習成果をどう発展させていくかを研究し、従来の「倫理・社会」の成果をうけながら、生徒の生きる課題にそった指導内容を選定し、授業の工夫、資料・教材の開発に努める。

〔研究体制〕

以上の研究主題、研究方針にもとづき、本年度は次の三つの分科会を設けること

にする。

第一分科会　「現代社会」 (1)「現代社会の基本的な問題」の研究

(1)「現代社会」の基本的な問題(現代と人間、現代の経済社会と国民福祉、現代の民主政治と国際社会)の領域において現代社会のねらいに即した指導内容の研究を深める。

第二分科会　「現代社会」 (2)「現代社会と人間の生き方」の研究

(2)「現代社会と人間の生き方」(人間生活における文化・青年と自己探究、現代に生きる倫理)の領域において生徒が自らの問題としてうけとめ、考え探究できるような指導内容の研究を深める。

第三分科会　選択「倫理」の研究

選択「倫理」と「現代社会」との関連をはかり生徒の生きる課題に対応した指導内容を深めるため原典・資料の研究を行う。

以上のように本年度は「現代社会」「倫理」の課題を明らかにし、それとの関連をはかりながら指導内容の基礎的研究を行う。各分科会の活発な研究活動をお願いしたい。

〔紀要の執筆要項〕

本年度はⅠ・Ⅱを基本として編集をしたいと思います。Ⅰ・Ⅱを選択して御執筆願います。

Ⅰ　個人研究レポート

(1)　本年度のテーマは「現代社会」「倫理」の課題と指導内容の基礎的研究です。教材選択でのことや、年間計画、また授業を展開する上での工夫、方法などについて、まとめて研究報告、レポートのご執筆お願い申し上げます。

(2)　執筆の際は見出し、項目などを立てていただければ幸いです。　1. テーマ　2. ねらい　3. 展開　4. まとめ

(3)　枚数　同封の原稿用紙(37×31)で3～5枚をめどに御執筆下さい。

Ⅱ　特　集 "MY　PLAN　「現代社会」"

(1)　高校生の多様化に対して授業の担当者が、この科目をいかにとらえていくかが問題となります。「現代社会」に対して先生方の構想・視点などを中心に担当され気がついたことを自由な形で御執筆下さい。

(2)　執筆の形態および枚数はⅠと同じです。

締切　昭和60年1月15日

〔総会　講演（要旨）〕

現代社会と学問の再構成

東大講師　上山　茂先生

今日のタイトルは私が生涯のテーマとしたいと思っているもので、いいタイトルにしていただいたと思っている。これから、現在および将来の科学について、いろいろな問題点を話していきたい。

私が科学史家としていつも思うのは、どうしてもなくてはならない学問というものはあまりないのではないか、ということである。人間には、読み、書き、算盤さえあれば社会生活を営んでゆける。現在の学問の大部分はなくてもすむものだが、同時に必需品でない学問は創造的であるといえる。西洋には、論理学、文法、レトリックが発達しており、中等教育で教え込まれている。日本にはこのような伝統がない。明治時代に西欧と接触することで学問として成立したものである。

学問とは、現在あるものが未来にわたってそのままあらねばならぬというものではなく、たえず学問の再構成が必要である。私が紹介したパラダイムという概念が流行っている。この概念の定義は、もともとは「ある古典的な科学的業績で、一定期間あとからつづく研究者に問い方と答え方のお手本となるもの」であった。従ってある期間が過ぎるとパラダイムではなくなる。ニュートンは『プリンキピア』の中で、力は距離の逆二乗に比例する力によってひきあうとし、月と地球の運動を証明した。これがパラダイムとなり、さまざまなものに適用されていった。

あらゆる学問にパラダイムがある。各々の学問分野でその中で共通に古典としていただいているものがある。たとえば天文学ではプトレマイオスの『アルマゲスト』がそれで、天動説がパラダイムとなっていたが、近代にコペルニクスに代わられた。パラダイムは、はじめそれで解決できるものから適用される。そのうち、それでは解決できない事柄がでてくると新しいパラダイムに代わられる。ニュートン物理学がアインシュタインのそれに代わったように。これが科学革命である。

パラダイムはどんな科学にも必ずある。現代のパラダイムは、教科書だといえよう。パラダイムは一定期間有効である。このパラダイムにそって展開される科学が通常科学であり、ある一定期間存続するがその後「科学革命」が起り、新しいパラダイムによる新しい科学がうまれる。パラダイムは社会についてもいわれ、俗用されているきらいがある。

クーンの考えの新しい所だと私は思うが、パラダイムと通常科学とをペアにして

考える考え方がある。実際科学者の99%はパラダイムの上に一つ一つ積み上げていく仕事をしているので、新しいパラダイムを作るような仕事は千に三つ当るかどうかという可能性の低いものである。パラダイムはあとに続く人達が出てこないと通常科学にならないので、パラダイムをどのように発展させるかは次の世代の問題である。たとえば、ギリシャはアリストテレスを選び、中国では儒教を選んだように。最近では観測機器の発達で、それが大きな意味を持つようになった。顕微鏡や望遠鏡の発達によって新しい世界が開かれ、新しい学問がうまれている。このようなものもパラダイムであるといえる。

私の定義では、科学とは通常科学になるものをいう。たとえば、ピカソ、マチスなどの絵は、各々の個性の世界であり、通常科学にはなりえない。ニュートン力学をまず月と地球の関係に適用し、次に月と太陽との関係に適用するというように、どんどんつみ上げていくような活動を科学というのである。今日、現在の学問のあり方に批判が高まっている。通常科学に怖さを感じるようになっている。科学の発展の仕方に不安を覚えている。たとえば、遺伝子工学の分野で一方通行の学問的発展によっていろいろなものがはっきりわかってくるが、遺伝子決定論のようになると戦前のナチスの優生学のようにならないだろうか。遺伝子のよしあしで人間が決定され、格付けされる。これはA.ハックスリーのSF小説『大いなる新世界』の世界である。科学者の社会は競争社会で、科学的成果は日進月歩であるが、その成果の善悪を誰が判断したらよいのだろうか、それは多くの人々の社会的コンセンサスによって決定すべきであろう。

最後に現代の科学のおかれている状況をみてみたい。戦後アメリカでは、政府から出る資金によって国策にそった軍事、宇宙科学が中心で、国家のための、軍事のための科学が主流であった。日本では、政府があまり資金を出さないで、民間企業が資金を出し、平和科学が中心であった。いわば金儲けの科学である。日本でも戦前には軍事中心で、帝大に軍艦建造のための造船学科がおかれ、技術水準は高かったが、工作機械等の水準は低かった。戦後には逆の現象が起っているといってよい。戦後の奇跡的な経済成長は、軍事的な枠がとれたことが大きいだろう。科学技術には、①アカデミックな科学技術―個人的な科学技術、②国家、企業のための科学技術があるが、「市民のための科学技術」が抜けていると思う。私の造語だが、「サービス＝サイエンス」が必要ではないか。市民による科学へのアセスメントが要請される。

（文貿　東高　小嶋　孝）

〔第１回研究例会　公開授業〕

水　資　源

玉川聖学院　幸　田　雅　夫

私の勤務している玉川聖学院が会場校となり、社会科の教員の中で授業時間である先生には公開をお願いした。現代社会の授業は私のほかに１名で、計２名で５クラスを教え、私は２クラスを担当している。公開授業は、１年１組・５組の２クラスで行われた。

４月に新入生が入学してから、青年と自己探究、情報化社会と大衆文化、そして人類と環境の単元を公開授業の少し前に終わらせたばかりであった。この後に続く内容が、資源、人口、エネルギー問題であった。１組を担当した本校教員水口は、「人口問題」についての公開授業を、そして私は５組の生徒４９名に「資源としての水」という内容でやった。生態系の問題については授業で即に終了していたので、資源問題とのつながりを考え、「水」について取り上げてみた。水は身近かで親しみがもてるものである。その水に関しては小学校以来授業で何回もでてきている。高校生を対象の授業となると、かなり巾の広い内容になる。小学校からの復習のような内容もあったかと思う。

生態系の問題を含め、アスワンハイダムによるナイル川の変化について、授業で展開した。新聞の切り抜き、スライド、ＯＨＰを使っての説明をした。スライドは視覚に訴えるものとしてはビデオより効果的である。生徒は観察力をもって見る。スライドのうち何点かは私の作ったものであったために、説明が詳しくなったと思うが、緊張した授業の中で少しばかり気が緩んだ時であった。

問答をしていくと、誰からともなく答えがかえってくるクラスであるのだが、さすがに慣れないことのせいか、反応がいつもよりは鈍っていた。生態系のことの復習、そして、資源問題の導入部の授業としてどれだけ効果があったか。本校では高１に社会科２科目で、現代社会のほか地理も履習している。内容的に地理的なものもあったが、地理も学習していることを考えると、「水」という内容はわかりやすかったような気がする。

〔第1回研究例会　研究発表（要旨）〕

柳田国男と社会科教育

都立日野高校　杉　本　　仁

はじめに、柳田国男の生涯について話をされた。そして、柳田の残してきた業績をふれた後、柳田学と教育の問題について語られた。柳田民俗学は、「経世済民」の理念をもった学問とされている。学問の母胎となっているのは農政学であった。柳田学は、農政学・民俗学の狭い領域を脱して、文学・社会学、歴史学、人類学なた広い範囲に及んでいる。教育なくして「経世済民」の実現はないとし、学問と教育は結びついたものとした。

学問は時代の要請に応えるものとして、「実用のための学問」を柳田は重視した。学問のための学問を嫌い、そのためにも、現代科学としての民俗学を提唱していったのであった。

敗戦後に日本の教育は大きく変わっていったのであるが、社会科が新設されたことは、大きな変化といえるであろう。柳田は、教科書廃止を当初より提唱していた。柳田の社会科は成城学園にて実践されていった。第1は、人生科（自己認識）としていくこと、第2点として、社会改良科としての構想を社会科にもっていた。社会改良、また人生を学ぶ教科としての出発を考えていたのであった。その具体的単元としては「人の一生」がある。柳田は教師向けの講演は積極的であった。

しかし、柳田社会科は敗退していった。文部行政、経験学習より系統学習へといったものや販売競争、受験能力主義、都市問題の遅れ、柳田社会科の理解不足（教師の力量不足）などにより柳田社会科は忘れられようとしていったが、昭和57年の新指導要領への「民俗学の成果」導入や日本史の「地域社会の歴史と文化」などにより蘇生している。柳田社会科についての勉強が見直されている。

杉本先生の発表を聞き、この紙面では十分に説明できない具体例、資料が多々あった。柳田学は我々の身近かなものからの出発であり、生きるヒントを与えてくれているように思えた。現代社会の教科書の中にも民俗学のところが入いってきて、先生方の中には悪戦苦闘された方もいらっしゃると思う。何かこれからの授業のいと口を杉本先生が示して下さってくれたような発表であった。

（文責　玉川聖学院　幸田雅夫）

〔第１回研究例会　講演（要旨）〕

空海の人と思想

東洋大学教授　金岡秀友先生

都倫研紀要第22集の木村正雄先生（大森東）の「鎌倉仏教の考え方」を読ませていただいたが、地域から鎌倉仏教を理解しようとする面白い考察がありました。

今日は鎌倉より少し前の時代９世紀の仏教について話をします。まず空海宗教の世界史的意義についてですが、空海は当時盛隆の地であった長安まで行って、仏教を学んできました。当時の長安はバビロンに続く都市でローマと同じくらい栄えた東西文化の交流点でした。弘法大師の仏教は、アジアの文化の影響を考えれば国際的ですが、伝教大師は長安にまでお出になっていません。公文書にも名前が弘法大師の方は出てきています。伝教大師は越州近くの天台山で学んだのでした。天台山の開祖である天台大師は三つの経典を著わし、三つは法華三大部とよばれ法華玄義、法華文句、摩訶止観の三つで、各１０巻ずつ、計３０巻あります。伝教大師最澄は中国にて中国仏教を学んできましたが、弘法大師はアジア仏教を学びました。

共通点としていえるのは、アジア的古代の最後の経験者であったといえます。

遣唐使は大変名誉なことですが、唐に行くまでは生死をかけ、それこそ命がけでした。中国の仏教がピークに達していたのは９世紀でした。理論と実践が一致していた時期です。中国の仏教は「禅浄密道」といって、禅宗、浄土宗、密教、道教、の教えが旧中国の仏教の教えです。現在では、台湾、香港、シンガポールあたりに残っています。中に入いって初めて、仏寺であることがわかりますが、外からでは判断しにくいのです。布袋和尚（ほていおしょう）の像は弥勒仏のうつり変わりといわれています。中国の９世紀は世界史上では大きな意義あるところです。空海は世界的なとらえ方をし、最澄は中国的な一部を伸ばしていった人物といえます。

９世紀以後の中国の仏教は変わっていきます。中国だけでなく日本の仏教でも最盛期であったといえるでしょう。

日本の文化のことを考えた場合、外国の文化を受容したのは９世紀で、受容して文化を自生していったのも９世紀でした。日本で同じように受容と自生のバランスが良かった時期は明治維新、つまり１９世紀でした。

さて最澄と空海を略年表をみて比較してみましょう。空海の出生父方の佐伯家は東北出身で、蝦夷であることが『新撰姓氏録』により調べることができます。

弘法大師は信仰告白の書である『三教指帰』を２４才の時に書きました。他の著書をみてもわかるように、天才であったことはいうまでもありません。天才というのは天から与えられた才能だけでなく、努力家であります。弘法大師の著書などを見ると言葉を選んでいます。仏教ブームは今始まった訳ではなく、何回かありました。しかし密教ブームは今回が初めてです。上すべりで終わってしまう傾向にあります。密教は難しく理解できないところがあります。

弘法大師は２年の留学の後日本に帰国。帰朝報告書として出されたのが『御請集目録』であったのです。伝教大師はさぞ驚ろいたことだと思います。『理趣釈経借覧謝絶』により、天台宗、真言宗が独立していったといえます。インド的仏教と中国的仏教とに分かれたと考えてもよいのです。泰範という伝教大師の弟子が高野山の弘法大師のところまで学びに来ました。

東大寺は密教色が濃くなってきました。「御七日御修法」天皇が宗教を受け入れることにより真言宗は栄えていきました。また天長５年京都左九条に日本で最高の大学綜共種智院が建てられました。民間の大学ではソルボンヌ、ボローニャ大学より古かったのですが、わずか１８年で廃行になりました。今は東寺に種智院大学として日本で一番小さい大学として再建されています。

天長７年『秘密曼荼羅十住心論』『秘蔵宝鑰』が最後に書かれたものです。この後弘法大師は、やるべきことは終わったとして入定をします。天長９年（832）11月１２日に断穀をし２年半後の承和２年（835）１月には断水をします。3月21日が命日となります。釈迦仏と弥勒仏の間、二仏中間の大導師としてとらえられています。曼荼羅により仏教的世界を知った人であったのです。密教美術から仏教について学ぶ、研究していくことは結構なことだと思います。私の空海観がわかっていただければ幸だと思います。

「なぜ高野山に寺を建てたのでしょうか」という質問に対し、金岡先生のお答えによりますと北は伝教大師、南の方は熊野、または吉野山があります。修行した時に高野山を選んでいたようです。また木材の供給のことも考えたようです。都の近さ、富のことを考えられたようです。

弘法大師研究は資料の問題があります。第１は著書、第２は公文書、第３は弟子ライバルの書いたものです。資料が多く、資料の選定の眼が問題となります。仏教外の研究の方のものが出されることを望みますと結ばれて講演は終わりました。

（文責　玉川聖学院　幸田雅夫）

〔第２回研究例会　公開授業〕

Ｆ・ベーコンと経験主義の考え方

本所高校　勝田泰次先生

秋たけなわの10月15日、下町の本所高校で、勝田先生の選択倫理と代田毅先生の現代社会の授業を参観させていただいた。

勝田先生は、「Ｆ・ベーコンと経験主義の考え方」を授業主題とし、西洋近代思想において合理的精神 ― 特に知性と経験を尊重する経験主義の考え方がどのような意義をもっているかを柱として展開されました。

まず授業の導入に動機づけとして、簡素なレディネステストを実施し、未知なるものへの作業を通して換起しようと試みられました。また生涯についても興味深いエピソードをもとに現代との関りを強調して関心を高めるように工夫して展開されました。

次に、新時代の学問のあり方を「自然を支配し、社会生活の改善に役立つ力をもつものである」という考え方から「ノーヴム・オルガヌム」にみられる特色と意義を浮き彫りにされました。また他方では、対象をありのままに映しとろうとする経験主義の立場が実験や観察を行うにあたって陥入りやすい誤りをイドラに即して話されました。春・秋の彼岸の温度差や「幽霊みたり枯尾花」などのいきいきとした具体例は、生徒自身が自分の身にひきつけて思考することを促すうえで効果的なものでした。全体として、独断論と機械的経験論にともに陥らない知性の意義がよくわかる授業でした。

先生は、授業の中で対話を重んじられ、手がかりを与えつつ、生徒が具体的に答えられるような問いかけを工夫されていることが印象的でした。特に、しみじみとした味わい深い語り口は、授業の年輪の厚みを感じさせ、感心させられました。

代田先生は大企業と中小企業のところを授業され、生徒達がとびつくようなわかりやすい設問がついたプリントを使用されていました。本所高校の付近は中小企業が多いそうで、地域に即した内容で、生徒にとっては関心があった内容と思われました。また、先生の印刷された「社会サムタイムズ」は興味深い冊子で、生徒の復習や、人生観・世界観に何かヒントを与えてくれるようなもので、長いキャリアが特に光り輝いているものと思いました。

（文責　豊島高校　菫名次夫）

〔第2回研究例会　研究発表〕

「韓国・朝鮮問題」を扱って

都立青山高校　渡　辺　　潔

私は、昨年の夏（８月１日～８月１０日）、韓国を旅した。「旅した」と言っても、釜山―ソウル―釜山であるから、「旅」というにはあたらないかも知れない。しかし、私には、この旅をするにあたり、かなり構えたところがあった。この事は昨年１１月の全国大会・第２分科会での資料の「はじめに」の中に書いたが、私と父との問題を内包していた。それは、母の二番目の姉が、母の長姉の家で営んでいた缶詰工場の朝鮮工場の従業員と結婚していたこと。戦後、父が公職につけず、母の洋裁により生計を立てており、その鬱屈した心理から母につらくあたり、その時母にあてつける様に、私や妹が、何か失策をやらかすと、「朝鮮人じゃあるまいし」という言葉があびせかけられた。そんな父に、私は中学校、高校と猛烈に反抗した。そんな私も、韓国、朝鮮人から見れば、侵略者の子孫なのである。その自分が韓国に身を置いて、何か感じてみよう。そう思ったのがきっかけの旅であった。できるだけ、「問題」や「イデオロギー」よりも、むしろ目と耳と胃袋で感じとってみようと思った。リュックサック一つに、サファリコート。ある意味では、最も警戒される姿で、関釜フェリーの客となった。そして、できるだけ街をさまよってみた。言葉の壁があり、とても深くまで入れたとは思えないが、それを「韓国日記」という形でプリントし、自分の体験を話した。しかし、これだけでは単なる旅行記に終ってしまうと思い、第２部を計画した。

第２部では、「問題」・「イデオロギー」に触れてみようと思った。そこで、まず生徒にアンケート調査を試みた。「韓国」・「韓国人」・「韓国の将来」・「日韓の今後の関係」・「教科書問題」といった項目について自由に書かせ、それを分析整理してみた。又、日韓文化人の船上対談での大島渚発言が問題になったが、週刊朝日にのったものをコピーし、生徒に読ませ、その感想を自由に書かせ、又、分析整理した。そして次に差別の問題に触れることにした。私の教え子に医学部に通っている者がいる。彼等の同級生に在日・韓国・朝鮮人がおり、彼等の話しを聞き書きし、又、ルポライターで、韓国に毎年、ハンセン氏病の患者の村にボランティアで通いつづけている阿奈井氏に会い、その話しや、そのボランティアに参加した日本人の学生たちと酒をくみかわした。それに、私の在日の二世になる従兄の話し

をまとめ、生徒にプリントし渡した。そして、その感想を再度アンケートした。そのアンケートの都度、結果はできるだけ早く生徒に渡した。そして、最後に、数冊の本から、抜粋し生徒の考えるきっかけとしてみた。今回の授業で、心がけたのはなるべく、考えを押しつけることなく、私自身がまだまだ韓国、朝鮮問題を考える入口にしかいないこと、そして、生徒と共に考えていくことにより、自分の問題意識を深めてみようという姿勢を保った。紙面が限られているので、詳細な内容は、発表の際のレポートを読んでいただきたいと思いますが、私自身、ほぼ1ケ月生徒や医学生、ルポライター、こうした人との接触の中で大いに刺激を受けた。

もちろん、在日・韓国・朝鮮人が何故日本に多数居住しているのかについての歴史なども話したが、力点は、私自身が感じ、考え、悩む姿を、そのまま生徒にぶつけてみたかった。

結果は？　私は、今は何とも答える事はできない。

都立の受験校に身をおく教師として、学校が、生徒が極めて機能化していくことを憂えている。確かに、学歴体系による選別が現実であろう。そのため、受験機能化していく方が、現実で勝利を収めるかも知れない。しかし、私はロマンを求めたい。受験校である青山であるから、彼等は被差別者の側に立つ事は少ないであろう。それだけに、よけいこうした事を話しておきたかった。

「先生、共通一次に間に合うんですか？」。最前列の女生徒が不服そうに抗議した。私は、その生徒と放課後話しをしたが、彼女の口から出た言葉は、我々を機能化してとらえていることであった。私は、10月から、自主的に受験補習を行った。自分の中途半端さを実感しつつも、心の中では、ロマンを持ち続けたいと思っている。

管理社会化・学歴インフレーション・教育（？）産業の繁栄。そんな中での最後の苦しみからのあえぎの声が、1969年の高校紛争の中の、真面目な層から発せられていた。

価値観の多様化と言われながら、真実のところは、一元化している。

そうしたものに対し、生徒が主体となって、様々な見方を発見しうる授業展開の可能性のあるものとして現代社会をとらえたいと思う。

〔第２回研究例会　講演（要旨）〕

私のカント像

東京都立大学助教授　久保元彦先生

本日は、カントによって形而上学とは何かについてお話ししたい。哲学史におけるカント像は、新カント派のカント像が中心で、ナトルプ、ビンデルバント等新カント派の有力者は哲学史を著しており、日本では哲学の教科書は大体新カント派に拠って書かれていた。新カント派によれば、カントは認識論、特に科学の認識論的基礎づけをめざしたとする。しかし、第一次世界大戦を契機として新カント派は脱落し、大戦間時代にはカントは形而上学の新しい基礎づけをしようとしたのだというハイデッガー、ハルトマンらの主張が有力になった。カントの哲学は認識論か形而上学かが争われてきたわけだ。新カント派の解釈には無理があると思う。カントの著書には「形而上学」を冠した著書が多いからだ。（例　道徳形而上学原論）従来のこの論争には二つの問題点がある。一つは、その時々の哲学の主流がめざしている事柄にカントをあてはめる形で論争が行われたこと、一つは哲学に部門分けがふさわしいか、カントは懐疑的だったのでは、ということである。

私はカントは形而上学を復権しようとしたのだと思う。カントにとって哲学とは彼以前にはなく、彼自身から始まるものであった。形而上学とは哲学そのものであったといえよう。当時哲学界の主流であったヴォルフの形而上学体系とカントの「純粋理性批判」を比較してみると、カントがヴォルフ哲学を批判したことがよくわかる。

ヴォルフの形而上学大系

- 一般形而上学＝第一哲学＝存在論
- 特殊形而上学
  - 一般心理学…魂の不死について
  - 一般宇宙論…神と宇宙について
  - 自然神学……理性に即して神の存在を証明

「純粋理性批判」

- 超越的感性論
- 超越的分析論
- 超越的弁証論
  - 純粋理性のパラロギスムス…一般心理学批判
  - 純粋理性の二律背反…一般宇宙論批判
  - 純粋理性の理想…自然神学批判

感性論、分析論は一般形而上学の、弁証論は特殊形而上学の批判である。カントは「学としての形而上学はいかにして可能か」を追求したのだと思う。数学は何故確実な学問として成立しうるか、それは現に科学として存在するという現実性から可能性へという仕方で存在しているからだ。哲学は存在しない。ではどこに学としての基盤を求めるか。神の永遠性、魂の不死などへの問いは誤っている。しかし、それらへの疑問は我々のうちにある。この理性の欲求の現実性から出発して形而上学を立てられないかとカントは考えた。理性の要求とは、時間、空間とは何か、「私がある」ことの意味は何か、何故神の存在証明をしようとするのか、等であり、これらがゆがめられた形で、世界に始まり、終りはあるか、魂の不死、神の永遠性などの問いになってしまっていたのだ。理性の要求にもとづいて問題を立てる時、形而上学はうち立てられる。たとえば感性論では時間、空間論をとりあげている。従来の哲学にはそれぞれの部門ごとに異った対象を持つことがいわれていた。しかし、カントは形而上学は何らかの対象を持たないとする。それは形而上学には独自の認識の仕方があるからだ。超越論的哲学とは形而上学固有の認識の仕方とは何かを問うたものであり、哲学の自己探究、自己反省、すなわち哲学（形而上学）はいかにして可能かがカントの仕事であったと私は思う。カントの哲学が認識論か、形而上学かで論争することはあまり意味がないというのが私の考えである。

（文貿　東高　小嶋　孝）

〔第４回研究例会　公開授業〕

「パーソナルコンピュータを使った資源エネルギー問題授業例」

都立四谷商業高校　和　田　倫　明

1. はじめに

パソコンを『現代社会』の授業に利用する試みを、私は『現代社会』が始まった５７年度から手がけてみた。ちょうどその年、商業科や理科の若手教師とともに、理振予算で導入されたパソコン１１台を授業に導入する共同研究を行うべく、都の『特色ある学校づくりの推進校』指定を受け、「人口問題」に関するプログラムを作成し、研究授業を行った（『都倫研紀要』第２１集参照）。

本年度は、同じく都の『職業科高校における情報処理教育の推進』の初年度分の適用を受け、48台の16ビット・ビジネスパソコンがネットワークシステム付で設置された。一昨年度が8ビットのホビーパソコンであったのに比較すると、機能的には飛躍的に向上し、またネットワークのおかげでプログラムやデータの受け渡しも可能になった。本来なら年度当初から計画をたてて取り組むとよかったのだが、設備が整ったのが夏休みの終わり頃であり、また私が三学年の担任ということで進路指導に追われ、クラスの生徒の就職先が落ち着いた１２月頃にようやくプログラム作製のための時間がとれるようになったことから、本年度の取り組みは残念ながら不十分なものになってしまった。

本年度は、一昨年度計画しておきながら時間切れで実現できなかった「資源・エネルギー問題」に取り組んでみた。『現代社会』の内容の中でコンピュータによる近未来予測が有意義なもう一つの分野として考えていた箇所である。

2. 授業展開について

「資源・エネルギー問題」の授業での取り扱いは、月並ながら石油問題から入ってみた。生徒の生活に石油（製品）がいかに深く関わりあっているかに気づかせることから始めて、石油はいかに発見され採掘されるかを説明した後に、いよいよ石油はあと何年ほど使用可能かを予測させる。そして、その予測をもとにしてこれからの資源・エネルギーのありうべき姿を考えさせる、というのが全体の流れである。

公開授業では、事前の授業をもとにして①石油の究極可採埋蔵量、②石油の消費

量、③石油価格、について生徒が自分なりの予測をたて、コンピュータに入力することによって、①石油はあと何年使えるか、②石油価格、石油製品価格はどう変化するかが表示されるプログラムを作成、使用させた。もちろん、これらの要素は単純に数字で割り切れる性質のものではないのだが、いずれにしても省エネルギー、省資源の重要性は薄れるものではなく、その自覚を高めさせるうえで役立つことを第一の目的としているので、これで十分と考えるのである。

公開授業の一週間前、生徒には未完成のプログラムでウォーミングアップしてあったが、一昨年と同様生徒はすぐ操作に慣れ、不適当な操作をする者も2名程度はいたものの、パソコンを使うことに全体として拒絶反応は見られなかった。ただ、今回は十分な準備期間がとれなかったこともあって、誤操作に対するプログラム中の対策（例えば極端に大きすぎる予測値を入力したときの表示など）を十分に組み込めず、多少生徒をまごつかせる場面もあったことは反省材料の一つである。

3. おわりに

ことパソコンの導入については、日本の教育界の対応はまだ非常に遅れているといわざるを得ない。特に、これまでのＣＡＩの考え方（それはそれで十分な意義をもつが）を越えて、発達したパソコンの機能を十分に生かしきれているとは到底言えない状況である。

教育用コンピュータとして必要な条件を整えている製品も、現状ではまずないと言える。ハードウェア面では①生徒の学習記録を整理するためのファイル処理能力②高度なグラフィック処理やサウンド機能、②使いやすいキーボードやスイッチ類など、ソフトウエア面では①オンライン処理、②学習管理および教材作成のプログラムを作るためのツール、などが整備される必要があるだろう。現状ではビジネス向きやホビー向きのパソコンは多いが、教育向きということになるとそれ専用の開発はまったく不十分である。本校で使用しているシステムも、オンラインシステムの操作が煩雑で、データやプログラムの受け渡しが確認しにくいなどの問題点がある。そして何よりも、教材作成を簡単にできるようなプログラムがまだほとんどなく、ＢＡＳＩＣでコツコツと作らなければならないというのが、最大の問題点ではないかと考える。

最後になりましたが、多忙な学年末に多くの先生方に御参集頂きましたことをここでお礼申し上げます。

〔第４回研究例会　研究発表〕

異端的「現代社会」論への試み

都立東村山高校　新　井　　明

はじめに

新設の「現代社会」も早や３年目を迎え、その評価とともに各種実践を通してその問題点も多くクローズアップされてきています。それらの問題点は、「内容が多岐にわたりすぎ」ていて、「教科書の内容が盛り沢山すぎ」であること、したがって「科目の指導内容についてもっと精選する必要」があり、「地理・歴史・政経・倫理の内容が雑然と組みあわされているような科目であってはならない」ということに共通してまとめられるようです。（註１）

ではどう具体的にすれば、については今後の研究課題ということになるわけですが、その意味では試行錯誤があと何年かは、場合によってはいずれの日にかこの教科が解体・消滅する日まで続くことになるのでしょう。このような中で、本稿は、私なりの「現代社会」へのアプローチを提示しながら、精選・学際というこの教科への課題をふまえ、その対象と方法についての試論をのべてみたいと考えています。

「現代社会」へたどりつくまで

本論にはいる前に少し寄り道をして、私の「現代社会」へいたる歩みを少し開陳してのちの論の参考にしてみることにしましょう。

私は旧「倫理社会」創設３年目にこの教科を高校生として受けた世代にあたります。使用した教科書—実際には全く使用せず—は「期待される人間像」の主査をしていた高坂正顕氏の講談社版であったことを覚えています。倫社という教科には担当していた教員の学識と個性のユニークさのみ残り、教科として何かを得たという記憶が全くなく、逆に強い「偏見」と「疑惑」をいだいたといえます。その人間が曲折を経て教員になりその倫社を担当するようになるのだから世の中はおもしろいものです。政経で教員になった私ですが、前任校、現任校とも担当教員の関係で政経は担当できず、特に現任校異動の際はいずれ「現代社会」という教科ができるからその準備もかねて倫社を、ということになり倫社との付きあいがはじまりました。手さぐりではじめた倫社の授業は二つの意味で私の「偏見」をやぶるものでした。その一つは趣味と実益を兼ねていること、即ち自分が漠然と考えていた現代の

諸問題への解答を苦業としてのかせぐための労働の中で考えられることであり、もう一つは自らの心情をかなりストレートに投げかけられる教科でもあったことで両者とも受験からの圧力を比較的うけないですむ教科である現実的基盤の上に成立した幻想だったとも云えるのではないかとも思います。一言でいえば倫社は「開かれた」教科だったのです。このことは現在の「現代社会」を考える上でも大きなポイントの一つであるし、忘れてはならない継承さるべきことではないでしょうか。

現実の授業では、哲学史に全く学識がないため対象を現代社会論に大きくしぼり込まざるを得ませんでしたが、その中でも現在の「現代社会」で扱われている人類と環境、エコロジーの問題、原子力発電の問題、組織と個人の問題、家族とその解体現象、国家論、本多勝一氏が「子供たちの復讐」と名づけた非行、親殺しの問題など数多くのリアルな問題をとりあげてみました。また思想史分野では原典主義より遠藤周作氏（イエス）、高史明氏（親鸞、在日朝鮮人問題）などの作品をとりあげてもみました。その授業がどのようなものであったのか。少数の生徒にはインパクトを与えたようですが残りの生徒にとっては「アレなあに」というものだったようです。が、様々な試みが許された倫社に対する愛惜は強いものがあります。

「現代社会」1年目の記録

そのような試行のなかで昨年度（1983年度）「現代社会」をいよいよ担当することになったわけですが、教科書完成までの異常さ、その内容を見て自分なりの試行をしてみるほかないな、と感じました。（註2）

さてその授業でとり組んだ内容を次に紹介しておきます。

まず全体の導入として青年期の問題を扱いました。ＶＴＲで「十代の反乱」を見せたり、フロイトに依って心のしくみをかなり詳しく話したのちまとめとして自分史をエリクソンの発達論流に書かせて、次の現代社会論のつなぎとしました。ここでは高度成長以降の社会の変貌をとりあげ、文化祭には自分史とともにまとめさせた「私たちのベスト10―はやり歌、マンガ編」をグループ作業させて展示する試みもやってみました。「地域学習」（註3）のあと経済にとり組み、"How To Turn Lemons Into Money"という英文絵本を一冊そのまま使いながらすすめることにしました。英文なので本業でない英訳の講議からはじめ、需要、供給曲線の見方、考え方、企業形態、資本運動法則（G–W–G′）まで話しました。それに悪のりをして続編の"How To Turn Up Into Down Into Up"もとりあげ、ここではケイ

ンズの有効需要論までふみこんでみました。ここで時間切れ。まとめに思想と人間ということで高史明氏親子の軌跡を話し一年の終りとなりました。

この一年目の授業への視点はできるだけ生徒の持つ「常識」にゆさぶりをかけてみようということで、そのための「精選」だったのですが、やり終えてみると二つの点で重大な反省点がうかびあがりました。一つは残された分野の多さであり、もう一つは一年間を通してはたしてここから現代社会に対するそれなりの — あえてトータルのとはいわない — イメージが形成できたかという思いでした。特に後者に関しては私自身一年間の授業をやって、現代社会理解への肉太な「導びきの赤い糸」が見えないという思いは禁じえないものでした。

二年目開始にあたっての壁とそれへの突破の試み

やっと本論にたどりついたようです。

本年度の授業を開始するにあたって、前年度の反省もふまえ全体構想の再構築を余儀なくされたわけですが、次なる構想がおいそれとは出てくるわけがなく新学期がはじまりました。さしあたりは昨年と同様でスタートしましたがいよいよ追いつめられての試行がはじまりました。その試行とは今回紹介しようと思う「同時代史」をやってみようというものでした。

その内容を語る前にもう少しそこに至るまでの契機を話してみることにします。それはそこに至るまでの何年かに体験した潜在的・顕在的な契機でした。

まず外的なインパクトとしては、まず中曽根内閣の成立と「戦後の見直し」的一連の動きがあります。臨教審を持ち出すまでもないことですが、この動きに対してはいずれ一度対決する必要がある、踏絵をさせられる前に自らの姿勢を検討する必要はさけることができないなという予感をいだいたことでした。次には、教科書問題がありました。主に日本史分野での「侵略」「進出」に代表されるものが外交問題にまで発展したわけですが、「現代社会」に関しても前述のとうり重大な問題が残されたはずなのに現場での反応は一種のリアリズムにもとづいてきわめてニブいものでした。しかし私にとってはやはりさけることのできない要素としてわだかまりを残していました。

これらの動向に呼応する形で私の内部でのインパクトがいくつかありました。その一つは、この何年間かにたたかわされた諸々の論争に対して自分なりの判定をしてみたいという思いでした。例えば本多勝一VSベンダサンの南京大虐殺論争であ

り、江藤淳VS本多秋五の無条件降伏論争などをどうとらえるかは自分の授業への試金石にもなるのではないかと思われました。（註4）

次には追いつめられながら読んだ何冊かの本からの刺激があります。京極純一『日本の政治』、磯田光一『戦後史の空間』、鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』、栗原彬氏や私の師にあたる三戸公氏の本からうけた諸々の問題意識は、それを何とか高校の授業でも生かしたいという強い誘惑を与えてくれました。

さらにはやりのニューアカデミズムからの発想への刺激もありました。その中で心にのこったのは、パラダイム、ダブルバインドなどの考え方と「学問はその方法やスタイルによって至上の悦楽になりうる」という「華やぐ知慧」的な態度でした。ここから確認できたのは、教師自身がおもしろいと思わないものはいくら必要だからといって教えてもおそらく生徒には毒にも薬にもならないだろう、という一種の居直りでした。

もう少し付け加えれば、生徒を認識論的視角から存在論的に見ることになった私自身の就職担当係への転身があげられるでしょうし、この都倫研での同学との交流もありました。

以上いくつかの契機をランダムにあげました。これらと「現代社会」という教科のもつ課題、一年目の反省があいまって醱酵してきたものが「同時代史」を正面にすえて授業を組みたててみようという試みになったのでした。

異端的「現代社会」への再アプローチ

ではこの授業を構想する際の問題点は何か。

まっさきにあげられるのが、それは歴史の授業とどう異なるのか、という疑問だろうと思います。それに対しては一種の居直りですが同じでもいいではないかと私は思っています。というのは現実には高校では現代史の授業は全くといって良いほどおこなわれていない現実があるからです。教科書問題の時の教員の反応のニブさの一端は生徒に教えていないのだから「侵略」でも「進出」でもそう大した差ではないということではなかったと思われます。中学校では高校受験という関門のため一通りはなされるでしょうがそれだけでしかないように思われます。（註5）これらを考えると「同時代」を歴史として対象化して触れさせるだけでも意義があるといえないでしょうか。

次に、以上をふまえてなおそれ以上のオリジナリティはないのかという問いかけ

は当然投げかけられると思います。その点については私は、これは知の組み変えもしくはパラダイム転換のための「後退戦」だと答えたいと思います。いま私たち教員にとって必要なことは、大げさに云えば、私たち自身の思考の枠組みの転換なのではという思いが私にはあります。それは一方では黙示的価値としての指導要領があり、他方にはそれに批判的な民間教育団体の活動があるという状況のもとで特に歴史に関してはそのせめぎあいが先鋭化しているなかにおいて私自身はどちらにも強く異和感を感じているという個人的発想に由来していることは確かです。（註6）即ちパラダイム論でアナロジーすれば前者は「通常科学」の範囲を全く出るものでなく、後者はその豊富な実践と精緻な理論にもかかわらず「資本主義→社会主義パラダイム」の枠をこえる地平を持ちえていないと判断されるのです。どちらも精緻であればある程私には重苦しさとしてのしかかってくるものでしかありません。もし「現代社会」が「開かれた」教科であるなら、２１世紀を生きるためにも私たちは大胆な知の冒険をそれぞれが試みてみることが許されなければならないのではないでしょうか。これをその準備のための「後退戦」と位置づけたのはこんな思いが背景となっていたのです。

さて、その実際の授業はどうなるのか。８４年９月からの実践なので中間報告でしかありませんが紙数の許すかぎり記しておくことにします。

第１に、「同時代史」の対象をいかに設定するかということでは、「現代社会」の検定プロセスの中では戦後、それも高度成長以降ということがわく組として与えられましたが、私自身はその正しさを一面では認めつつ、少なくとも前史として日本であれば昭和初期までさかのぼる必要があると考えました。それは前述の「戦後の総括」の動きを考えるとより理解できるのではないかと思います。これと関連してテキストとしては中学歴史の教科書のプリントを使い「現代社会」教科書は事項（例えば憲法制定など）確認に使用する形をとりました。（註７）

第２に、その授業方法ですが、通史的叙述をとることにしました。これは「テーマ学習」的方法が推奨されている「現代社会」からみると逆行のようですが、そのメリットとして、生徒にとっては学習のながれがつかみやすいこと、教員にとっては前述の「導きの赤い糸」がそのなかから発見できるチャンスがあることは云えるのではと思っています。

第３に、内容ですができるだけ現代の視点からの問題を以下のようにとりあげてみました。

1. なぜいま「同時代史」か — 戦後の総括とは何か

2. 前史 — 敗戦まで

(1) 満州事変・日中戦争

ここで南京大虐殺をめぐる論争などを紹介した。

(2) 大平洋戦争

できるだけ戦いの軌跡をとりあげる。外国教科書に扱われた太平洋戦争の紹介も試みた。またそこに生きた人間として吉田満『戦艦大和ノ最期』会田雄次『アーロン収容所』などもとりあげてみた。

3. 敗戦と占領

ここでは敗戦を終戦、占領を進駐とした日本人の思考様式にせまってみた。あわせて戦争責任を東京裁判を素材に考えさせてみた。

4. 戦後改革と憲法制定

3大改革を現在の経済体制との関連で扱ってみた。そこから所有と経営の分離や日本的経営の問題を考えさせてみた。憲法は制定プロセスを詳細に検討することを通して改憲論・護憲論を考えてみようとした。

以上のところまで実践したわけですが、学年末までには何とか現在まで到達したいと考えています。ここまでやって思ったのは、イエスもソクラテスも出てきませんが、過去の日本人の生き方、選択の中にはそれと同じ質のものがあったことを改めて確認できたこと、もう一つは私たちのアイデンティティを声高でなくても問わざるを得ない内容になったな、という思いです。そのことが期せずして前述の精選、学際、生き方を問うという「現代社会」の課題に応えるものの端緒にはなっているのではないかと思ってはいるのですが、各位の批判を期待しております。最後にこの授業をはじめてから授業準備の苦痛がかなり減ったこと、授業時間の確保が関心事になるという信じられないことが私におこったことを付記しておきます。

<付> 84年度2学期の中間・期末考査の一部を紹介しておきます。よかったら一緒に考えてみて下さい。私自身にも答の出ない問題です。

○戦争責任はだれが負うべきだろうか。天皇か、指導的軍人か政治家か、それとも直接参加した兵士か。

○残虐行為をした兵士は加害者か、それともいやいや参戦させられ命令で行為をした被害者なのか。

○アジアの人たちは "Forgive but not forget" といっているがこれらの人々と戦争体験のない私たちはどのようにつきあったらよいと思うか。
○吉田満『戦艦大和ノ最期』の一節(臼淵大尉の「敗ケテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本が救ハレルカ……」の部分)を読んで、①臼淵大尉らの死は犬死か、②日本は敗れて目覚めたか、もし目覚めたなら何に、そしてそれをどう変えたのか、もし目覚めていないのなら何に、そしてなぜか……以下略

(註1)全倫研会報、第39号の寺島甲祐先生のことば
(註2)この時は検定がきびしく見本が出来ず、白表紙本が見本として配布されるというハプニングがあり検定の黙示的価値が表面化しました。これはちょうどフロイトが無意識を開示したのと同じショックを与えました。せっかく浮上したこの部分の検討が必要であったと思いますが十分にはなされなかったのは残念に思っています。
(註3)従来「地理・地学地域実習」として実施されていたもの。国分寺跡、三富新田などをフィールドワークしていましたが、本年より「現代社会」の内容に即して、自動車工場見学、横田基地、砂川新田などを対象としています。
(註4)「現代社会」で論争的事がらを積極的にとりあげるべきという主張は都倫研紀要22号の拙稿で触れてあります。
(註5)NHK編『どう映っているか日本の姿』日本放送出版協会の中で太平洋戦争を1時間で終らせる中学授業への批判の投書が掲載されています。また同書は授業で大変参照させてもらいました。
(註6)民間団体側の著書として民教連編『社会科教育実践の歴史・中学・高校編』あゆみ出版などがあるがその検討・批判についてはここでは述べきれないので他日を期したいと思います。また昭和史、現代史と称さず「同時代史」と称したのは三宅雪嶺の同著名からのヒントとともに以上の考えが根底にあります。
(註7)このようなテキストに対する不満をより明快にしてくれた書に別板篤彦『戦争の教え方』新潮社があります。同書の紹介する外国教科書なみの水準に日本の教科書がなるように "何か" を考えねば、と痛切に思います。

〔第4回研究例会　講演（要旨）〕

「教育とその思い出」

都立田園調布高校長　寺　島　甲　祐

自分の中の悪を克服するために倫理を専攻したという感を強く持っている。そういう男が長く教壇に立ち、ここまでやって来られたのは、自分でも不思議である。十五、六歳のころヘーゲル『哲学入門』などを読み興味をひかれ、広島文理大に入って多くの優秀な教師や友人に恵まれ、その中でヘーゲル思想を学んだ。やがて士官学校に行かされたが、そこで日誌に「自由」という言葉を書いて殴られた。ヘーゲルの「自由」を意識して、死の恐怖に支配されるのは不自由であるという意味で書いたのであったが、毎日殴られながらも書き続けた。当時の友人の手紙に、終戦の日のことが書かれている。玉音放送を聞いて自殺に行った仲間を皆で止めに行った時、中の一人がこれからの日本はどうなるか、奴隷にでもされるのではないかと言ったところ、いや、アメリカにもデューイのような哲学者がいる、これからの日本は民主主義の道を歩むことができる、と私が言ったのを、彼は今も思い出すと言う。教え子の書いたものに、私が英語を教えていたころ、毎時間小テストをしたのだが、それに反発してもいっこうに譲らなかった私を一番よく思い出すともある。高校紛争のころも頑として譲らなかったが、当時の生徒も手紙をよこす。また、自習時間など折あるごとに人生いかに生きるべきかなど話してくれたとの思い出を語る者もある。

ヘーゲル研究の動機は「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」ことへの興味である。そして十年前に『倫理と人間』という本にまとめてみた。『精神現象学』は、若い頃の著作でもあり、非常に魅力的である。ヘーゲルは、常に人は坐折するという。真の知と思っていたものがそうではない。しかし坐折は発展のモメントである。そして坐折がなくなった真の知の段階が絶対知である。ここで神は理性である。私自身、世界は何か合理的なものが支配しているように思う。

感性・悟性は自然科学で学ぶが、理性の世界、心を育てるのは現代社会、倫理しかない。教師も絶対知の立場で教えることができればよいのだろうが、自分自身の反省も含め、なかなかそこまではいかないが、バイタリティとエネルギーをもっていっそうの努力をしていってほしいと思う。

（文責　四谷商　和田倫明）

〔第４回研究例会　講演（要旨）〕

「都　倫　研　と　私」

都立葛飾商業高校　浅　香　育　弘

昭和３９年、葛飾商へ倫社教師として赴任して以来、都倫研に参加するようになった。４０年に友人の吉澤正晶先生が、「パーリ涅槃経における釈迦仏陀」の発表をされ、都倫研に身近なものを感じ、また４２年には紀要の六集に初めて原稿を書いた。活字になったのを見て嬉しく、有難かった。生徒にどう教えたらよいのかと同時に、自分の教師としての姿勢として何を教えたらよいのか、自分自身どうあるべきかという問いを常に持ちながら自分で学んでいるものをまとめたいという気持ちから、以後ほぼ毎回紀要に書くように努めてきた。また公開授業、分科会も非常に思い出深い。自分の公開授業に雪の中多くの先生方がみえたこと、分科会で原典を読み合ったことなど、感激し、楽しくためになったことばかりであった。全倫研の青森八戸大会で、十和田を回った時に、当時会長の中村先生から紀要に書いたことをまとめたらどうかと勧められたこともきっかけとなって、『あさあけ』をまとめた。また、「現代社会」への移行時期のいろいろな取り組みも忘れられない。

その時々の興味ではなく、私自身は常に一貫したものを求めてきた。十五の時母親を失い人生の無常を痛感し、坊主でもないのに戦時中に仏教関係の大学に進んだ。４０年間自分なりに勉強を続けてきたが、現在本当にわかったかといえば、むしろわからなくなったと言える。大学を出て間もなく、ある先生の教えを受けて、現在伝えられているものは本来の仏陀の教えとは違うのではないか、仏陀の本当の教えとは何なのか、ということを考え始めた。釈迦最後の教えについても、無常観とは違ったものが説かれており、根本煩悩を去ってすべての言行が適性であるという考え方が見られ、それは孔子の７０にして心の欲するところに従って距をこえずという境地と共通するものがある。ゲーテのファウスト解釈にも同じようなところがある。人間としてどうあることが正しいのか、共通したところが見られる。

そういうことを求めることが疎かにされてはいないか。教える内容の精選、教え方の工夫も大切だが、一方で人間はどうあるべきか、その根本のところをしっかりつかんで教えていくことをしないと、教育は本質的によくなっていかないのではないか。そういう姿勢をとり続けていくことが教師として重要なことだと考える。

（文責　四谷商　和田倫明）

〔第1分科会……「現代社会の基本的な問題」の研究〕

研究経過報告

都立清瀬東高校　上村　　　肇

第1分科会では、現代社会の基本的な問題について、文献講読とテーマを設定し、教材・指導方法・授業展開例等の研究を行った。

以下、今年度の会合での活動内容を記す。

① 第1回　6月11日(月)　都教育会館

原田(忠生)　葦名(豊島)　新井(東村山)　泉谷(江戸川)　岸本(豊島)　小嶋(東)　近藤(保善)　富塚(荒川工)の各先生と上村の9名が出席。原田先生より『自由民権』色川大吉・岩波新書と『憲法読本』杉原泰男・岩波ジュニア新書の二冊について報告をいただいた。現代社会の授業で憲法学習をどうやってすすめていくかという問題意識で、政治とは何か、憲法とは何か、日本では憲法制定について人民のどのような歴史があったかということを生徒が考えるきっかけとして自由民権運動をとり上げられた。報告のあと討議に移ったが、色川氏の『明治精神史』が紛争世代に最も読まれた本であったこともあり自由民権運動の評価などをめぐって活発な討議が行われた。

② 第2回　7月10日(火)　都教育会館

渡辺(東)　葦名(豊島)　泉谷(江戸川)　岸本(豊島)　小嶋(東)　近藤(保善)　水谷(秋川)　富塚(荒川工)の各先生と上村の9名が出席。渡辺先生より『公害摘発最前線』田尻宗昭・岩波新書を用いた実践報告をいただいた。「公害」の単元を1.環境問題の重要性、2.日本の環境問題、3.身近な環境問題に分け、3について東京の地盤沈下と六価クロム公害をとり上げ、グループ研究をとり入れ、自主的に地域の問題を考えさせる実践が報告された。生徒の反応が「こわい」「怒り」といった情緒的な次元にとどまり現実的な解決について考えるまでに至らないという反省を渡辺先生が述べられたが、むしろそのような実感・印象を大事にする必要があるのではないかという意見が出された。また、水俣病を追求している他校での実践も報告され、公害問題の奥深さの指摘があった。

③ 第3回　9月11日(火)　都教育会館

近藤(保善)　泉谷(江戸川)　福田(町田養護)　水谷(秋川)　富塚(荒川工)の先生方と上村の6名が出席。近藤先生から「僕たち、私たちにとってのヒロ

シマ・ナガサキ」というテーマで報告をいただいた。テキストは『原爆被爆者問題』田沼肇・新日本新書。展開例として示されたプリントは①1945・8・6に何が起こったのか②原爆は何故作られ、落とされたのか③原爆の被害④被爆者問題⑤僕たち私たちに今できることは何だろう、という順で構成されており『はだしのゲン』(中沢啓治)や『原爆の子』(長田新)などを使い具体的に示された。討議では、修学旅行先を広島にし、被爆者の話を録音して文集にまとめた他校の実践が報告され、また「核」について教科書ではどう扱われているか、さらに今日の核状況や核廃絶にも話がひろがった。

④ 第4回 10月23日(火) 都教育会館

岸本(豊島)、葦名(豊島)、新井(東村山)、泉谷(江戸川)、工藤(三鷹)、原田(忠生)、福田(町田養護)、水谷(秋川)、渡辺(東)、渡辺(青山)、富塚(荒川工)の先生方と上村の12名が出席。岸本先生より『メイド・イン・東南アジア』塩沢美代子・岩波ジュニア新書について報告をいただいた。①日本経済の国際化・世界各地の経済問題②資本の輸出入・日本企業の海外進出の目的・近代の日本経済の構造③東西アジアの農民やスラム民の生活・日本製品の氾濫・労働者の状況・日本企業の存在・対日批判という3時間の展開例が示された。討議では生徒の反応が将来にどのような展望を持っているかで違ったものになってくるのではないかということ、また生徒の就職との関連で企業のことをどのように話していったらいいのかという話題がだされました。また、教師が社会の諸現象に対してトータルな見方をしなければならないこと、自分の直面している生徒についてきちんとした分析をしておくことが絶対に必要であるという意見がだされた。

⑤ 第5回 12月11日(火) 都教育会館

葦名(豊島)、新井(東村山)、尾崎(深川)、岸本(豊島)、蛭田(白鷗)、福田(町田養護)、水谷(秋川)、富塚(荒川工)の先生方と上村の9名が出席。上村より『日本人の法意識』川島武宜・岩波新書について報告。日本の土壌における法について考えさせることと、文化的相対化をねらいに交通事故や契約を例にとった展開例を示した。討議では文化的相対主義を乗り越えて「いかに生きるか」まで深めていくべきだという意見が出され、また「近代主義」の問題や近年における生徒・保護者の意識の変化などが話題となった。

⑥ 第6回 2月19日(火) 東京都教育会館

葦名(豊島)、新井(東村山)、泉谷(江戸川)、海野(一商)、富塚(荒川工)、

水谷（秋川）、渡辺（青山）の各先生と上村の8名が出席。富塚先生より山口昌男「政治の象徴人類学へ向けて」（叢書　文化の現在12『仕掛けとしての政治』岩波書店　所収）について報告をいただく。先生は、本論文をそのまま教材化することは難しいであろうが、本論文の視点は「現代社会」の第1編と第2編をつなぐ一つのヒントになるのではないかということを指摘された。討議では、劇場国家論から学校の教室のことが話題になったり、また、ウェーバーの社会学を山口氏が乗り越えているかということにも発展した。社会科学の方法論に関する話が続き、日本の政治をとらえていくモデルのことや、文化人類学の相対性というものが二者択一を完全に否定してしまうところに逃げ道を作ってしまっているのではないかということも話し合われた。

〔第一分科会　参加名簿〕

杉原　安（保谷）　工藤文三（三鷹）　富家　昇（荒川工）　秋元正明（学大附）
草名次夫（豊島）　水谷禎憲（秋川）　泉谷まさ（江戸川）　藤田ナツ子（荻窪）
原田晴夫（忠生）　蛭田政弘（白鴎）　渡辺敦子（東）　伊藤駿二郎（青梅東）
近藤八朗（保谷）　宮崎宏一（江北）　管野広由（京橋）　橋口律子（板橋）
上村　肇（清瀬東）　福田誠司（町田養護）　平栗幹子（南）　小島恒己（北野）
木村正雄（大森東）

〔I〕個人研究レポート

「現代社会」，経済的内容における における グループ学習の実践

都立東高校　渡　辺　敦　子

1.　はじめに

昭和59年4月に初めて教壇に立って以来、正直なところ「現代社会」とは格闘する毎日が続いている。大学の講義では、「現代社会」の成立の過程や科目設定のねらいなどを学んだ。たとえば、「現代社会」は、小・中学校の9年間を通して学習してきた社会科のまとめとしての役割と高校での地理、世界史、日本史、政治・経済、倫理の学習への手引きとしての役割を担っていること、また、「現代社会」は担当する教師及び対象となる生徒により多様な授業展開が許されていることなどを

学んだ。これらのことは、確かに頭の中ではわかったつもりでいた。しかし、実際教科書を手にし生徒を目の前にするとなかなか思いどおりにはいかないものである。つまり、大げさに言えば理論と実践のギャップを実感したのである。特に、経済的分野に関しては、学生時代の主専攻が人文地理であったこともあり、どのように授業を展開していったらよいのかわからなかった。そんな中で、私なりに工夫しなんとか多くの生徒に理解させたいと考えて実行した授業の例をここでは述べたいと思う。

2. 授業の展開

「現代社会」の内容の中でも、経済的な事柄を取扱う部分は、用語一つにしても難しいものが多く、生徒に対し講義式で一方的に説明しても理解させるのが難しい。そこで、なんとか生徒に理解させる方法はないかと考えたところ、地理の学習に用そられたシミュレーションゲームを応用することを思いついた。つまり、何か具体的な事実を与えて生徒自身に考えさせ、概念をとらえさせることにしたのである。

1) 授業計画の作成について

経済的内容の中で、特に生徒にとって理解しにくかったのは、円高・円安と輸出入の関係であったので、再度このテーマを取上げ、プリントを用いたグループ学習の授業計画を作成した。授業のねらいは、「円高・円安の意味の理解と円高・円安に伴う輸出入の変化の理解」である。

2) 授業プリントの内容

以下、実際に授業に用いたプリントの内容を述べる。

<プリントNo.1.> — 学習のすすめ方の説明

A社は日本でも指おりの電気製品会社である。今度、A社は海外輸出向けにポータブル＝ビデオの新製品を開発した。そこで、輸出品の見本市にこの新製品を出したところ、アメリカ、ニューヨークのB社から派遣されていた社員の目にとまり、めでたくB社との取引きが成立した。以下の手順にしたがって、商品と代金のやりとり及び円高(円安)が輸出(輸入)に与える影響を考えてみよう。

<手順>① 4人一組のグループを作る。

②メンバーの名前をワークシート(プリントNo.2.)に記入し、それぞれに次の役割を分担し、A～Dの記号も記入する。

A：A社(輸出者、東京)

B：B社（輸入者、ニューヨーク）

C：C銀行（東京）

D：D銀行（ニューヨーク）

③用意するもの……カード：円札、ドル札、商品、荷為替手形）シート
より作成）
サイコロ：グループに１個

④まず、A社は商品と荷為替手形のカード、B社はドル札のカード、C銀行は、円札のカードをもつ。

⑤A社は新製品の宣伝をB社に対して行う。宣伝の内容はワークシートに記録し、また、製品一台の輸出価格を決定し、記録しておく。

⑥B社は、注文数を決定し、ワークシートに記入すると同時に、A社に依頼する。

⑦D銀行は、サイコロをふり、次のように円レートを決定し、ワークシートに記入する。サイコロの目：１……１ドル＝１８０円
２……１ドル＝２００円
３……１ドル＝２２０円
４……１ドル＝２５０円
５・６…１～４の目が出るまでやる。

⑧B社は、⑤のA社の輸出価格からアメリカ国内での販売価格を決定する。このとき、⑦の円レートによりドルを円に換算しておく。

⑨A社は、支払人にB社、受取人にD銀行を記入した荷為替手形カードをC銀行に渡す。

⑩C銀行は、この荷為替手形カードを受取り、円札カードをA社に渡す。

⑪C銀行は、荷為替手形カードをD銀行に渡し、為替代金をB社から取立てるように依頼する。

⑫D銀行は、渡された荷為替手形カードをB社に見せ、為替代金の支払いを求める。また、D銀行は、再びサイコロをふり、円レートを決定する。

⑬B社は、荷為替手形カードと引換えに、代金を記入したドル札カードをD銀行に渡す。

⑭B社はA社に荷為替手形カードを見せ、商品を受取る。

以上の手順に従い、取引きを行いながらワークシートを完成しなさい。

<プリントNo.2.> — ワークシート

1年　組

	メンバー	役わり
1		
2		
3		
4		

<A社による新製品の宣伝>

<手順No>

⑤ A社が決めた新製品1台の輸出価格［　　　円］

⑥ B社の注文数［　　　台］

⑦ 円レート［1ドル=　　　円］ B社の1台あたり輸入価格［　　　ドル］

⑧ B社のアメリカ国内での販売価格［　　　ドル］　［　　　ドル］ 多い 少ない

1台につき見込んだ利益［　　　ドル］ ——→ 比較

⑩ A社が受取る代金［　　　円］　↑

⑫ 円レート［1ドル=　　　円］ 1台あたり利益［　　　ドル］

⑬ B社がD銀行に払う代金［　　　ドル］→1台あたり代金［　　　ドル］

※

<考察> 空欄に適語を入れ、また〔 〕内の語句は適語を選び、文章を完成せよ。

a) ⑦⑫より、円レートは1ドル=(　　)円から(　　)円になり〔円高・円安〕になった。

b) そのため、アメリカの輸入元B社は、契約したときは1台あたり(　　)円=(　　)ドルを支払わねばならなかったが、代金を支払うときには1台あたり(　　)円=(　　)ドルを支払えばよくなってしまった。ところが、B社はすでにこの製品を1台(　　)ドルで販売すると公表していたので、利益が1台あたり(　　)ドルから(　　)ドルに〔増えた、減った〕。

c) 以上のことから、〔円高・円安〕になると、日本の企業は海外に輸出〔しやすくなる、しにくくなる〕。

d) 同様に〔円高、円安〕と輸出について考えてみると、〔円高、円安〕になると、B社は1台あたりの支払いがドル貨で最初よりも〔多く、少なく〕なるので、利益が〔多く、少なく〕なる。よって〔円高、円安〕になると、日本の企業は、海外に輸出〔しやすく、しにくく〕なる。

e) さらに、日本の企業が輸入するときに、円高・円安はどんな影響を与えるか考えてみよう。　円高になると…

円安になると…

f) 以上表にまとめると

	輸　出	輸　入
円　高		
円　安		

○…しやすい

×…しにくい

<プリントNo.3> — カード及びアンケート(省略)

3）授業の実施状況

まず、生徒を4～5人のグループに分け、次にプリントを配布し、プリントを見ながら説明していった。最初は、わかりにくくとまどいを見せる者もいたが、とにかくやり始めてみると、徐々に理解していったようである。何といっても普段の講義式の授業と違い生徒の生き生きとした表情が私には嬉しかった。あちこちから質問が飛び出し、まるで牛若丸のように教室の中を飛びまわらねばならないのであるが、一人一人の生徒がどの程度まで理解しているのかが手にとるようにわかるので個々に対応できる点はよかったと考える。プリントを配布し、説明を終えるまでに25分位かかり、そのあと実際に取かかったわけで、50分間の授業では終わりきらず全体で、1.5時限程を要した。

4）授業実施後の生徒の感想

授業実施後、生徒にアンケートに答えさせた。その結果をまとめると、次のようになる。

①内容について、良く理解できた………………10名（10.2%）
少し理解できた………………48名（4.90%）
あまり理解できなかった……19名（19.4%）
全く理解できなかった……… 4名（4.1%）

②グループ学習は、たいへんおもしろかった……… 6名（ 6.1%）
おもしろかった…………………40名（40.8%）
あまりおもしろくなかった……18名（18.4%）
つまらなかった…………………15名（15.3%）

③講義式の授業と比べて、たいへんわかりやすい……… 7名（ 7.1%）
わかりやすい…………………47名（48.0%）
あまりわかりやすくない……17名（17.3%）
わかりにくい………………… 9名（ 9.2%）

④これから、今回のような学習を、何回もやりたい…………18名（18.4%）
少しはやりたい…………39名（39.8%）
あまりやりたくない……13名（13.3%）
やりたくない……………10名（10.2%）

これらの結果からも、グループ学習に対し、生徒の反応が悪くないのがわかる。内容についても説明を聞くだけの講義よりは、実際自分で具体的数値を用いて考え

た方が理解しやすいようである。生徒に自由な感想も書かせたが、その中には「自分で考えることができてよかった」というのもあり、とかく暗記のみに陥りがちな社会科を「考えさせる」ことへの一つの足がかりともなりえるのではと感じた。

3. おわりに

今回の「円高・円安と輸出入」に関するグループ学習の試みは、様々な問題点を私に与えてくれた。一つは、グループ学習について、グループの構成の大切さである。生徒の感想の中に、グループを仲の良い者にしてくれたらもっと理解できたのではないかというものが多かった。また、プリントの内容自体についてもっと簡潔にわかりやすいものに改善するべき点が多いことである。そして、最後に最も大きな問題は、講義方式の授業において、いったい生徒はどの程度理解しているのか、という点である。グループ学習においては、自分のわからない点を考え理解していく時間が与えられるが、講義では教師側のペースで話が進められ、自分なりに消化吸収していく時間的余裕が与えられにくいからである。

これらの問題を提起してくれたと同時に、「現代社会」に盛り込まれている内容についてすべて網羅するのは不可能に近いということも実感した。とにかく1つのことでもいいから完全に理解させるにはかなりの時間を要する。今後、また様々なテーマで生徒中心の授業展開を考え、グループ学習なども取入れていこうと決意をあらたにしているところである。

三人の少女たち
青年期の諸問題を考える私にとっての土台

都立豊島高等学校　岸　本　次　司

青年期の問題を扱うひとつの手段として、今までつきあってきた生徒たちのことを話していく、ということも考えられていいと思うのです。それで極めて浅い私の教職経験の中から、忘れることのできない生徒たち三人に登場してもらい、私はできるだけ正直にその人たちとのことを話してみたいと思います。

<その１　Ａ子のこと>　もう数年前になります。私はその頃東京の近郊のある町の（それでも人口は10万ほどあった）定時制高校にいました。入って２年目に担任を持つことになって、なにせ始めての担任なのでかなりそわそわしながらその年の十数人の新入生と顔を会わせたのでした。Ａ子もその中にいました。少し大柄でブルーのスーツがよく似合っていました。Ａ子は入試の成績において三教科ほとんど０点の状態だったので、他の生徒よりむしろしっかりしていそうな彼女の様子に私はずいぶん安心したものです。入学から少したって個々の生徒と面接を行っていったのですが、Ａ子と話していて、まず気づいたのが手首の静脈の上にある真新しい傷でした。その頃のＡ子は私にいろいろ話してくれていたので、その傷のことにもふれることができました。その傷は自殺未遂のあとでした。背景はＡ子に７歳ほど年上の恋人がいること、そして今は自分の家を出てその人の家で寝起きしていること、それを恋人の両親によく思われていないことがつらく自殺しようとした。などがあったようです。定時制に来た理由は将来自分の子供に何かを教えてやりたいからというものでした。しかし何週間かしてＡ子は学校へ来なくなりました。私はそれまでＡ子に対しその恋人と別れ新しくやり直した方がいいのではないかとアドバイスしましたし仕事もいっしょにさがしに行ったりしていたのですが、それでＡ子の恋人の家に訪ねて行きました。最初はなかなか会ってもらえなかったのです。何回かして中に入らせてもらうと彼女たちのいる部屋にお線香がたいてあるのです。その横に小さな袋があってＡ子が恋人とのあいだにもうけた小さな生命がわずかな骨になって入っていました。Ａ子があれほど恋人にひかれる理由は何だったのか、これは難しい問だと思うのですが、ひとつ言えるのはＡ子の生きる場がその恋人との生活（たとえ他人から見れが不可解なものであっても）しかなかったということです。入試の得点から見てもわかるように彼女には中学での生活はほとんど意味が

感じられなかったようです。もうひとつはA子の家のことがあります。小さいながらも専業の米作農家でしたが、父親は私などが家庭訪問で会ってもひと言も口を開くことなく奥の方へ消えてしまいます。複雑な事情のある家だったようです。その後いろいろなことがありましたが、結局A子に学校へ戻ってはもらえませんでした。最後に会った時、彼女は正式に籍を入れ、ひとりの若妻でありました。その何カ月か前二人目の子供をまたなくしてしまうという不幸に会いながらも、A子ははつらつとしていたと思います。そのようになるのが結局彼女にとってよいことであったのなら、私は男と女のことをやはりずいぶん軽く考えていたのだなあと思うのです。

<その2　B子のこと>B子が1年生に入ったのは4月ももう半ばを過ぎたころでした。おとなしそうな御両親につれられて職員室に入って来たB子ははにかんだような様子で、私にはそのあたりにいくらでもいる少女と同じに見えました。将来は女優になりたいと入学テスト代りの作文に書いていました。その時はそれだけの印象でした。しかしそれから1カ月もたたないある日、B子がきのう家を出たまま戻って来ないというしらせが親から届きました。クラスメイトの話などからするとどうもB子は同級生のひとりと学校の帰り駅前で若い男に声をかけられて車に乗り何処かへ行ってしまったとのことです。私はB子の両親たちと少い情報をもとに捜索をしたのですが何も手掛りがつかめません。しかし三日ほどしてB子はひょっこりと帰ってきたのです。それもぐったり疲れきった様子でした。そしてまだ戻ってこないもうひとりの方を心配していました。B子とのつきあいはそんな始まりだったのです。とにかく家に帰りたがらないのではらはらのし通しでした。いちどはどうしても帰りたくないというので東京の私の家にとめたこともあります。その時はB子の案内で翌日彼女が小さい頃母と二人でくらしていたという下町の小さなアパートをたずねました。狭い階段をあがったつきあたりの小さな一間でした。そこにB子と母親は前の酒乱の父親の目をのがれてひっそり生活していたのです。保育園へも行きました。勤めから帰ってくる母をどの子供より遅くまで残って鉄の柵の所にしがみつきながら待っていた話をぽつりとB子はしました。それからしばらくして今の父があらわれたこと、その父が嫌いなこと、おもしろくなくて小学校からタバコを口にし、中学では荒れまくったこと。B子の話は続きます。

それからのB子の学校生活は順調とまではいかなくてもぎりぎりの所で続いているといった感じでした。時々ふと考えこんでいるような時もありましたが、仕事の方でもウエイトレスなどを主にやってB子なりにしっかりと勤めているようでした。

そして2年生になって、私はB子が市内に小さいアパートを貸りて住むようになったということをきいたのです。家にいて父親といさかいばかりしているくらいならその方がよいのかとも思いました。様子をたずねると金銭のことには無頓着だった方のB子がガス代はいくら食費はいくらと楽しそうに話してくれるので、この方がよかったのかとも思ったりしていたのです。そんなある日B子の両親から連絡がありB子のアパートを引き払わせることにしたというのです。理由はB子が働いた店の店長と以前からつきあっており、それが店長の妻などにも知れわたり、大もめにもめているというのです。アパートの方はともかくその店長とのことがあるのではと思い、私はB子と三人で話をしました。短くパーマをかけ、うわ目使いでこちらを見る私と同じ年ぐらいの男でした。結局B子と店長はこれきりで別れることで話は一応まとまりました。そしてB子をあと何日かで引き払うというそのアパートまで私はおくって行きました。その翌朝でした、B子と店長とは姿を消してしまったのです。駈け落ちです。車で出かけたことがわかったので、すぐ警察にも知らせ、店長の友人の家などにたずねて行きはしないかと連絡をとりました。そしてじっと何日か待っていたのですが何かわかればとB子の両親といっしょに店長の友人が多いという北関東のいくつかの都市もまわってみました。しかし結局、何もわからなかったのです。店長の妻は妊娠していたそうですが、その子をおろしたとききました。B子の両親もたいへんでした。本当にいい人たちなのですが。ふつう子供が問題を起すと親はせめられるものかもしれません。私はなぐさめていたように思います。車でB子をさがしながら私はB子の心の中を考えていました。やはりこうするしか彼女にはなかったのかと。その後何か月かしてB子は母にだけ電話で連絡をとってくるようになりました。そして店長は離婚後、B子を籍に入れ、二人でくらしていることを最近ききました。

<その3　C子のこと>　C子は2年の4月に入ってきました。となりの県の県立の女子高をやめて来たのです。他の転編入生に似て、C子も始めから荒れていました。3月のおわりに面接をした時は確かに黒かったその髪は真っ赤にそめてありました。C子の家は小さいながらも電気関係の会社で父が社長です。また兄は国立大の理学部へ、弟も東京の私立高へ通っています。C子も小さい頃から熱心に育てられたようです。少年少女合唱団の思い出を語ってくれる時、まだおだやかだった一家の様子が目に浮ぶようでした。しかし中学・高校とC子はしだいに変っていきます。どちらかというともの堅い県立の女子高に入ったC子はバイクのことで教員団

と衝突してしまいます。両親はいろいろな方策を使ったようですが、ついに退学。そのことを母親は深くうらんでいるようでした。それからC子はとめどもなく変って行きます。近くの街で暴力団関係の男とつきあい出し、親には自立すると言ってアパートに出ますが、シンナーパーティーを通報されて、家に連れ戻されます。それから気持ちを新たに、調理師になるため学校へ通い出しました。しかしおそらくシンナーの後遺症と思われる発作を起こしてそこもおわれました。そんな状態で入ってきたのでした。ある日のこと青ざめた顔のC子が遅刻して来ました。どうしたのだときくと死にそこなったとのこと。C子の車を見るとメチャメチャでよくここまで辿り着いたと思われるほどです。前日の深夜から男友達とドライブに出かけ山道でカーブをきりそこね崖から落ち、途中の鉄柱にひっかかり命はたすかった、とのことでした。そんなC子も時には何か考えることがあってやり直そうと決心するのですが何日かするとまた元に戻ってしまうのです。自分で自分のことに嫌気がさしているようでした。しかしそれを自分ではどうしようもない。そんな状態がずるずる続いていたように思います。両親、その中でも特にきびしい父親はあらゆることを試みたようです。決して放っておいたのではなく、精一杯C子とぶつかっていたように思います。ある日C子の家へ行くときのう父とけんかをして父がC子の部屋のドアを鉄のパイプでこわしてしまったことなどをさびしそうな笑いをうかべながら語ってくれたこともあります。それから私がその学校を去って半年ほどした頃のことです。突然C子から結婚の招待状が届きました。私は式に出て幸せそうなC子を見ました。その結婚には絶対反対だったというC子の両親も姿を見せていました。その時は(そしてその前も)もう何もできない私でしたが、これでC子が落ちついてくれるなら、と祈りたい気がしました。

＜まとめ＞ 本当にとりとめのない話になってしまいました。これだけで言いつくせたようでもあり、まだまだそれぞれに言わなければならなかったこともあるような気がいます。しかし、それぞれの人のことは私にとって大切な思い出です。私の中でこれからずっと考えていきたいことばかりですし、青年期とは何かということを私が考えるとしたら、やはりこの中から出発するしかないと思うのです。この土台の上にどう授業が展開できたか、それは実際に授業をした後でまた御報告させていただければと思います。

1・2学期の授業から

―生徒の授業感想を通して学ぶ「現代社会」―

都立荒川工業高校　富塚　昇

° はじめに

本校では「現代社会」は1・2年にわたって2単位ずつ分割履習することになっている。これは工業高校の特色を生かすためであり、やむを得ないことである。ただ、第1編の現代社会の基本的な問題と第2編の現代社会における人間の生き方の配列は、第1編が中学校の公民と内容的に重複する部分が多いので、青年期、文化、倫理を1年で実施し、2年で政治・経済的な内容を扱うことにしている。今年は1年の担任ということもあり、1年全クラス担当することになった。おおよその年間授業計画は、1学期に青年と自己探究、2学期に人間生活における文化、3学期に現代に生きる倫理ということにした。使用教科書は、三省堂『新現代社会』である。尚、以下の文章における〔　　〕内は、1・2学期期末考査時に書かせた、生徒の私の授業に対する感想である。私の拙ない授業に対して過大に評価してくれている面もあるが、これは書いた者に対して加点をするという事情もある。

1.　1学期の授業

青年期の問題を入学してすぐの時点で行うことにためらいがなかったわけではない。その理由の一つは、生徒の方に青年期を学ぶことについての readiness ができているかどうかということ。〔この1学期間の現代社会は、ほかの地理や歴史よりもおもしろくなかった。青年期ばかりやっていて、地理や歴史とちがって、なにがなんだかわからなかった。〕(もちろん、このような感想がでてくることは、readiness ができているかどうか以前の問題もある。) また二つ目として、私自身が青年期の延長が言われる中で、まだその中に位置すること、ということもある。もちろん、このことを逆手に取ること、すなわち私自身を対象化することも可能であり、そこに1学期の最初にもってくる一つの意義があるわけであるが、場合によっては非常にシンドイことでもある。ただ彼ら自身が入学試験という一種の通過儀礼を経たばかりであること、「社会科」というものが単なる暗記科目であるという観念を打ちやぶるためには、自分自身を考える契機を与えるという点で意味のある教材であるように思う。〔高校の社会は、ちょっと大人向きになったような気がする。〕〔高校に入ると中学とは違って歴史や地理がなくなり、大人になるために現代社会

は勉強するんだと思った。だけど、すごくむずかしいと思った。なぜかというと、現代社会はすごく考えさせられるからです。地理や歴史などはただあん記するだけだったけど、高校はそうはいかないんだなあーとつくづく思った。〕〔中学校で勉強していた地理・歴史・公民などとちがって、社会をまるで自分の事を勉強しているみたいで興味がそそられたところがあった。〕

したがって、授業においては通過儀礼を一つのkey wordにして、伝統的な社会と近代社会との対比において、なぜ近代社会において青年期が生じるのか？ということをまず問題とした。そして近代社会の成立の要因としての産業革命と市民革命にふれることになった。つまり「青年」というものが登場してくる歴史的な位置づけを行い、その上で社会的な広がりをもたせることに留意したわけである。〔私は歴史や地理が好きでした。だから始めのうちは現代社会はつまらないと決めつけていました。でも現代社会の中には歴史もあり地理もあり公民までがあることを知りました。〕

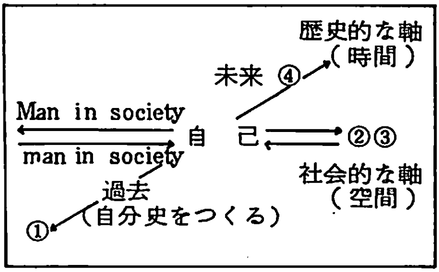
さて、そのような流れの中で中間考査であるが、これは先にあげた、自分自身を考える契機を与える、という目標に照らして「自分史をつくる」という課題で作文を書かせることにした。そのために授業は彼らが生まれた1968年以降(ちなみに私は1958年生まれである)の歴史をふり返ってみた。

〔今まで、自分史をつくるということで作文をかいてきたわけだけど、こうやって書いてみて、自分は毎日目標をもって生活をしていないことがわかった。これからは一つでいいから目標をもって生活していこうと思う。〕

〔さて、これからの私の将来と社会はどうなるかということは…… これからの将来はこれからの社会にかかってくると思う。これから社会はたぶん人口増加で食糧に困ると思う。核戦争が起こる可能性も出てくる。こんな危ない世の中で、これからの私の将来を考えなくてはいけないと思うし、私はいい時代に生まれてきたのか、それとも悪い時代に生まれてきたのかと、考えてしまう。これからの社会はどんどん変わっていき、最後には、大変なことになってしまうと思う。しかし、なんにもしないでどんどん悪い方、悪い方にいってしまうのではいけないと思う。私たちが社会を変えて、これからの社会をより良いものにしなければいけないと思う。〕

中間試験終了後、青年心理の問題にはいった。〔現代社会で青年期を学んだが、自分のことと比べても同じというのがよくわかる。それは第2はんこうきのことな

んだけど、なんか頭の中がむしゃくしゃしてなにかされると、すぐなぐりたくなるような気持ちだったり、勉強の時にもちょっとでも変なことがあると勉強がやりたくなくなっちゃたりする。あと性のことに興味をもつというのはぜったいほんとだね。性のことに興味をもたない人は絶対いないと思うね。ぼくなんか中一のときから興味があったもんね。〕ここで「自分史をつくる」ということとの関連で、このテーマの最終的なkey word は identity というやっかいな代物である。左図のような視点から、「個人的自立と他者との共存」「人生選択と進路選択」という教科書の言葉も用いながら、①②③④の方向を認識することの重要性を説明した。ここの授業が生徒にとっても私にとっても、1学期で一番むずかしく、どこまで私の意図することが伝わったか疑問が残るものとなった。



1学期の最後の授業は、④の方向性を示す意味で、私自身が高校時代に聞いて感動した曲を聞かせた。それは吉田拓郎の「人生を語らず」というものである。（朝日が昇るから起きるんじゃなくて、目覚める時だから旅をする。教えられるものに別れをつげて、届かないものを、身近に感じて………今はまだまだ人生を語らず、目の前にも、まだ道はなし、越えるものはすべて手さぐりの中で、見知らぬ旅人に夢よ多かれ） これは選曲が悪かったようである。〔先生がラジカセをもってきたとき何をするのかと思ったら、急に音楽の授業みたいに歌をきかされた。あんなのがどうして現・社に関供するのかと思ったが、今思うと青年に関する詩をきかせたかったのかなと思った。〕〔一学期最後にカセットテープで聞いた歌も気晴らしになってよかったと思う。〕ただ、これは現代青年文化の問題でもあるが、現在、私が聞かせたような曲をさがすのは、むずかしいように思う。そして最後に、1年半ほど前に私が聞いてドキッとさせられた曲も聞かせた。こちらの方は生徒になじみやすかったのだが…… それは松本隆作詩 薬師丸ひろ子歌「すこしだけやさしく」という曲である。（少しだけ優しくしてあげる もしも心に怪我をしたなら 淋しさって繃帯で縛ってあげる 少しだけ優しくしてあげる 風に吹かれた手紙のように 私の中に舞い込んだ人 夢を追うのも疲れたよって 苦笑いして外を見ないで……）

2. 2学期の授業

2学期の人間生活における文化の授業は、世界の諸地域の文化と文化交流、日本

の生活文化と伝統、現代の文化という三つの課題がある。世界の諸地域の文化と文化交流の持業においてまずkey word となる言葉はethnocentrism であり、世界の文化のいくつかを取りあげることによって目標としたことは、文化的相対主義の認識を高めることである。このことについて森茂岳雄氏は次のように述べている。「すべての人間(文化)が同等であり、相対的な存在であるという『文化的相対主義』の認識は、社会認識の基本的前提である。すなわち、社会事象の歴史的・地理的・経済的等の認峰に先行する基本的認識である。なぜなら、社会における行為主体である『人間』とその人間が生み出す『文化』についての正しい認識なくして、その人間の行為によって成立する『社会』についての正しい認識は成立しないからである」(「社会科教育における『人類学的認識』の意義」『社会科教育研究』№43 1980年 3月)〔1学期の青年のところよりよかった。同じ人間なのに物の考え方がちがい、いろいろあるんだなあと思った。〕〔人間の生活と文化を学んで日本はやはり甘えの文化だと思いました。インドとかいろいろなまずしい世界もある。自分では日本で生まれてよかったと思いますが、インドの人もたぶんインドがよかったと言うと思います。それで一つ自分のためになった事は、いちがいにどこの国がよいか、どこの国がわるいかはいえないと言うことがわかりました。〕

次に日本の文化の特質へと進んだが、ここでの大きなねらいの一つは、青年期の所とも共通することであるが、自分自身を考える契機を与えるということである。〔ここで学んで心に残った事が2つある。1つは「人並みにしよう」という日本人の考え方で、自分はこれはあまりいいことではないと思ったので、これから、自分の考えをしっかりもった行動や生活をしていきたいと思う。それともう1つは「恥を基調とする文化」で、これもあまりよくないと思う。必要だとは思うが、「恥」だけでかたずけるのではなく「理由」というものをはっきりしたことを、見つめ直していきたいと思う。〕〔日本人は外国からいろいろなことを吸収するけれど、そのためにひつようのないものやみんながもっているからというためによけいな物までかってしまうことが多いと思う。人間関係も内と外に分けて考え行動する(考えてみると今までがそうだったと思う)ことや世間体を気にする。サモアの社会では競争をするとけいべつされる。自由に生きればそれでいいなどと日本とはギャクです。日本ではテストのせいせきにしろ1人でも多く高い地位に立とうとすることがとうぜんのような考え方です。しかし高い地位にいたからといっても良い人生がすごせるかとはかぎりません。もっと人生を広くみて生きてゆこうと思いますが、この文

も特別配点の10点をとるための人より多い点をとるために書いています。〕

2学期の最後の課題は社会の変化と文化の変容ということである。現代文化の特徴を、社会の変化との関連でどのようにとらえるべきであろうか。私はここでのkey word を現代社会の、ある局面を示す言葉として、産業社会、情報社会、消費社会の3つを考えた。〔テレビなどを見ているとCMが良く入る。日本ほどCMを流す国はないそうで、1つのCMを作るには多くの金がつぎこまれている。それでメーカーは損をしないのか不思議だったが、その分物が売れるということでカバーしている。CMは日本人の性格をうまく利用している。「テレビで出た物だ」と言って物を選んでしまう。「これはあまり有名ではないから買わない」と言って買わない。2学期の現代社会では、今までになく社会の仕組が良くわかった。〕〔今、マスコミが、なくてはならないような生活を、おくっている。マスコミによってながされた情報をそのまま自分の考えにとり入れてよいのだろうか。日本人はマスコミの情報をそのままうのみにしすぎると思う。やはり自分の確かな考えをもつべきでその考えはそうかんたんにかえるべきではないと思う。〕特に、消費社会の問題は現在と今後の社会の方向を見る上で、非常に論争的なテーマであり、現代社会の仕組みをときほぐすためにきわめて有効なものであると思う。またそれは山崎正和氏の『やわらかい個人主義の誕生』でも示されるように、消費社会の中での人間の生き方ともかかわってくる。そしてそれは私の問題に帰って言えば、3学期に「現代に生きる倫理」を取り扱う時、生きがいの追求や哲学することの意味とどのようにつながりをつけるかと言うことになる。

3. 反省と課題と……

次に私の授業に対する正直な感想をいくつかあげてみる。〔とてもおもしろくなかった。どうしてかというと、なにがなんだかわからなくて、それに内容もおもしろくなかったから。もっとおもしろくなるようなものをやってほしい。〕〔はっきり言ってつまらなかった。先生の話しばかりで、ぜんぜん進まないし、なにが言いたいのかわからない。むりにきいているとねむくなる。だからやむをえずねるか、ノートをうつすだけでまったくつまらない。〕〔先生はなにをやっているのかを自分ではわかっているでしょうね。でもぼく自身には何をやっているのかさっぱりわかりません。社会の勉強をすることは大切だけれどももっとわかりやすくすればもっともっと勉強になると思います。〕〔現代社会はなにを学ぶかよくわからないし、聞いていておもしろくないのではやく歴史を学びたい。〕

まさに一人よがりの授業になっている、ということである。反省しなければならないと同時に、「現代社会」の授業にあたって、それぞれの学習内容について、どのように意味づけをするかということの重要性、そしてむずかしさを改めて思い知らされた。またこの問題と関連することであるが、２学期の最後の方の授業で、突然ある生徒が次のような質問をした。「『現代社会』って一体なんなんだょー、全然わかんねーよー……」この質問に対し、私は一瞬たじろぎながらも、すぐ立て直し眉間にしわをよせて「気合い」で答えた。しかしながらそれで解決するような問題でないことは言うまでもない。それは自分自身が生きている現代社会（現代社怪）というものを自分なりに把握しようと試み、その中で「現代社会」の授業を実際に行っている私にとって大きな問題である。つまり質問は後者の「　」つき「現代社会」を問題としているわけであるが、そのことは私にとって必然的に前者と結びつかざるを得ない。「現代社会」においては、社会の問間と自我の問題とをそのどちらも等閑視するべきではなく、社会を自我の問題からアプローチしたり、自我を社会の問題として扱う所に、社会と人間の現象を統一的に把握しようとする試みとして意味があるとするならば、「『現代社会』とは何か」という質問は、授業をふくめて私自身のプラクシス（「実践」とは人間科学にとって根本的な全体なのである。レヴィ＝ストロース）が問われるということであり、それは私にとってきわめて現代社会（現代社怪）的な課題となるからである。

最後に生徒の感想をもう一つ紹介してしめくくりとしたい。

〔この場を借りて先生へ言いたいことがあります。ぼくは、はっきり言って中学の時よりも今の社会はおもしろいと思います。でもそれも、おもしろい所とおもしろくない所とがはっきりしています。先生も今の授業の状態に満ぞくしているわけはないと思いますが、もっとぼくたちの興味をひくような勉強だったらと、いつも思います。勉強とは、もともと興味をひくようなものじゃありません。でも現代社会は例外だと思うんです。中学の時は、地理や歴史ばっかで、「こんなことやっても社会に出た時に本当に役に立つのか」と言う疑問がありましたが、高校の社会科というのは、本当に役に立つ道徳＆保健のような感がしました。三学期は興味深い授業を期待しています。〕

体不自由養護学校における社会科

清瀬東高校　上　村　　　肇

1.　はじめに

現代社会を担当するようになってから2年になろうとしています。授業について現在感じていることと同じようなことを前任校の江戸川養護学校の時代にも感じていたようです。生徒の実態がまったく違うので単純に比べることはできませんが、肢体不自由の養護学校で同じ年代の生徒たちがどのように学んでいるかということの一つの例としてご紹介したいと思います。

2.　学校の紹介（昭和57年度の資料による）

都立江戸川養護学校は総武線の新小岩駅から南東約1.5キロほどの江戸川区本一色町にある。江戸川区、葛飾区、江東区、墨田区、千代田区、中央区の6つの区から233名の生徒が10台のリフト付きスクールバスで通学している。この他に小・中学部には健康上などの事情で通学できない生徒のために訪問学級があり、15名の生徒が在籍している。

教職員は小・中・高等部に92名、機能訓練に7名、寄宿舎に12名、他に保健室・事務・用務・給食・警備を含めると総数135名の大所帯である。

高等部には60名の生徒が在籍していたが、8割弱の生徒は脳性まひが主障害で1級と2級（重度）の障害者手帳を交付されている生徒が多い。他は筋ジストロフィーの生徒が4名と多い。生徒のほとんどは程度の差はあるが知的な面での障害を重複している。

高等部の教員は22名いるが、授業では車椅子から降ろしたり乗せたり、タイプライターをセットするなどの介助が必要であり、少人数のグループを担当していてもあまり余裕はない。給食も、生徒を介助しながら教員自身も食べるのである。生徒60名のうち食事・移動・排泄などほとんどに介助に必要な生徒は23名であった。

3.　教育課程について

学校生活はゆったりとした時程をとる必要から、1時限の授業は45分間で、休み時間は15分とっている。月・火・木・金は午前3・午後2の5時間授業、水曜・土曜はそれぞれ3、2時間の授業で1週間に25時限の授業である。

次に示すのは昭和57年度の高等部の教育課程である。

① 必修教科は17時間で次のように配当されている。（数字は週当り時数）

	国	社	数	体	保	音	HR	ク
1年	4	2	4	2	1	2	1	1
2年	4	2	4	2	1	2	1	1
3年	4	3	4	2	0	2	1	1

② 選択教科は8時間で次の科目が開かれている。

4時間 ― 美術・工業・家庭・タイプ・合科

2時間 ― 商業・理科B・英語B・作業・タイプB・生活・合科・訓練

6時間 ― 理科と英語が3時間ずつセットになっている

③ ことばや数の学習以前の段階にある生徒には、国・社・数・保と選択の時間には別枠で授業を行っている。午前中は着替えの後、散歩やリズム運動などで体を使い、午後は粘土遊びなど手のはたらきの発達をねらった内容である。57年度は16名の生徒がこの授業のグループに入っていた。

④ ホームルームは生活集団であるので、同じクラスの中にいろいろな知的レベルの生徒がいるように、学年ごとに同じような2クラスを編成した。

4. 社会科の授業

各学年とも、知的レベルでは幼稚園レベルから高校生レベルの生徒まで差が大きいので、それぞれ2つのグループに分けて授業をしている。小学校3、4年くらいの線で分けている。

内容は1年が地理、2年が日本史、3年が進路と政治・経済である。地理を例にとると、1つのグループは世界の地誌を学び、もう1つのグループは学校の教室配置の図を見て校内でオリエンテーリングをやってみたりしている。本稿では「現代社会」との関連を考えたいので、主に3年の授業に焦点を合わせていくこととする。

小生が担当したグループは9名で高校の教科書を読める生徒からようやく芸能週間誌をスターの名前を頼りに読むレベルの生徒までで構成されていた。卒業後のことを考えると社会福祉の理念と制度について重点的に扱うこととなる。

4月。中学校の公民的分野の教科書をテキストにスタートする。ただし図や写真の活用が主で、文章を読むのは無理であった。1学期は憲法を中心として政治の分野を扱った。生徒によっては母親が某政党の日常活動をしていたり、また、母親が自分の郷里で起こった選挙違反に激怒していたというようなエピソードが出され、それなりに興味をもっていたようであった。彼らはもう有権者になっているが、し

っかり投票しているか気になるところである。7月に入ると職場や施設での実習(現場実習といっている)がはじまり、各自が校外へ出て(場合によっては施設に泊り込んで)実習することになる。

2学期の前半は、いろいろな商品の価格などを調べた。2学期に入ってからはNHK教育テレビの中3向け放送を録画して3月までに8回ほど視聴した。人数が少ないことから、画面を止めて話し合いをすると効果的であった。10月の半ばからは国税庁の『高校生のための税金教室』というパンフレットを使用して、税についての基本的な知識を身につけることをねらった。

3学期は卒業目前となり、東京都の『社会福祉の手引き』を使い、福祉制度のアウトラインから具体的な援助について勉強した。生徒たちは個々の援助の制度についてはよく知っているものもあった。たとえば、都バスの無料パスを交付されていたり、家族の車が駐車禁止の指定除外になっているといったことである。ひとつひとつの制度だけではなく、自分に関連することについて高い視点から見ることができるようにしたいということがここでのねらいであった。

人数が少なく気心もよく知れていることで、内容のレベルは高くはないものの、担当者としてはなかなか楽しい授業であった。余談であるが、グループの中に排泄のコントロールの苦手な子がいて、授業中突然尿意をもよおして足を車椅子の前でバタバタさせることが毎時間のようにあった。小生は車椅子を押してトイレに駆け込み尿瓶を当てるのだが半分以上は失敗(間に合わない/)であった。彼の依類を取り替えている間はもちろん授業は小休止となってしまった。今考えてみると授業は正味30分くらいだったのかもしれない。

5. 現在思うこと

まず、生徒の生活経験の不足をうまく補っていくことが必要だということである。江戸川養護では介助者がいなければ外出できないケースが多く、生活経験の不足が特に著しく感じられた。かえって井戸端会議に同席したりして「耳年増」になってしまっていることもあった。買い物や電車に乗ること、多勢の人たちと交流していることなど当然のこととして進めていくことはできなかったのである。

淵瀬東では、新聞などほとんど読んでいない場合に、財政や金触といったテーマがお手上げになってしまう。税金や借金は高校生にはほとんど縁のない世界であるから、ニュースに関心があるかどうかが重要になってくるのだろう。

数学が美しい体系性を誇るのに対し、社会科は複雑な現実を対象とするので、ど

のようにして「困難を分割」していけばいいかが明確ではない。学習者の状態を正確につかんでおくことが出発点なのだろう。

生徒にとって切実な問題には特に盛り上がるが、江戸川養護では進路の問題がそれであった。高等部卒業後に行き先がなくなり「在宅」になるということは社会から疎外されてしまうことになりかねない。重症心身障害児のA君には生活実習所へ入所することができるように福祉事務所などと話しをしていったが、あいにく、A君の住む区にはなく他の区の生活実習所への入社を希望するしかなかった。A君たちが高1のときに23区内の生活実習所は都立から区立に移管されてしまったためにA君のようなケースは入所できなくなってしまっていたのである。地方公共団体の種類を一般的に説明するよりも同級生の状況を話したほうが彼らにとっては印象深かったにちがいない。

清瀬東の1年生にとって何が切実であるかを見きわめるのは難しいが、むしろ問題意識を持つように導いていくことが重要なのかもしれない。

6. 筋ジストロフィーの生徒について

筋ジストロフィーにはいろいろなタイプがあり、その経過もさまざまである。しかし大部分を占めるドウシェンヌ型や福山型の場合、20代前半までに不帰の人となってしまうケースがほとんどである。高等部卒業ということは危険地帯に足を踏み込むということを意味するのである。

筋ジスの生徒は「一期一会」で生きていかなければならない。脳性まひの障害の生徒と一緒に勉強していても将来への展望はまったしちがったものになる。指導内容を考えることはきわめて難しい。

私の担当していたグループのBくんは1月にカゼをこじらせて入院し、気管切開の手術を受けた。そして、卒業式には身に何本か管をつけ、移動ベッドに乗って出席した。彼は卒業式の8日後、容体が急変して他界した。私は3年間社会科を担当したことで彼の内面にどれだけ資することができたのかと暗然となった。

7. 最後に

生徒の生育歴をつかみ、生活経験を考慮すること。生徒にとって切実な問題を問いかけ、さらに広い視点へと導くこと ― こういった「現代社会」指導上の課題は養護学校においても共通しているのである。

状況説明がかなり長くなってしまったが、都内の同年代の生徒たちがどのように学んでいるかという一つのケースとしてお読みいただければ幸いである。

第２分科会

研究経過報告

小金井北高校　古　山　良　平

①　第１回　６月１５日(金)　都教育会館

小林（大崎）、蕪木（九段）、市野（大山）、佐藤（小松川）、宮原（荒川工）、大野（水元）、幸田（玉川聖学院）、原田（大泉学園）の各先生と古山の９名が出席。

まず幸田先生から、「社会科基礎用語テスト」と題して、公民と現代社会の関連性及び調べながら社会科が好きになるような授業方法を模索して、中学校の地理・歴史・公民の教科書から社会科基礎用語100語と重要人名25人を精選し、入学前の春休みにノートに調べさせて入学後最初の授業時に提出させた報告がなされました。このテストは落ちこぼれ防止の意味もこめられていましたが、以後用語テストの追跡調査を行い、基礎力と事後テストとの相関関係を探るつもりとのことでした。次に小林先生から、プリントを中心にした倫理分野の学習についての報告がなされました。発達段階のちがいから、高二倫社とはちがっていかに原典資料をかみくだいて生徒に伝えるかに意を砕いておられるとのことでした。そして私、古山は学校レク材の取り扱い方に関する一考察（グループワーク・トレーニングによる授業の変容）という題で話させていただきました。これは教科内容そのものの教材化ではありませんが、ふだん授業でやりにくいと感じているクラスに人間関係円滑化のためにゲーム的要素を取り入れたグループワーク・トレーニングを実施し、自己のより良い把握と集団の連帯をめざしたものです。

②　第２回　７月６日(金)　戸山教会

大野（水元）、宮原（荒川工）、原田（大泉学園）、増渕（片倉）、幸田（玉川聖学院）、小嶋（東）の各先生と古山の７名が出席。

大野先生から、「現代社会」の「青年期」単元をどう構成するかをテーマに報告がなされました。10種類ほどの教科書を検討され、先生が自主編成された内容をプリントで示されました。又、造倫理社会」の「青年期」との内容の相違点などお話しいただきました。先生はカウンセラーとして生徒の生活相談もしていらっしゃいますが、その御経験から教師は精神病理の基礎知識を持つべきだという意見は印象深いものでした。一個の人間存在としての生徒への接し方について襟を正させられ

る思いがしました。

③ 第3回　9月14日(金) 戸山教育会館

宮原(荒川工)、原田(大泉学園)、幸田(玉川聖学院)の各先生方3名が出席。

宮原先生より、選択授業での実践報告をいただきました。テーマは「工業高校における哲学のすすめ」で、プリントを多用して「考える」ことに重点を置いた授業をされておられるとのことでした。特に『哲学のすすめ』岩崎武雄著の読書を通じて、一般に疎遠なものに思われがちな哲学という言葉が、「哲学する」という形で日常生活の生きざまと密接に結びついていることを伝えることに重点を置いておられるとのことでした。

④ 第4回　11月2日(金) 四谷商業高校

第3分科会との合同分科会で、和田(四谷商)、井上(八王子東)、原田(大泉学園)、辻(田無工)、幸田(玉川聖学院)、宮原(荒川工)、大堀(四谷商)、小河(板橋)、小嶋(東)の各先生方と古山の10名が出席。

前回の出席者数が少なかったこともあって、宮原先生から再度「工業高校における哲学のすすめ」について、また原田先生から「新設五年目の高校における哲学のすすめ」という題でご報告をいただきました。原田先生からは、魔術と科学・哲学のちがいを際立たせるのに、手品の種明かしから説明するという興味深い導入例が示されました。両先生とも哲学的なものの見方、考え方に重点を置いて指導されており、生徒の感想文には認識の深まりが感じられ、感銘深いものでした。

そして和田先生からは商業高校におけるクラス経営の工夫などが話され、また、『永遠の少年、『星の王子様』の深層』(M.L.フォン・フランツ、紀伊國屋書店)についてご報告がありました。クラス経営については、合唱祭・文化祭など行事の役割分担が民主的な全員合議制ではかえって不活発でうまくいかないので、リーダー格を育てて、彼らに企画を立てさせておられるとのことでした。またユングの唱えた「永遠の少年」という概念は、現代の「モラトリアム人間」の特徴と相通ずるものがあり、「永遠の少年」の心理メカニズムをとらえ、管理社会の中での生徒理解と、主体性の発露を模索していこうという試みが提示されました。

⑤ 第5回　12月7日(金) 四谷商業高校

第3分科会との合同分科会で、和田(四谷商)　辻(田無工)、井上(八王子東)工藤(三鷹)、蛭田(白鷗)、宮原(荒川工)、原田(大泉学園)の各先生方7名が出席。

まず工藤先生から旧約聖書を使った授業例をお話しいただきました。「創世記」を人間の「自我の誕生」という視点から抱えられ、「学ぶことの意義」に結びつけていくという展開を示されました。次いで井上先生から、内村鑑三の日韓併合に対する論をテーマにお話しいただきました。主に福沢諭吉の対朝鮮観と比較しながら、福沢が脱亜論に走ったのに対し、内村が日露戦争に反対したあと朝鮮の人々に大きな人気があったことを比較し、両者の国家論、近代化に対する考え方の相違などについて話されました。

⑥ 第6回 1月18日(金) 四谷商業高校

工藤(三鷹)、井上(八王子東)、和田(四谷商)、藤田(荻窪)、辻(田無工)小嶋(東)の各先生方と古山の7名が出席。

工藤先生と井上先生から加藤周一氏の全倫研記念講演「日本文化の理解のために — 比較的方法について — 」についてのご報告をいただきました。日本の文化・社会について理解しようとする時、明示的・暗示的な比較による判断を行っていること、比較は多視的である必要があること、比較点は少数であるべきこと、適切な比較の観点として、社会の全体としての方向性・世界観・倫理・時間の概念・空間の概念の5つがあること、等が指摘されたとのことで、また日本文化の主な特徴としては、超越的存在・価値や抽象的・包括的哲学体系の不在と個人の集団への組み込まれ現象などがあげられた、とのことでした。両先生の御報告を受けて、超越性の不在という観点自体が西欧的な価値観にとらわれすぎているのではないかという比較の観点の有効性の検討から始まって、超越性とは何か、それは体験してみないとわからないのではないかとか、個人の集団への組み込まれ現象についての具体例の展開等、活発な意見交換が行われました。

全体として第二分科会は教科書第二編の「現代社会と人間の生き方」の研究をテーマにして、文化・青年期・倫理分野を扱ってきました。沢山の先生方の様々な教材化の試みに触れることができて、まだ経験の浅い私は作業学習・問題解決学習がまず教師に求められていることをあらためて痛感しました。また大野先生のカウンセラーとしての御発言が私に教育のむずかしさを深く考える機会を与えてくれました。つまり、生徒が実人生の対人関係で不適応をひきおこし、問題をかかえてシラケて否定的アイデンティティを選択している時は、生徒の心の問題が解決されない限り、いかに熱心に教材内容を伝えようとしてもそれは生徒の心に響いて行かないということです。注入ではなく開発に教育の原点を置き、生徒の自発的理性を目覚

めさせるのには、いかに教師という人間としての生き方、対生徒の人間関係のあり方が大切かということを、深く考えさせられました。我が身をふり返ると沈鬱な気分になり、大変な職業と選んでしまったと後悔しても後の祭りですが、なんとかやっていこうと思っています。

〔第二分科会　参加名簿〕

杉本　仁（日野）　蕪木　潔（九段）　増淵達夫（片倉）　古山良平（小金井北）
工藤文三（三鷹）　市野武男（大山）　河野速男（明正）　井上　勝（八王子東）
小林豊実（大崎）　小川一郎（小岩）　佐藤　勲（小松川）　宮原賢二（荒川工）
菅野功治（小川）　大野精一（水元）　坂本清治（田無）　新井徹夫（玉川学園）
成瀬　功（成瀬）　小島恒己（北野）　勝田泰次（本所）　原田　健（大泉学園）
舘入慈子（共立女子）　幸田雅夫（玉川聖学院）　宮原賢二（荒川工）

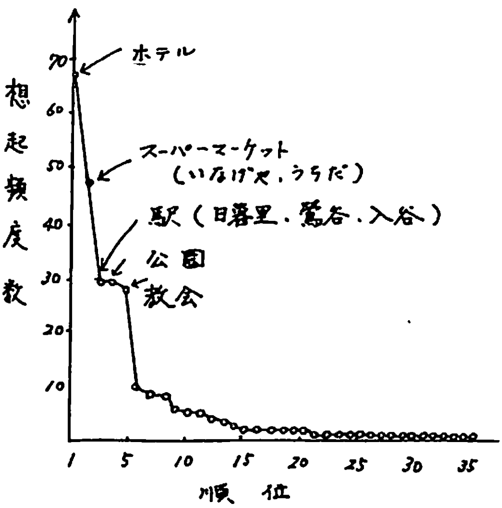
地域環境を考える

竹台高校　斉藤　　規

三四郎は、東京に着いて数多くのものに驚いている。電車のチンチン鳴る音や大勢の乗降客。また、どこを歩いても材木や石が積んである。すべてのものが破壊され、すべてのものが同時に建設される東京。新しい世界に足を踏み入れた三四郎は迷い、考え、行動してゆく。驚きから哲学がはじまった。感動から行動が生まれた。今の東京も絶えず破壊と建設をくりかえしている。一年生はこの喧噪の都会にあって、自分の身のまわりの世界をどう受けとめているのだろうか。本校周辺で思い浮かぶものを書かせた。結果は下図のようになった。ある事柄に関するイメージは一人一人まちまちのようであるが、大局的にまとめるときわめて少数のものに想起内容が集中してしまう（ジップの法則）。本校周辺のイメージは、ホテル街とスーパーマーケットと駅。雑踏の世界に私達は学び、生活しているのだ。

屋上よりの展望。五階建校舎屋上に生徒を引率し、グループでスケッチ。「上野の博物館があれだから、上野駅は左にある。」
「国会図書館は右の方だ。」
「高層ホテルの近くに観音さんがあるはずだ。」………

本校周辺のイメージ

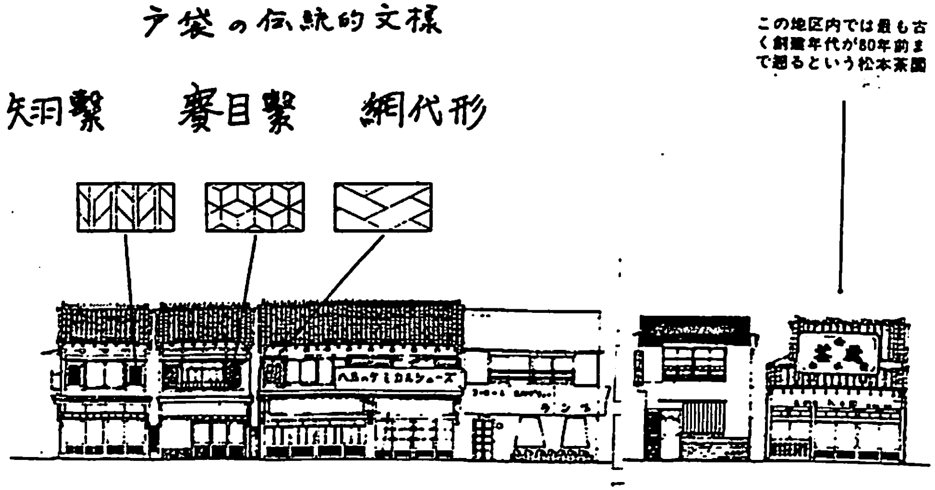


高所から眺めているとき、生徒の話はやや上等になる。月から地球を眺めたアポロ15号のジム・アーウィンは伝道家になったが、人間は高い所にのぼることによって神との距離が縮まるのかもしれない。

安藤広重をみる。……「するがてふ」えちご屋の店構え。往来を談笑しながら横切る婦人たち。通りのさきに白い富士山がみえる。江戸の道路は周辺の山並みが美しく正面に見えるような方向に微妙な設計がなされていた。筑波山、愛宕山、湯島台など。「蓑輪金杉三河しま」。毎年十月から翌月三月まで鶴が飛来し、幕府は保護対策をとった。餌をやり、近くの根岸、金杉では南風が吹く時は鶴を驚かさぬよう、凧揚げをも禁止した……。放送委員による解説テープが流される。「浅草大川端宮戸川」、「大伝馬町こふく店」、「鉄砲洲築地門跡」、「佃島住吉のまつり」、「日暮里諏訪の台」など江戸名所百景から生徒の通学区域の絵がつぎつぎと映し出される。

校外授業。出かける前に次のような話をする。「最近、アメニティ（amenity）なることばがもてはやされている。アメニティとは、the amenity of a warm climate 暖い気候の快適さ、とか the amenity of home life 家庭生活の快適さ、などと用いるように気持のよいことを意味する。何かにつけて気持ちよく生活したいものだ。これから学校周辺を観察するが、環境は5本のより糸（ストランド）から成っている。ストランドを紹介するから観察の目安にしなさい。＜相違と類似＞＜パターン（リズムの繰り返し）＞、＜相互作用と相互依存＞、＜連続と変化＞、＜進化と適応＞、以上。」

生徒の観察。「町を歩いていると松本茶園が見えてきた。しみじみとながめることは出来なかったけど、とてもいい雰囲気だった。でもその後、すぐ鉄筋の大きなビルがみえたとき、私はさびしい気持ちというか、がっくりきてしまった。」「昔ながらの戸袋のついた家。2階に長い廊下のついた家など。土蔵造りの家。本当に黒



かったです。昔はああいう家がずらっと並んでいたということを聞きました。きっと、とても異様な光景だったろうと思います。どこを見ても真黒で。看板造りは何となく"日本人らしい"という感じを受けました。」「昔ながらの店がたくさん残っているなあと思えば、ビルがたっていたり、とてもアンバランスな感じがしました。」（三区画の敷地割りの上に建てられた新鶯谷ハイツ。このマンションの出現で、町並みの景観も大きく変った ― 註）「小野照崎神社は木かげが多く、とてもよかった。都会の中で見つけた自然という感じです。」以下略。

図書館で調べる。田無付近に源をもつ石神井川の下流、音無川の暗渠の上を通り、奥州裏街道である金杉通りへと歩く授業を終え、その間見たり、触れたりした事柄を調べる。教室ではヴィクトリア朝の産業主義、資本主義への批判者であったカーライルやモリスを紹介し、事典の記述を読んでおくようになどと話す。すべての芸術の真の根源は手工芸の中に横っている。こうしたモリスをエンゲルスは「根深くもセンチメンタルな社会主義者」とよんでいる。

用語調べ

漆喰　鴨居　土間　梁　破風　格子
路次　鬼瓦　冠木　蔵造り　暗渠
天ぷら建築（看板建築）　背面金剛
力石　講中（富士講）　庚申　社格
六根清浄　神社合祀

「アーキテクチュールは世の所謂Fine Art に属すべきものにして、Industrial Art に属すべきものに非ざるなり」とは建築家伊東忠太のことばだ。人間的環境とはどのような状態をいうのだろうか。写真集や画集をひらきながら、モリスや伊東

忠太のことばを思いおこす。環境をみる眼のよすがにしたい。

環境を評価する。東京の都市環境は、関東大震災後の帝都復興と、1960年代以降の中央直結の地域開発の中で破壊されてきたように思える。土地、水、空気、交通手段などがいまや大企業による独占、占有に帰し、住民は課税と商売の対象になってしまった。かって、国民主権の日常的発動を主唱した松下圭一は、国内の政治的課題を市民による自由権と社会権の実現と提起したが、私達の環境評価の基準をさししめしているように思われる。かれのいう社会権とは市民的福祉の充実と説明され、①基本所得の保障と②シビル・ミニマムの保障（生存権、共用権、環境権）という2つのものが提起されている。これを都市環境の評価基準とすると、その地域内にシビル・ミニマムとして、

- 住宅、学校教育・保育施設、教員、平和研究施設等があるか（生存の危機克服）
- 文化的公共施設、大企業・官庁に対する査察制度が充分か（人格の荒廃防止）
- 消費センターの設置、食品の安全管理、公害、ゴミ処理施設の有無（生活維持）
- 文化・科学・芸術・技術などの公共的交流施設が充足しているか（発達の保障）

という4点の施設・設備の充足状態を評価することになり、シビル・ミニマムを地域にもちこむことは、地域の仕事おこし、失業解消というさきの①基本所得の保障と連動することとなる。

「今日の市民運動は、日本史上はじめて、＜市民自治＞による＜市民共和＞という発想を成立させてきた」とは1975年のことばであった。だが、このことばから10年たった今日、都市の生活空間は市民生活の快適さからはまだ遠いところにあるように思える。

参考文献

- 東京都教育委員会編　都内見学　○松下圭一　市民自治の憲法理論　岩波新書
- 中村良夫　風景学入門　中公新書　○池上淳　民主主義・日本の憲章　大月書店
- 木原啓吉　歴史的環境　岩波新書　○田村明　都市を計画する　岩波書店

チャート作成の指導

都立府中高校　永　上　肆　朗

1. テーマへの観点

世は挙げてハイテク社会や高度システム社会が大合唱される反面で、「知の変革もとめて」「知の非中心化・相対化」などこのところ既成の知の領域をこえて、「知のパラダイム」の再構成を目指す試みがさまざまな学問の分野ですすめられている。要するに一つの社会事象を抱える場合に、それを一元的な視野や物差しで説明することは冒険であり、極めて偏った考えであり（例えば生産関係と生産力の相関や唯物史観などのいわゆるイデオロギーで合理的にとらえたり、人間の文化や生活を風土的な必然性に還元して説明し事足れりとすることなど）、これでは変化する時代をリアルに理解するには不充分であるということである。

あたかも「現代社会」はこのような背景の中で呼応するかのように誕生した。「現代社会」はこの意味で正しく時代の要請にマッチするものであり、広領域、学際的な科目であるから、その指導にあたっては総合的・多面的な取り扱いがもとめられている。日々、「生徒の課題意識に結びつくような主体的な指導」、とりわけ「広い視野に立った多面的・総合的なものの見方や考え方」など。私が年度当初、授業展開を自分なりに苦慮したのはこの点であった。こんな中でたまたま出会った本が立花隆の『知のソフトウェア』であった。氏は夙に「田中金脈問題」の研究家として知られ、そのエネルギーな分析力と総合力は驚嘆に値いするものであるがこの基底にあって論文を支えた方法論の一端が本書によって種明かしされており、大変に興味深いものであった。ここで氏はチャート作成にふれ、次のようにのべておられる。

「大きな仕事をはじめる場合、私はたいてい、スタートの時点で自分がもっている知識を整理し、かつ、取材結果をある程度予測して、一枚の仮設的チャートを描いてみる。チャートは材料やメモとちがって概念図であるから、どういう材料を集めたらよいかがわかってくる。ただし、スタートの時点で描くのは、あくまでも「仮設的」チャートである。材料が集められたときにその仮設通りにいくとは限らない。というよりいかないのが普通である。取材が進行するにつれて、チャートは何度も描きかえられていく。ものを書くというのは、絶えざる仮設検証過程である。よ

い仮設をたてるためにも、それを事実で検証する上でも、チャートは実に役立つ。

私は本文にふれて目が開かれる思いがした。勿論、この通りの真似事すら出来ることではない。氏は高名なジャーナリストであり、チャートは実は高度な技術かも知れない。しかし、一つの事実（ファクト）に迫るのに自由な発想を訓練するのは大切なのではないか。チャート作成は発想の多様性を確認させるだけでなく創造的思考の育成にも役立つものである。これは確かに授業展開の有効な手段の手がかりになるのではと確信するに至った。そこで全員にチャートを書かせる指導を思い立った。その際留意した点は次のとおりである。

2. 作成のポイント

- チャートをつくろう（あるひとつの主題をえらび、材料を考えてそれを組立てて、概念図をつくる→これを板書して説明する。

（チャート　Chart とは：思考のあらすじを示した概念図を図式化したもの

～のしくみ　～の構（造）図など）

- チャート作成の仕方

要素・内容・材料を書き出し、関連的に再構成

歴史的背景 → 問題のおこり 原因や理由 → 現状分析 → 問題点や 解決の方向

↓

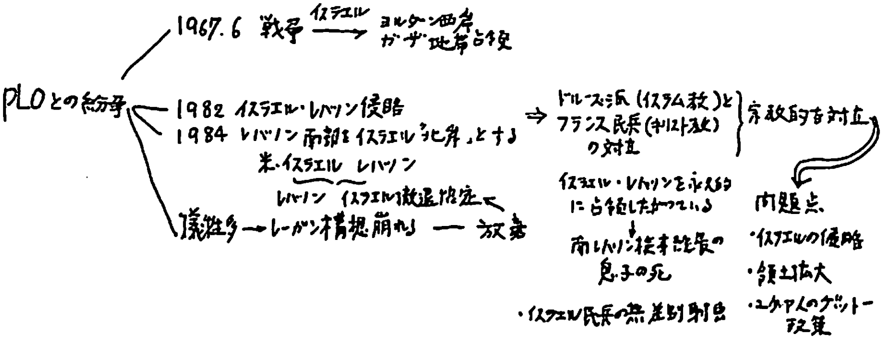
・平面図だけでなく立体的にひろがり　・時間的経過

・プラス・マイナス面
・国内的要因と国際的要因
身近かなこと具体的事例にも還元してみる。

3. 反　省

本校は今年度「現代社会」を５単位とし、中、１単位を地理の教師が横割的に担当。従って残り全部を４単位にひろげて実施というやや変則的な授業形態。そこで生徒の発表時間をやや大幅に取り入れることが可能であったことによる。（来年度はマイナス１時間の予定となる）　当初は生徒も可成りの熱の入れようであったが最近は、これ又低調になり、マンネリ化しつつある。発言も少なく、発表者自身も型にはまってきた。４クラス担当で、これまで138人中、世相・社会・教育時事問題など61名、国際・政治・経済のもの46名、環境問題など23名。となっている。生徒発表のチャートの参考事例を若干以下に示しておきたい。

板書chart 事例

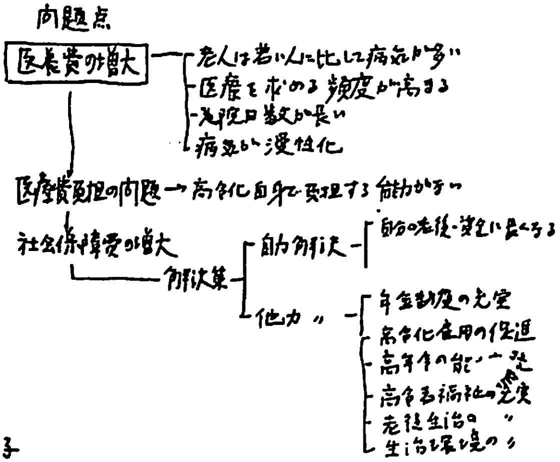


高齢化社会の進展

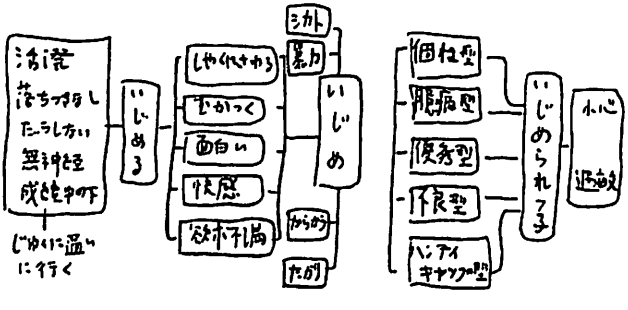
高令化の原因

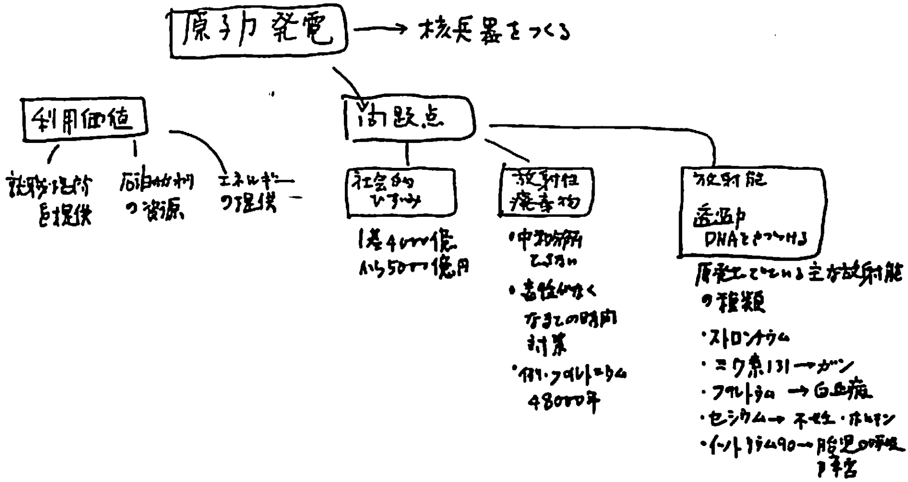
・出生率が戦後大幅に低下

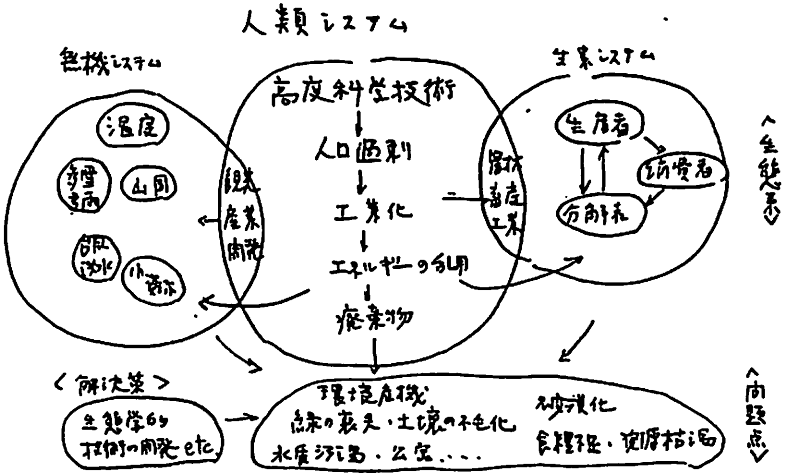
・結核などの感染性病患の死亡率が激減したことによって平均寿命が伸びた

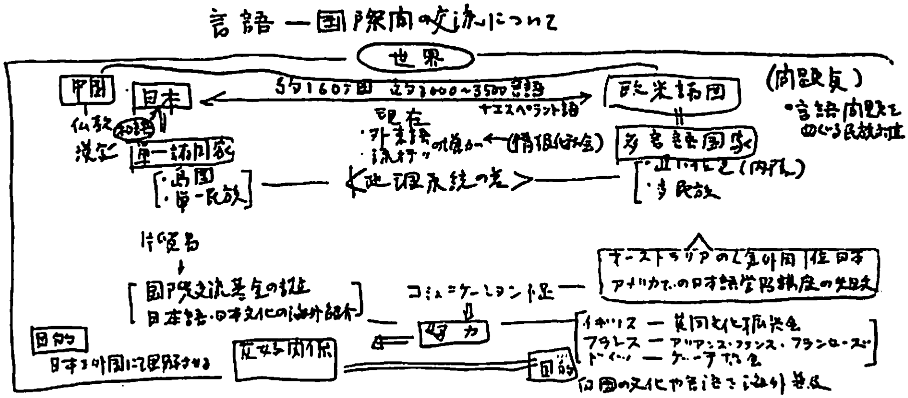


いじめっ子といじめられっ子




原子力発電
核兵器をつくる
利用価値
問題点
社会的ひずみ
1基4000億から5000億円
放射性廃棄物
中和剤がない
害性がなくなるまでの時間
放射能
DNAをきずつける
原発でできる主な放射能の種類
ストロンチウム
ヨウ素131→ガン
プルトニウム→白血病
セシウム→不妊・ホルモン
イットリウム90→胎児の呼吸障害


人類システム
無機システム
生態システム
高度科学技術
人口過剰
工業化
エネルギーの利用
廃棄物
生産者
消費者
分解者
生態系
<解決策>
生態学的技術の開発etc.
環境危機
砂漠化
食糧不足・資源枯渇
問題点


言語 ―国際間の交流について
世界
中国
日本
欧米諸国
(問題点)
言語問題をめぐる民族対立
仏教
漢字
単一国家
・島国
・単一民族
<地理系統の差>
多言語国家
・多民族
国際交流基金の設立
日本語・日本文化の海外紹介
コミュニケーション不足
努力
目的
日本を外国に理解させる
友好関係
イギリス ― 英国文化振興会
フランス ― アリアンス・フランセーズ
ドイツ ― ゲーテ協会
目的
自国の文化や言語を海外普及

現代社会「青年と自己探究」を授業でどのように構成するか

都立水元高校　大　野　精　一

1. 問題の所在

現代社会「青年期」の部分は、授業構成では難しい分野である。内容的には生徒にフィットとするものだが、どことなく深みが不足し、時によそよそしい感じになってしまう。わかりきったことを教えるか、あるいは表面的なアンケート調査風のもので流れていく。筆者は「倫理社会」当該部分でも同じように感じ、長い間その授業構成に悩んできた。何年か前に機会があって筆者は独自に構成案を考え発表したことがある。不十分ではあるが、今のところこの体系を背景にしながら授業をしている。本稿ではこれを提示し、御批判をいただきたいと思う。ただし「青年期」の授業構成のための範囲に関しては、①高等学校学習指導要領、同解説（いずれも文部省）中の「青年と自己探究」（内容的には「現代の青年の心理的・社会的問題」および「適応と個性の形成」）、②それらに準拠した教科書等（調査したのは、東書、教出、一橋、実教２種類、自由、山川、清水、帝国、ＮＨＫテキストの１０種類）に配慮した。また共通一次試験も遠望しつつ、「心理学などの学問の成果を用いるときは、生徒自身のもっている課題を解いていく手掛かりとして考えさせるように取り扱う」（解説３６ページ）という限定を守りつつ構成した。

（なお、本稿は８４年7月6日 本会第２分科会で私がした報告・現代社会「青年期」を授業でどのように構成するか、をまとめたものである。）

2. 大野による試案（８３年４月）

上記の範囲と限定を守りながら、必要な心理学的知識も含めて構造的に構成したものが、下記の試案であり順序通りに学習すべきものとしている。

(1)　青年期とは何か

①青年期とは（年齢区分、青年期の区分、一般的特徴）　②青年期の問題（以下の項目の概説）

(2)　現代青年の特徴

①現代青年の特徴（総理府等の青年に対するアンケート調査、その分析）

②若者文化（モラトリアム人間の意識、若者文化 ― 内容と特色 ― ）

(3)　友人・異性との出会いの中で

①友人・仲間の重要さ(友人・仲間との関係、友人・仲間の意義) ②異性との出合い(その背景、青年期後期の課題 — サリヴァン・笠原等によるまとめ —)

(4) アイデンティティの問題

①自我の発見(自我の形成、自我の問いかけ) ②アイデンティティ(アイデンティティとは何か、青年期とアイデンティティ)

(5) 不安と不適応

①不安(青年期における不安、不安に対する心の防衛機制) ②不適応(心の防衛機制で処理できぬもの、心の不適応、どうするか)

(6) 個性とは何か

①個性とは何か(大人になる過程 — 文化人類学者の研究および高度産業社会でのあり方など — 、個性 Individuality とは何か)

②個性の形成(個性はいかにつくられるか、個性のとらえ方)

(7) 自己実現へ向けて

①自己実現(マスローの欲求階層、現代青年の自己実現) ②成熟した人格(オルポートのまとめ)

3. 内容への若干のコメント

内容的には各項目とも詳細な説明が必要ではあるが、ここでは全体を貫く構想原理(生徒の自己理解に資するとともに、最新の心理学的知見に留意する)に即して若干のコメントをすることにしたい。

(1) 青年期とは何か

青年期の始期と終期とにかかわる問題だが、その基準は何なのか明確にすることで生徒自身の現在の課題がはっきりとする。その始期は自己の意識とはかかわりのない体の次元(身体的生理的性的)ではじまり、それをうけ入れるべく様々な内面的葛藤・動揺を経て、終期として心理的社会的次元での相対的安定を見い出すことになる。この時期をいかにすごすかがこれからの人生のあり方とつながってくる。

(2) 現代青年の特徴

いわゆる青年期の延長がテーマとなる。何故大人になれないのであろうか。「しらける」「かったるい」とはどんなことなのか、モラトリアム論が参考になる。

(3) 友人・異性との出合いの中で

単なる友情論、アンケート調査ではなく、最新の心理学的知識にもとづいて授業展開すべきである。倫理的な問題をこえて心理的事実を把握すべきである。すなわ

ち、「遊び友だち」(心理的離乳)から青年期の「心の友だち」への発展。深い親友関係を通して人間を知ること、親友への心からの配慮、尊敬そして「愛」(広い意味での)の認識などふれることが多い。こうした同性・同年齢の親友関係の欠如は対人恐怖症的な傾向の温床になることに注意すべきである。先述した広義の「愛」を心理的ベースとしつつ「異性」との出合いをむかえる時、心理的にスムーズであるといわれている。このあたり率直に生徒と論議すべきであり、成果も大きい。

(4) アイデンティティの問題

今日この言葉は様々な分野で用いられている。ここでは要するに「自分とは何か」「自分らしいとはどんなことなのか」ということであるが、これは常に社会的にうけ入れられる形態であるとは限らない(心理学上では、社会的に是認されるものという要素が加わるが、実践的には必ずしもそうではない)。ネガティヴ・アイデンティティとは、「おれはもうこうなのだから、どうでもいいや」「私はこうなってしまった以上、将来はない」というものであり、それを貫き破ってポジティヴ・アイデンティティに向けて転換するためにはどうしたらいいのであろうか。今の自分をはっきりさせる用語として、そして建設的積極的肯定的な方向へむけて考えさせていくための重要なヒントとなるようだ。

(5) 不安と不適応

不安は心の成長のバネではあるが、病的な不安の目印を精神病理学的にはっきりさせたい。これから何十年を生きていく生徒にとって単に体の病気のみならず、心の病気に対する自覚ができればよいと思う。また、いわゆる精神病に関しても必要な範囲で正確な知識を持つことが偏見をとりのぞくために大切なことである。

(6) 個性とは何か

青年期にある生徒は、ともすれば自己の特殊性にのみ目をうばわれて孤立しがちであるし、反対にそれを恐れて自己を分散させて全体の中に埋没してしまう。こうした矛盾した傾向を持つのは、高度文明社会においては、個性化しながら社会化せねばならないからである。個性化なき社会化は空虚に等しいであろうし、社会化なき個性化は他の理解をこえるであろう。新しいパーソナリティ論を紹介しながら、この矛盾する困難な問題について生徒と真に語り合うことが可能である。

(7) 自己実現へ向けて

「自己実現」という考え方は、人間とは何かという問いに対する新しい視角を提供してくれる。「より自分自身であろうとする」「なりうるすべてのものになろう

とする」自己実現への欲求（マスロー）は、案外生徒に共感をよぶものである。「これでもういいや」「しょうがないじゃないか」とか「現実は厳しいのだから」という生徒であっても、どこか心の中で納得できぬところをもっているのである。何か心をつき動かすもの（自己実現欲求）を含めて生徒に将来を展望させたらどうであろうか。オルポートの「成熟した人格」論は「大人とは何か」という問題に対する1つの答となるであろうが、生徒にとってはそれだけではピーンとこないようで一考が必要である。筆者の場合は、生徒の「成人イメージ」の調査と重ね合せて討論させている。

4. 今後の課題と展望

以上のような筆者なりの「体系」と「方法」とでこの3年間授業をしているが、残された課題も多い。そのいくつかにふれて本稿の結びとしたい。

(1) 生徒の周囲の具体的状況をどのように取り入れ、かつ授業構成するか

社会学的に把握できる外的環境的世界も大切であるが、むしろここでは生徒の内面的状況に焦点を合せるべきであろう。例えば、社会状況そのものではなく、それが生徒の心にどのように映り、そして価値づけられているのか、ということである。こうしてこそ「無気力」なり「無関心」の問題を共に考えることができると思う。

(2) 現代社会の他の分野とどう関連させるのか

難しいところであるが、筆者は文化論的な、主体・客体論的な地平で今のところ考えている。主体としての生徒が、どのような客体（政治的・経済的・社会的環境）に対しているのか、その中でどのように生きていくのか、という流れで把握できるし、あるいは青年としての生徒を育み、青年としての生徒が創造する文化的状況をトータルに考えていくこともできる。しかしながら筆者として十分納得のいく答をだしえていない。

(3) 「倫理」へどうつながるか

「青年と自己探究」の分野では、人間を内的世界を持つ存在としてとらえることに主眼がある。それは、外界は同一であっても各自が、それをどう知りどう感じ、どのようにしようと思うか独自の心の世界を持つ、と認めることである。これこそ人間尊重（ヒューマニズム）の基礎であり、「倫理」学習の出発点になると思われるが、いかがであろうか。

(4) 社会科学習への展望

前述した「主体論」でしか展望しえぬが、筆者にとって今後の大きな課題である。

第3分科会　選択「倫理」の研究

研究経過報告

都立八王子東高校　井　上　　勝

第3分科会は選択「倫理」と「現代社会」との関連をはかり、生徒の生きる課題に対応した指導内容を深めるための原典・資料の研究を行うことを本年度のテーマとし、6回の研究会がもたれ、第4回以降は第2分科会と合同で行った。毎回多数の先生方が参加され、又、充実した報告と活発な討論がなされた。会場は全て四谷商業高校を使わせていただいた。ご多忙の中をご出席いただいた先生方、報告をしていただいた先生方、特に会場を提供していただいた四谷商業高校の和田先生にこの場をかりて心よりお礼を申し上げる次第です。

以下、活動内容について報告致します。

第1回　6月15日(金)

大堀（四谷商業）、辻（田無工業）、藤田（荻窪）、宮澤（京橋）、和田（四谷商業）の各先生方と井上の6名が出席。和田先生より「ソクラテスをどう読ませるか」というテーマで報告をしていただいた。ソクラテスを教えるポイントとして、知・徳・幸福・正しさなどをおさえるべきこと、又、生徒の心にひびく様に出来るだけ資料を使うべきこと、その際、原典資料が難解な場合は劇化するなどの工夫をすべきことなどが実践例に基づいて指摘された。

第2回　7月6日（金）

辻、藤田、宮澤、和田の各先生と井上の5名が出席。宮澤先生より「現代という時代をどうとらえるか ― ヤスパース『現代の精神的状況』を通して」というテーマで報告をしていただいた。ヤスパースの時代と現代とは基本的に同じであり、現代の倫理の課題としてニヒリズムの克服と科学の人間的な統御とがあることが指摘された。又、原典資料を生徒に読ませ、そこに指摘されている事柄の具体例を生徒の身近な体験の中に探させるという授業展開の実践例が話された。終了後、次回は経験豊かな先生に報告をお願いすることを決めた。

第3回　9月7日（金）

市川(駒大付)、小嶋(東)、辻、藤田、和田の各先生と井上の6名が出席。市川先生より真木悠介氏の『時間の社会学』についての報告をしていただいた。市川先生は真木氏と研究会を行っており、真木氏は現在宮沢賢治研究の一環として「死」の問題について探求しており、この『時間の社会学』によってほぼ「死」の問題を解決した、等の詳細、且つ、重要な指摘をいただいた。そして、真木氏の比較社会学という方法に関連して、知識というものがどの様な基盤の上に成立するのかという点について活発な討論が行われた。

第4回　11月2日(金)

大堀、小河(板橋)、幸田(玉川聖学院)、小嶋、辻、古山(小金井北)、原田(大泉学園)、宮原(荒川工業)、和田の各先生と井上の10名が出席し、第2分科会と合同で行った。宮原先生より「工業高校における哲学のすすめ」というテーマで哲学的なものへの関心の比較的乏しい生徒の興味を開発しつつ『哲学のすすめ』(岩崎武雄著)を輪読してゆく授業の実践例についての報告をしていただいた。又、原田先生からは「新設5年目の学校における哲学のすすめ」というテーマで、「恋愛論」「オバケの話し」などのテーマ中心の授業の実践例について報告をしていただいた。そして、2つの報告を中心に、どの様にしたら生徒の興味から出発し、単なる知識の教授に終らずに、実践的に考える態度を育てる授業にすることが出来るか、について熱心な討論が行われた。毎回話題になることであるが、ここ数年、高校生の意識が急速に変化していることは確かなことであり、それ故に、旧来の様な講義中心の授業のスタイルでは生徒をとらえることは出来ないことも確かであろう。この討論の中で指摘された様々な工夫、例えば、難しい原典資料は易しくリライトすること、知識の不足を補うための用語テストの実施などは大変貴重な実践例であると思われる。高校生の意識の変化とは「幼児化」と言うことも出来よう。和田先生からはフランツ著『永遠の少年 ―「星の王子さま」の深層』を基にしてこの「幼児性」についての報告をしていただいたが、司会(井上)の不手際で十分な討論の時間がとれず大変残念であった。

第5回　12月7日(金)

大堀、工藤(三鷹)、辻、原田、蛭田(白鷗)、古山、宮原、和田の各先生と井上の9名が出席し、前回同様第2分科会と合同で行った。工藤先生からは「学ぶことの意味」というテーマで報告をしていただいた。学ぶということは人間をカルチベートすることであるという太宰治の指摘、そして人間とは有限でありながら無限

に係わろうとする存在であることを『旧約聖書』の「創世記」とヘーゲルの『小論理学』を使って展開した授業の実践例が報告され、「現代社会」の入門として、人間についてどの様にとらえるべきか活発な討論が行われた。続いて、井上より「内村鑑三と明治国家」というテーマで、日露戦争で非戦を唱えた内村がその後どの様な歩みをたどったか、特に、その朝鮮観をどの様に転換していったかについて報告があった。

第6回　1月18日(金)

工藤、小嶋、辻、藤田、古山、和田の各先生と井上の7名が出席し、第2分科会と合同で行ったが、連絡ミスがあり直前に電話で連絡する結果となってしまった。この場をかりてお詫び申し上げる次第です。はじめに井上より全倫研大会での加藤周一氏の講演の要旨についての報告があり、続いて工藤先生より加藤氏の『日本文学史序説』についての詳細な報告をしていただいた。加藤氏の「日本文化論」は論点が明瞭であり、日本文化を理解する為には大変有効であるとの指摘があり、討論では、何故日本では思想が育ち難く、文学という形式をとらざるを得ないのか、又その文学の担い手は何者であったのか、など日本文化の特徴についての熱心な討論が行われた。

〔第三分科会　参加者名簿〕

三宅幸夫(砧工)、菊地　堯(小平西)、市川仏乗(駒大)、辻勇一郎(田無工)
及川良一(江北)、小笠原悦郎(日大二)、宮澤眞二(京橋)、細谷　斉(駒場)
小河信國(板橋)、和田倫明(四谷商)、坂本清二(田無)、古澤英樹(千歳丘)
勝田泰次(本所)、小島恒己(北野)、木村正雄(大森東)、藤田ナツ子(荻窪)
井上　勝(八王子東)、富沢千里(東京女子)、吉澤正晶(大森)

視聴覚教材を通して生徒の意識の『社会化』を

都立京橋高等学校　宮　澤　眞　二

はじめに

高校の社会科に「現代社会」が新設されてから3年がたった。私の高校時代には当然のことながらなかった科目であり、教職1年目にして担当する教科として当初

戸惑いも多かった。「現代社会」という科目が社会科教育のなかでいかなる位置を占めるのか、充分消化しきれないままに1年が過ぎてしまった感がある。

以下その反省を並記しつつ、私なりの「現代社会」構想を述べていきたい。

〔1〕

「先生。僕、会社に行ってもつまらないです。」

「どうして。仕事がつらいのか。」

「いいえ。仕事がつらいということはないけど……。ただ、食事のときとか、休憩のときとか、職場の人と話すでしょ。その時、みんなの話についていけない時があるんです。学校でもう少し勉強をきちんとすればよかったって、今になって後悔しているんです。」

卒業生がある先生を訪ねてきたときのこの会話を、私は一生忘れることができないだろう。

「教育」とは何か。このとき改めて考えさせられた思いがする。私の教師としての原点のひとつとなる貴重な体験だった。彼の言葉はわれわれにとってさまざまな問題を投げかけているだろう。そのなかには、教師が一生分かっても答えのだせないような、人間の生き方にかかわる問題も含まれているだろう。

しかし、私がここで問題としたいのは、社会の時流にすぐに対応できる能力・日常生活のなかでの問題に適応できる能力を、学校教育のなかで今まで以上に、大きな比重をもって教育することが必要ではないかと感じたことである。そして、このことは「現代社会」において、大きな柱となるべき目標として考えられるのではないだろうか。

〔2〕

生徒とのコミュニケーションにおいて、私が実感したのは、一言で言ってしまえば彼らの「社会性のなさ」である。彼らの基礎学力不足と常識の欠如をなげく声が職場で少なからず聞かれる。私も同様の体験を一度ならずし、驚き一種のカルチャーショックを受けた。しかし、その反対に生徒からさまざまなかたちで、いろいろなことを教えられもしたが……。

彼らは自分の関心の向くことはとても勉強している。それは驚くほどの情報量である。しかし、それが全く個人の領域からでていない。そして、志を同じくする仲間との連帯も、一見固く結ばれているように見えるが、深い部分では割とドライに

割り切っている。また、それを手がかりに他人と全的にかかわっていくことが思いのほか少ない。私はこのような感想から、彼らに一番欠如しているのは社会性ではないかと考えるようになった。

さらに他の面から見ると、彼らが本を読んだり新聞を読んだりする習慣があまりないことも言える。新聞を例にとってみると、クラスで新聞を毎日読む生徒がだいたい4～5人（1クラス42人前後）程度である。また、テレビのニュースや報道番組を見る生徒もほぼ同程度である。これが社会性の欠如と同一視はすぐにはできないが、深い関係があると私には思われる。こういった生徒の状況をみて、ある先生は毎時間「現代社会」の導入部で、その日の朝刊からめぼしい記事をひろって解説していた。ひとつの方法として参考になった。

彼らは世界で日本で、そして自分の住んでいる地域で何が起こり、自分はどのような状況のなかで生活しているのかあまりよく理解していない。人間は何かに帰属しているという意識が持てると強い。それは精神的な安定につながり、内からの充実感を持つことができる。彼らはそういった意味での社会とのつながりを持っていない。それはまるで糸の切れた凧のようである。四方八方から吹いてくる風にあおられながら、あてもなくさまよっているようだ。

〔3〕

生徒に社会性がないとレッテルを貼るのは簡単である。しかし、この問題を実践を通して生徒に訴えていくことは今の私にはほとんど不可能に近い。卒業生の言葉からも、生徒への感想からも、私には危機感と自分の力量不足に対する焦燥の思いしか出てこない。

「社会性のなさ」を生徒に自覚させて、彼らとともにわれわれの生きる道を考えていくにはどうしたらよいか。私はひとつの試みとしてビデオを活用してみた。理由は最近ビデオを活用して効果をあげた実践例が数多く報告されていることと、われわれの日常生活はもはやマスコミというメディアぬきでは考えられなく、これに最も親しんでいるのは高校生を中心とする若者であるからだ。

最近のＮＨＫ特集には秀れた番組が多く、視覚的にも訴えるものが強い。『現代に生きる倫理』の章で、「人間の生命の尊重」にからめて核戦争について取り扱かっていた授業で、夏休みに放映された『核戦争後の地球』と映画『予言』を見せた。（ちなみに『核戦争後の地球』を見ていた生徒はクラスで3～4人であった。）彼

らは喰い入るように画面を見つめ、後の授業にもその影響が出始めた。私の説明に以前より以上に耳を傾けるようになり、核兵器の悲惨さを口々に語り、人間が自らを滅亡させることのできるこの恐しい存在物に憎悪を抱いていた。

〔4〕

彼らがこの授業から真先に考えたことは、自分が学校にいたとき、あるいは家にいたときに核兵器が落ちたらどうなるかということであった。これは後のレポートにも圧倒的な比率で語られていた。ある生徒は「僕が住んでいるのは足立区だけど、もし、東京タワーのうえに核爆弾が落ちたら、確実に死んでしまうだろう。きっと家もオレも黒こげになってやけてしまう。もし、生きのこれたとしてもニュウクリアウインターでは生きのこれないだろう………。」と書いていたが、多くの生徒がだいたい同様のことを書いていた。その他、「ビデオを見て核兵器がどんなに恐しいものかわかりました。熱線をあびると死ぬだけでなくて、私のこの体がこの地上から消えてなくなるなんて。なんで人間はこんな恐しいものをつくったのでしょう。」「僕は核シェルターなんかつくってもむだだと思う。1メガトンの核兵器が一発落ちただけで、東京がほぼ全滅してしまうのにもし全面核戦争になんかなったら、ほとんど生きのこれないだろうし、もし生きのこっても、放射能だらけの世界でどうやって生きていくのだろう。」「核兵器がこんなおそろしいものだとは知らなかった。こんなものをきょう争してつくっている米ソはバカだと思う。日本は唯一の被ばく国なんだから、両国にもっとはたらきかけて核兵器をなくすように努力したらいいと思う。」「ひばくしてから何十年たってからもずっと苦しまなきゃならないなんてひどすぎる。日本人は3回核兵器の被害にあっているんだからもっともっと世界中にその悲さんさを知ってもらって、世界中から核兵器をなくす努力をぜったいしなきゃいけないんだって思った。」など、ほぼ感想文の域を出ないようなレポートであったが、それでも彼らに核戦争の恐しさや、核戦争が起こり得る世界の現状に対して、いくらかでも目を向けさせることができたようである。

〔4〕

ビデオ、つまり視聴覚教材が授業で有効であるのは以下のような理由によると思われる。

社会性の欠如という現象は換言すれば、彼らが抽象的な概念や語句を理解しにく

いということになるだろう。彼らは自分の目で見、耳で聞き、手に触れることのできるもの、つまり実在を体感できるものしか信じない傾向がある。その意味では彼らはラディカルなリアリストなのだ。その彼らに社会の現実を視聴覚を通して訴えていくことは、彼らの目を社会へと向けさせるひとつの有効な方法、きっかけとなり得る。そして、このきっかけが新たな展開に結びつく。核戦争から原発に目を向ける生徒が何人か出てくるようになった。また、現代のエネルギー問題に関して、『21世紀は警告する — 石油文明の落日』を見せたときも、ひとつの発展として自動車を売るためには、ロスアンジェルスの電車をすべて廃止に追い込んでしまうという、アメリカ資本主義の論理と倫理に疑問を持つ生徒がいた。このようにビデオを活用することが、生徒の関心を社会へ向けさせるひとつの有効な手段となったことは、私には大きな収穫となった。

しかし、こういった効果と同時に、視聴覚教材を活用するさい肝に命じておかなければならないこともあると痛感した。それは『予言』を見せたときなど視覚的に訴えてくる悲惨さが、かえって生徒の目をそむけさせる結果につながったり、予想以上の現実の恐しさが平和運動に対する無力感を余計助長させたりして、これらを修正するのにとても苦労したことである。こういったことは、視聴覚教材を活用するさいの留意点として、とても反省させられたことであった。

おわりに

生徒に「社会性のなさ」を訴えて、彼らが社会へ目を向けるようになることを、これからも私は「現代社会」の大きな目標としていきたい。そのために、視聴覚教材を今まで以上に活用し役立てたいと思う。ただ、社会へ向かった生徒の関心をいかに持続させるか、そしてその問題を深く掘り下げ理論化し、彼らの血となり肉となっていわゆる「科学的なものの見方のできる精神」を身につけさせるかが、これからの私の大きな課題として残った。このことを私の教師としての目標として「現代社会」に取り組んでいきたい。

111

内村鑑三と明治国家

ー戦争と植民地をめぐってー

都立八王子東高校　井　上　　勝

1.　はじめに

第3分科会の本年度のテーマは原典資料の研究ということであった。この分科会の報告として内村鑑三をとりあげた。本稿はその要旨である。

内村鑑三をとりあげた理由は、通常内村鑑三を授業で扱う場合、日露戦争時の非戦論の展開までであり、その後の彼の活動は扱われない場合が多い。しかし、彼の活動は非戦論の後も不断に展開・深化してゆくのであり、この活動を正確に把握することによって日本の近代思想の中に内村鑑三を正しく印置づけることが出来、又、この作業によって逆に日本の近代思想の欠点も明確にすることが出来ると考えられるからである。

では、日本の近代思想の欠点とは何か。それは知識の生活からの遊離・知識のボーデンロースである（これをモダニズムと呼ぶことにする）。そして、このモダニズム故に日本の近代思想はアジアと日本の民衆への視点を失ってしまったのである。本稿では、内村鑑三の朝鮮への係わりを福沢諭吉と吉野作造の2人と比較しながら考えてみることにする。

2.　戦争をめぐって　ー　福沢諭吉と内村鑑三の歩み　ー

福沢諭吉は幕末から明治前半期の思想界の旗手、元勲として華やかな存在であった。彼の思考は状況的思考と言われる。彼は当面する状況判断によって課題を確定し、その課題に自己と国民とをコミットさせ、これによって個人を国家に主体的に係らせようとした。しかし、この営為は表面の華やかさとは異なり苦悩に満ちたものであり、その歩みはしだいにモダニズムへと後退してゆく歩みでもあった。

福沢は幕末に3度欧米に赴き、文明社会の何たるかを学び、明治維新後文明開化の旗手として活躍する。文明開化とはすなわち殖産興業、富国強兵であるが、福沢は内治優先＝殖産興業を主張する。これが明六社時代の福沢である。しかし、殖産興業政策は財政の未確立故に行き詰り、福沢は殖産興業から富国強兵、特に対外的強兵論への転換を強いられる。時あたかも昂揚する自由民権運動に際し、彼は租税の確保を条件として国会開設に賛成し、官民調和を主張する。しかし、この主張は明治十四年の政変による大隈重信の内閣からの追放により破産する。この結果、国

内状況へのコミットの途を失った福沢は機敏に朝鮮へ目を転じ、金玉均ら開化派の支援(武力も含む)によって新たな状況へのコミットを始める。しかし、1884年の甲申政変による金玉均らの日本亡命により、朝鮮への転換にも失敗する。翌年彼は「脱亜論」を書き、朝鮮・アジアとの訣別を宣言し、強兵論を強めてゆく。この様な福沢にとって日清戦争は文字通り「文野の戦争」であり、「義戦」そのものであった。状況へコミットすることによって近代国家と国民を形成せんとする福沢の思想は、結果的には国内の行詰りを国外、特に、朝鮮・中国問題へ転化するものとなてしまったが、しかし、この様な転化はひとり福沢だけでなく、自由党左派の大井憲太郎や後の共産主義者とも共通する思考パターンであった。

福沢諭吉とは世代を異にしながら日清戦争においては共に「義戦」を唱えながら日露戦争においては「非戦」を唱え、以後別な歩みをたどった思想家に内村鑑三がいる。以下、彼の歩みをたどってみることにしよう。

武士道によって養育され、札幌農学校でキリスト教に入信した内村鑑三は渡米し、アマスト大学のシーリー総長によって道徳主義から信仰主義へと脱皮せしめられる。帰国後の彼は不敬事件等により日本社会とキリスト教界とから二重に追放される。彼は独立の伝道者となり社会批判を展開し、日清戦争に際しては「日清戦争の義」を書く。しかし、戦後、日清戦争が「義戦」ではなく「欲の戦い」であったことを認め、日露戦争に際しては非戦を唱えた。しかし、『万朝報』の参戦への転回を機に退社し、社会批判も止めて伝道と聖書研究に邁進することになる。しかし、内村は社会への関心を失ったのではない。「現世を以って聖書を研究」(1)したのであり、社会に深くコミットした研究を生涯続けた。そして、この研究は植民地朝鮮の人々の魂を深く揺り動かすことになる。以下、彼がどの様にその朝鮮観を深化させて行ったか、その過程をたどってみることにする。

内村は日露戦争に際し非戦を唱え戦争廃止論を展開したが、朝鮮(そしてアジア)観は福沢のそれと大きく違うものではなかった。彼は、朝鮮は「歴史の進歩のない」民族であり「文明国」たる日本の「誘導」が必要であると考えていた(2)。両者の相違は「誘導」に武力を用るか否である。内村は平和的経済的に朝鮮を植民地化することに積極的だったのである(3)。

内村のこの様な朝鮮観は、しかし、日韓併合の1910年前後から変化してゆく。1907年の「幸福なる朝鮮国」において「聞く朝鮮国に著しき聖霊の降臨ありしと、幸福なる朝鮮国(略)朝鮮国も亦、其政治的独立を失ひし今日、新たに神の福音に

111

接して、之を以って東洋諸国を教化するを得るなり」と述べた。そして、朝鮮と日本との関係を次の様に把握する。すなわち、「朝鮮国は或は日本国に先んじて基督教国と成るのであろう、然ども日本国とても亦終にキリストを受くるに至るに相違ない、而して時間に於ては朝鮮国に先きだたるるも、方法に於ては矢張り日本国が優さるであろらと思ふ、朝鮮国は或ひは日本国に先だちて外国宣教師に依て基督教国と成るであろう、然しながら日本国は其自国の民に由て自から基督教国と成るであろう」(4)と。この時期の内村は日本と朝鮮との関係を誘導するものとされるものという関係から相互補完的な対等の関係へと転換させていった。そして、この関係における日本の優位性は唯一内村の主張する「日本的キリスト教」によってのみ支えられており(この故に彼は宣教師となって朝鮮へ行くことを断念した)、「日本的キリスト教」は「とうがらしの臭いのキリスト教」(「朝鮮的キリスト教」)への内村の認識の更なる転換の可能性を秘めているのである。

この可能性は1915年前後に、ひとりの朝鮮人キリスト者金貞植との接触によって現実のものとなる。金貞植らとの交流により内村は朝鮮人キリスト者の信仰の実体を把握する。そして、「朝鮮の基督教は聖書的であって、日本の基督教は社会的であるとの事があったが、是れ朝鮮のためには賀す可く、日本のためには悲む可き事である」(5)と書き、朝鮮人の中に善き信仰の兄弟を発見し、日本的キリスト教と共に朝鮮的キリスト教の存在を認め、両者を平等なものとしたのである。

内村と朝鮮人キリスト者との交流は次第に発展し、彼の朝鮮認識は1920年以降更に深まってゆく。彼は日記に「信仰のことに就では日本人は大に朝鮮人に学ばざるを得ない「(1925年12月23日)と記し、更に「信仰の事に就ては朝鮮人は全体に日本人以上であるやうに見える。多分我が信仰が朝鮮人の中に根ざして、然る後に日本に伝はるのであろう」(1929年4月1日)と記している。ここに述べられた内村の朝鮮認識は日露戦争で非戦を唱えた当時の認識から遠く隔たっており、又、自らの初期の認識を見事に逆転している。そして、これが内村鑑三が「現世を以って聖書を研究する」ことにより最後に到達した地点である。

内村の播いた種は、その後日本と朝鮮で芽を出し、実を結んでゆく。日本においては弟子の矢内原忠雄らがそれであり、矢内原は植民学者として帝国主義日本の植民地政策を批判する。朝鮮においては、金教臣や咸錫憲らが「朝鮮における唯一の無教会主義基督教雑誌」である『聖書朝鮮』を1927年7月から1942年3月強制廃刊されるまで15年間刊行し、その流れは現在まで続いていると言われる。

3. 植民地をめぐって — 吉野作造と内村鑑三 —

韓国の著名な民族主義者、民主主義者咸錫憲は1968年1月に来日した際「韓国が36年間、日本の植民地にされたことは不幸だったが、私たちが内村鑑三という先生を与えられたことは、その不幸を帳消しして、なお、つりを出さねばならぬ」（6）と述べ、又、1980年に渡米した際には内村がかつて働いたエルウインの養護院を訪ねたと言う（7）。咸錫憲のこの様な言動は韓国における内村鑑三の評価のひとつの例であるが、この様な高い評価は内村の思想が植民地朝鮮の現実にコミットしえたことを示していよう。そして、同時にこのことは、近代日本の思想家の中で、内村程に朝鮮の現実にコミットしえた思想家の存在しなかったことをも示していよう。内村の朝鮮への言及は、前章で述べた様に、断片的、宗教的であり、何故に朝鮮の現実に的確にコミットしえたのかは必ずしも明瞭ではない。そこで、日本の植民地政策に対する代表的批判者である吉野作造の主張と内村のそれとを比較することによって、内村の朝鮮へのコミットの内容について考えてみたい。

吉野作造は海老名弾正の本郷教会でその思想を形成した。日露戦争の頃の彼は福沢や内村と同様に経済的植民地主義を肯定していたが、中国の革命運動の必然性の理解を通してその思想を転換していった。そして、名編集長滝田樗蔭との名コンビで『中央公論』誌上において民本主義を主張し、植民地政策の批判を行った。彼の朝鮮政策批判は次の4点に要約される（「朝鮮統治の改革に関する最少限の要求」）。

1.差別待遇の撤廃　2.武人政治の撤廃　3.同化政策の放棄　4.言論の自由の保障

彼の批判は道徳的要素に科学的要素を加えた立場からの批判であり、特に、対外的良心の確立を求めるものであった。すなわち、朝鮮の立場を理解しない、独善的で偏狭なナショナリズムに基づく朝鮮統治に対する批判であった。彼が主に批判し訴えたのは日本人植民者であり、それ故に、朝鮮人に訴えるものは多くはなかった。しかし、朝鮮人への影響の多寡は必ずしも訴える相手如何の問題だけではなく、訴える内容、吉野の思想自身の問題でもある。そして、この問題は「同化政策の放棄」という点に集中的に表れる。他の3点の批判の明瞭さに比べ、「同化政策の放棄」という点においては彼の主張は明瞭さを失ってしまう。この点について彼は、日本への一方的同化ではなく、各々の民族が自分の特徴に従ってより高い目的の為に同化融合、又は、提携共同すべきである。と言う。この抽象性は吉野の主張が「従来」の同化政策の放棄であって、同化政策そのものの放棄ではないという批判を生むことにもなる。良心からする吉野の主張は以上の様に2つの問題点を有するのである。

111

内村の主張は吉野のそれとは異なり、日本人ではなく朝鮮人を揺り動かしてゆく。では、内村の何が朝鮮人を揺り動かしたのであろうか。次に、内村の主張に揺り動かされたひとりである前述の金教臣の発言とその行動からその点を探ってみることにする。

金教臣は内村に揺り動かされた契機を次の様に述べている。すなわち、「自然科学者の精神に立脚した聖書研究と全国民から国賊呼ばわりされる誹謗中に埋没された半生余りの生涯中にも尚ほ祖国日本を棄てざる愛国者の熱血、之れが何よりも私を索引した」、と(8)。又、彼らが発刊した『聖書朝鮮』が15年にわたって主張・実践してきたことのひとつに「キリスト教信仰によって見た朝鮮の地理・歴史観を通して、朝鮮民族の使命や理想を提示し、自信をもたせる」(9)ということがある。これらの点から内村の影響が何であったのかを判断すると、次の様になろう。その第1は「とうがらしの臭いのするキリスト教」に基づく朝鮮人としての主体・自我の確立である。そして、この自我確立の途は祖国を奪われているが故にきわめて困難であり、又、困難であるが故に内村の影響が大きかったと判断される。彼は『聖書朝鮮』の「創刊辞」においてこの間の事情を「我らはあえて朝鮮を愛すると、ことあげすることはできないけれども、朝鮮と自我との関わり合いにおいて、やっと"何もの"かを知り得たところがあると信ずる」(10)と述べている。私達はこの点について、国内問題の困難を対外問題に転化していった福沢達の思想と対比する必要があると思う。第2は朝鮮国の可能性、すなわち、使命・理想の探求である。すなわち、朝鮮人としての主体が確立されることによって初めて朝鮮国が、その主体が生きる場所として関心の対象となったのである。第3は朝鮮国の可能性を導き出す為の、自然科学的精神に基づく朝鮮の研究である。

内村の影響は以上の3点であるが、これを要約すれば、アジアと世界における朝鮮民族の使命(天職)を明らかにし、その主体として自己を確立してゆく、ということになろう。そして、このことは内村が生涯主張し続けたことでもあった。「日本は決してツマラナイ国ではない、大なる天職を負はせられたる国である。神は必ず凡ての困難を排して日本国をして其天職を実行せしめ給ふと信ずる」(11)というのが内村の愛国であり、「我等各自は独り救はれんと欲してはならない、日本国と共に救はれんと欲しなければならない」(12)というのがその主体の在り方であったからである。

以上で内村と吉野の相違は明瞭であると思う。個人の良心からする吉野の主張に

対し、内村のそれは自己の主体的確立を出発点として、個人から社会へ、そして、世界へ連なり、又、現在から過去を通して未来に具体的につながってゆく。そしてこれが状況へのコミットを「放棄」し、「現世を以て聖書を研究」した内村の到達した地点であったのである。

4. おわりに

以上の考察から私達はいくつかの結論を導くことが出来るが、そのひとつに次のことがあると思う。それは、私達の授業もモダニズムに深く規定されているということである。教科書の記述も授業内容も多くの場合、吉野作造同様に道徳的観点か政治的観点からなされ、或る場合には「客観的」記述として観点が喪失している。そこには抽象的な思考が具体性を獲得する過程と場所とが欠けており、授業は生徒にとって疎遠なものにならざるを得ないのである。私達は内村鑑三を考えることによって授業の在り方自体も問わなければならないと思う。

(1)内村鑑三「聖書と現世」 (2)同『興国史談』 (3)同「平和の実益」 (4)同「朝鮮国と日本国」 (5)同「教会と聖書」 (6)政池 仁「本天沼から」(『聖書の日本』1968年2月) (7)鈴木範久『内村鑑三』 (8)・(9)・(10)森山浩二「内村鑑三と朝鮮のキリスト者」(『三千里』1983年夏) (11)・(12)内村鑑三「日記1926年12月26日」

「現代社会」「倫理」を担当するに当たって
ー産休代替教諭の立場からー

都立荻窪高校　藤　田　ナツ子

最初の契約は4月から7月までであったから、1学期間ということであった。そのつもりで臨んだ。高等学校という教育現場や「現代社会」や「倫理」という教科も初めてのことである。ゆえに授業の展開は前任者の先生の助言に負うところが多かった。つまり「自分のやりいいように、自由に方針をたててよい」というお言葉を頂だいしたのであった。次にその展開を述べてみたい。なお、私は「現代社会」「地理」「倫理」を担当しているものであることを付記しておきたい。

授業の展開

1学期間は、いつでも前任者の先生が復帰した場合、引継ができるように配慮し

111

て教材を選び進度を決めた。その基準とするものは教科書であり、あくまでもそれを固持した。教科書なら的はずれになるおそれがなく、引き継ぎの場合に前任者の先生が迷惑することがなかろうと考えたからであった。

「現代社会」

当校のカリキュラムは、1年で「現代社会」(5)— A(現代社会 2)とB(地理 3)—、3年で「政経」(2)と選択「政経・倫理」(各2)となっている。従って「現代社会」ではその点を考慮して授業を展開した方がやりいいのである。そうでなければ、2時間で学び得るものは何もなくなってしまうのである。ゆえに「政治・経済」が3年で必修であるので、これを除外した。しかし、実際に授業を1学期間してみた結果、やり終えたところはわずかであった。産休代替の方が3月まで引き続いてやることに決ったので、私の方針で2学期からの指導計画をたてればよいことになったが、1学期との関連があるので、引き続いて教科書に従って授業内容を展開することにした。進度の遅れを気にしていた私に、前任者の先生は、「この教科書は4時間でやるのですよ。」っておっしゃられたから、生徒から出ていた「教科書が遅れている」との声とは別の声を聞いたから、内容を充実させていくことに努めた。

すなわち「現代社会」の学習指導要領に記されている、原理・原則・基礎的・基本的ことを授業の内容として、ゆくべきこととし3学期には1~2学期で不足していた点を補足して「現代社会」の到達度にせまろうと努めることにした。原理や基礎的なことに重点をおくのは、生き物のように動いている社会が、われわれの生活に影響をおよぼしている現代社会であることから、人類は運命共同体的存在であることを知らしめることと、人間の尊厳と自己の人格をそこなう行動をとってはならないことを、教育理念として教えて、現代社会の授業をまとめたい。

「倫　　理」

受講者は34名(途中脱落者2名)である。

受講の目的は、共通一次の受験や専門学校及び就職の受験の際出題されるからとのことである。人生を学ぼうという者は少くなかった。しかし、授業に当たって、指導要領にそうためにも実践倫理で授業はあらねばならないと考えていたので「人間の存在や価値」について作文を書いてもらった。ヒントを与えた。悩みごとでもよいと、しかし、素直に書ないものもいたが、「大学に入りたいが受験に自信がない」というのが大半であったが、「倫理」では何を勉強するのかと、聞きなれない

倫理という言葉にひかれるものも多かった（Ａ）。また「どうして、こんな古くさい哲学者や思想家の思想を学ぶのだ、今は今の時代の人の考えを学べばよい」とか「私は悩みごとなど全くない、毎日が楽しくて、しょうがない」「親は強制ばかりして嫌いだ」と書いていた（Ｂ）、この外「私は書くことがないから、氏名と生年月日を書く」（Ｃ）との者がいた。

生徒のこうした声を教材に入れて、授業を展開することにした。たゞ倫理ということは、どういうことを言うのかの生徒の言葉に拘泥してしまったきらいがあり、生徒の声と新聞の切りぬきで、実践倫理たらしめようとしたが時間が足りなくなってしまうことに気づき、授業の内容と進度とを変更せざるを得なかった。

産休を引き続いてやることになり、私の心も定まり、３学期までの目どがついたので、私の教えてみたかったことや、生徒と共に学んでみたかったこと、また学んで欲しいことを授業内容にした。歴史・その他の教科で多少とも哲学的なことや思想史的なことを学んできている点を考慮してゆき、社会科学の範ちゅうに入らぬ点や日常タブーとされている点等、学ぶ機会の少くないものをとりあげることにして、教科書、東京書籍「倫理」から思想の源流について学ぶことにし、それらの教義や原理をとらえることを目標においた。最後のしめくくりとして、日本の思想について学び、倫理を終えるところである。生徒の作文Ａの部類の者は、すい選入学で合格しているが、ＢとＣは、今になってあわてふためいている者と卒業を前にして退学したものとがいる。

私は「人生は、選択である。」と考えている。
人生の岐路に立ち選択をせまられている高校生に、それを教えたい。このために、私は高校教諭の道を選んだのである。運よく産休代替教諭に選れ教壇に立つことができたのである。高校の教育現場に立ってみて、世間が言い、問題にしていることは問題にならないことを知る（流れてくる情報や人々が話していること）。教育の荒廃・おちこぼれなる言葉はいやな言葉である。本気で言っていいのかの疑問がわく。そして責任ある者の言葉では決してないといえるのである。この言葉は愛のない者のみが言い得る言葉である。

私は生徒に何処においても、泉が存在することを教えたい。そこを堀り当てたりそれを見つけたりすることが人間には出来ることを（学びの姿勢があれば）教え、学びとらせたい。それが、不安から解放され、自己の存在を確なものにするからである。（現実否定から現実肯定へ ― 自己への回帰 ― ）

「則天去私」について

都立葛飾商業高校　浅　香　育　弘

1. はじめに

59年11月から新しい札が発行され、千円札には夏目漱石の肖像が使われるようになった。今度は新札の肖像人物が、いずれも国際的な視野をもった文化人であるところに共通の特色があるといえよう。

しかし福沢諭吉が、他の哲学者・宗教家・社会思想家などと共に、積極的に西欧近代思想を受容し、紹介して、日本の近代化に貢献しようとした類型に入り、天心・露伴らが日本や東洋の伝統思想の継承・鼓吹を主としたのとも異なり、漱石は英国で英文学を学び、帰国後も大学で英文学を教えたが、漢文学や仏教にも関心が深く、東洋と西洋の両方の思想を学んだ、豊かな教養人だった。

漱石は西欧近代思想を深く学んだ人であるからこそ、明治期における皮相的・外発的な近代文明受容にあきたらず、東洋思想を深く学んだ人であるからこそ、仏教の「我執解脱」や、儒教の「省私」（私に執らわれる態度をハブき、減少させていくこと、孔子が顔淵を評したことば）の立場に立って、西欧近代思想の根底をなしている個人主義 — 自我確立・エゴイズムの問題に深く取組み、やがてそれを批判し、克服しようとはかったのではなかろうか。

漱石の作家活動は50才没まで約10年間に限られ、短かい。しかし一作毎に重い前作のテーマをつけつぎ、のりこえようとはかっている。そして彼の作品が明治・大正・昭和の各年代を通じ、多くの人に愛読されてきたのは、彼の追求した課題が、近代から現代にかけての日本人にとって、共通の課題であるからではなかろうか。つまり近代から現代の日本人は、漱石を通して自分自身のアイデンティテーを追求してきたといえるのではなかろうか。

そういう意味で漱石は、これからも当分、学ぶに価する人といえそうである。

2. ねらい

わたしが使用してきたT教科書では、漱石について約1ページ説明にあて、その中で、「漱石が生涯を通じて追求したもの」は、自己本位の問題であり、自我追求を通して自己中心的なエゴイズムの悲劇におちいるか、晩年求めた「則天去私」によって無我の自由に到達しうるかを問いつづけた、としている。

しかし「則天去私」については、漱石自身がはっきり説明していないせいもあっ

て、弟子・学者・作家・評論家等により、いろんな解釈・説明がなされてきたが、これといった定説はないようである。

私自身は、中学生や大学生のころ漱石の作品をいくつか読んだ程度で、系統的に読み研究したことはない。三十代、四十代になって晩年の作品を読み返して、前と違った読後感をもったが、三十代の終り頃、精神科医の千谷七郎氏（当時東京女子医大教授、その後、同医大附属病院長を経て、現在同医大名誉教授、かつて昭和52年の全倫研大会に記念講演をお願いしたことがある）の書かれた「漱石の病跡」（勁草書房　昭和３８年刊）を読み、大変教えられた経験がある。そこで以下同書を手がかりとして、漱石が「明暗」執筆中に、弟子たちにのべ書にも書き残した「則天去私」について、未熟な私の読み方を紹介させていただく。

3. 展　開

(1)　晩年の諸作品と則天去私　大正１～２年（漱石４６～４７才）に書かれた「行人」で、漱石は一郎と直という夫婦間の確執を軸とし、一郎が自己本位に行詰りを感じ、人間不信・孤独・不安におち入り苦しむ姿を、行人（使者、使い走り）としての弟二郎の眼を通して画いたといわれる。

しかし千谷氏は、一郎の直への猜疑心と裏腹になっている家庭的孤独は、不安の原因ではなく生命的不安（頭と心、意志と肉体との不和抗争という歴史的人間性に内在する根本的不安）の結果の現象であったと診ている。そしてこのような一郎の不安はうつ病から来たものだと診ている。「心の他の道具が彼の理智と歩調を一つにして前へ進めない所に兄さんの苦痛があるのです……」（Ｈさん ～ もう一人の漱石 ― の二郎宛手紙より）とあるが、死ぬか気が違うか宗教に入るかと叫ばしめた一郎の深刻な不安と苦痛の根底に、このような頭（レーゲル）と心（リズム）の不和対立があり、当時の漱石自身が作品を通して、自己をみつめ追求して一種の病識（病気についての自己認識）をもっていたことを示すと指摘している。

そして一郎の頭を取り巻いている雲（うつ病）は、ある時期がくれば薄日も差してこようが、「自己本位」の問題は未解決のまま残ったとしている。

大正３年（漱石４８才）に書かれた「こころ」は、人間のエゴイズムがひきおこした罪の意識に苦しめられ、友人を出しぬいてまで結婚した主人公の「先生」が、妻のため孤独な寂しい世界を生きたが、明治天皇の崩御や乃木将軍の殉死を契機に自ら明治の精神に殉じ自殺するという筋である。従って「こころ」で漱石は、徹底した自己否定においてエゴイズム克服の途を示したといえようが、これはやはり人

間のエゴイズムをどう克服すべきかに悪戦苦闘した作者の或る段階での作品であるとみなければならないであろう。

「心」について千谷氏は、「まだうつ病の雲の中での、いわばうつ病のなごり的な虚構であって」「瀬石が自殺に或る関心を示すのは厭世から来ている」「厭世は……うつ病から来ている」と説明している。

「道草」は大正4年、瀬石49才のときの作品であるが、ロンドン留学から帰朝後、36才の瀬石の約1年間の身辺を題材にした自伝的作品である。「雲に取巻かれて」方向を見失っていた作者が、この作品では夫の健三と細君とをある距離をおいて、ある程度余裕をもって透見しつつ叙述するように変ってきている。「今迄詰らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、恰かもそれが他人であったかの感を抱きつつ、……微笑して」（「硝子戸の中」より、大正4年はじめ）書けるようになったからであろう。瀬石の3回目の雲が消え、神経も静まったのである。

そして「私は五十になって始めて道に志す事に気のついた愚物です……」（富沢敬道氏宛書簡　大正5年11月15日）とあるように、五十迄愚図々々していた自分が、文字通り「道草」を喰っていたことに気づき、更めて「道」に入ろうとする覚悟を示したのだった。

「明暗」は大正5年、瀬石50才のとき胃潰瘍による死によって中断した未完の作品である。「明暗」の題名は禅語から取ったと自ら言っている。大正5年9月21日附、久米正雄、芥川龍之介宛書簡の中に

尋仙未向碧山行　住在人間足道情　明暗雙雙三万字　撫摩石印自由成

「仙を尋ねて未だ碧山に向っが行かず　人間に住在して道情足る　明暗雙雙三万字　石印を撫摩して自由成る」の詩を書き入れている。（瀬石は子規との交友を通し、多くの俳句を作ったが、多くの漢詩も作り絵もかいている）意味は「神仙の棲むという碧山に対し、併し自分はまだ世俗の中、仏教流に言えば煩悩世間にあって脱けきれないでいる。併し求道の気持は十分にありますし、この世間も明暗雙雙するところ（禅宗初期の石頭希遷の語に明中暗有り、暗中明有りの語があるという）なので、其処の所をあれこれ長々と叙しているわけですが、机に向えば案外すらすらと運んでおります」というぐらいのところであろうと解されている。この詩を通し「明暗」執筆当時の瀬石の心境をよく知ることができる。

「明暗」のどの人物にも瀬石に擬せられる者はおらず、登場人物が作者と等間隔で画かれているのが、いままでの作品と違うところである。（あえていえば、瀬石

の諸作品に登場してくる女性は、我の強い女性として画かれている場合が多いのに「坊ちゃん」のお清ばあさんや、「行人」のお貞さんは天性欲の寡ない善良な人として画かれている。それに対し「明暗」の清子は、お清婆やや、お貞さんの延長線上の女性とも異なり、我の消えた無心に近いような女性として画かれようとしたところが、従来と異なるところではあるまいか。清子の名前に意意があると思う。

そして「明暗」執筆中に、漱石は「則天去私」を弟子に語り、書にも書き残した。吾々はその意味をさぐりたいと思う。

(2)「則天去私」の読み方

これについては、いろいろなうけとり方があるが、次の二つの読み方が代表的な読み方といえるのではなかろうか。

一つは、「私ヲ去ルコトニヨッテ天ニ則ル」と読む読み方。この場合は利己的本能としての私をみつめ滅却することによって、天(自然)に適った生き方ができるようになる。つまりエゴイズムを去り、無我の境地に達することができれば、自然に則とり従いうるとする読み方である。

いま一つは「天に則ルコトニヨッテ私ヲ去ル」と読む読み方。この場合は自己のあり方、人間本来(自然)のあり方がはっきりわかり、発揮することができれば、つまり天命を知り天命に従っていけば、「私」(自我に迷い執着する心)を少くしていくことができるとして、自己の進むべき道・方針に気づいたことをいう。

独断・偏見を恐れずあえて言えば、漱石は「行人」「心」位までは前半のやり方でエゴイズムを追求し、「道草」「明暗」で後半のやり方を求めるようになったといえないだろうか。人間は自分が見え我(私)がとれていく分だけ、心は明るくなっていくといえよう。「道草」「明暗」と進むにしたがい漱石の人間省察は深まり、それだけ心に余裕が出てきたように思う。「則天去私」と自己の方針・心掛がきまっただけ、暗さから脱け出し明るさが見えてきたのではなかろうか。

(3)「則天去私」の典拠

「行人」を書き上げた直後ぐらいの大正2年10月5日附、和辻哲郎宛返書の中で、「私はいま道に入ろうと心掛けてゐます……」とのべている。そしてこの漠然たる言葉である「道」は、「老荘の道」でもなく、香厳を通して伝えられる「禅の道」でもなかった。老荘の道は理論だけで、自分を正す実際の道にはなりそうもなく、「禅の道」は一切を放下してかからなければならないが、一切を放下する道はみつからないとみたからである。あとは釈尊の仏教か孔子の教えかに手懸りを見出

すよりないが、漱石が死の19日位前に書いた最後の詩に「真蹤ハ寂莫、杳トシテ尋ネ難シ……」とあり、釈迦仏教に直接的手懸りを見出すことは不可能としたようである。

そして千谷氏は晩年の漱石が、ぐんぐん孔子の道に迫っていったと見ている。孔子が堯の君徳をたたえた語に「大ナル哉、堯ノ君タルヤ……唯天ヲ大ト為ス。唯堯之ニ則ル。蕩蕩乎タリ、民能ク名ヅクル無シ……」（泰伯第八）とあり、真の大人を堯に見た。そして「民能ク名ヅクル無シ」で一般人のよく理解するところではないとし、「唯天を大として之に則った」姿として見ている。千谷氏は則天の語をここから得たと思う、と見ている。去私の語も、孔子が顔淵を評した省其私（其ノ私ヲ省ス ― 利己的態度の私をハブき少なくしていく）からとったものであろうと見ている。

漱石は晩年、富沢氏に「私は五十になって始めて道に志ざす事に気づいた愚物です」と書いたが、「道に志す」は論語の「志於道、拠於徳、依於仁、由於芸」を拠り所とし、「五十になって」も「五十而知天命」をふまえているとすれば、則天去私の内容は恐らく孔子の知天命に比せられ、則天去私という文句そのものも、どうやら論語に由来しているといえそうである。

4. おわりに

2年生でなく、3年生に倫社を教えるようになって10年以上になるが（今年度で最期）、毎年夏休みの課題（読書・課題研究によるレポート提出）として釈迦・孔子・ソクラテス・ゲーテ・宣長等と共に漱石を選ばせた。そうすると国語科の教科書で「こころ」の一部を習っていたせいか、漱石を選ぶ生徒が結構いた。しかし「心」なり「行人」を通して読み、文芸評論家等の「夏目漱石」（作品・作家論）も読んだりして、こちらの設問にこたえつつレポートをまとめるのは、今の生徒特にうちの学校のような職業高校の生徒にとっては、なかねか大変だったようである。9月はじめに提出するよう決めているのになかなか出せない者もいる。それでもなんとか指導して全員に提出させるが、提出したレポートを読んでいくと、お粗末なものもあるが、彼女らなりに苦心したあとがみられるものも結構ある。もう無理かなと思いながら一徹に課題を出し続けたのは、それが彼女らの将来に少しでもプラスになることに一縷の望みをかけてきたからである（昭60. 1. 15）

「私の倫理」 授業草稿
－新渡戸 稲造－

都立本所高校 勝 田 泰 次

1. はじめに

昭和59年11月、十大ニュース風に言えば〝福沢さん今日は、聖徳太子よさようなら〟と福澤諭吉・新渡戸稲造・夏目瀬石を肖像とする新札が発行された。政治家の肖像印刷が一般的であった旧札に対し、新札は、思想家・教育者・作家が登場してきた。これは、大統領や女王の肖像を中心とする米英型から、学者・芸術家等の文化人や絵画が印刷されている独仏型に日本の紙弊タイプが変化してきたことを物語っているといえよう。生徒に新登場の三人の人物について聞いたところ、福澤、瀬石についてはそれなりの認識がなされていたが、案の上、新渡戸は、知名・関心度は薄かった。

新年初頭のマス・コミでは、「太平洋時代の到来」や「国際青年年」をテーマに取り上げたものが目についた。また、ことしに始まる十年、二十年の大変化は、今のとしよりが消えて、その分、新型人間がどっと社会の中枢を占めることである。

いまわが国には、明治生まれからつい最近誕生した赤ちゃんまで、いくつかの世代が一諸に暮らしている。しかし、明治生まれの人と今の若者とは、体形から食べ物の好み、ものの考え方などまで、これが同じ民族だと思えないほど違う。三十代の父親が自分の子どものことを「宇宙人」としか思えない、と誇張していったりするほどである。<戦後三十年間の日本人はどんな風に変わったか。は、昨年末にまとめられた文部省統計数理研究所「国民性の研究」調査によられたい。また、16世紀F・ザビエル以来の多数の「日本人論」をふまえて、日本人はどうあったのか、どうあるのか、これからの日本人研究や青少年教育を示唆する築島謙三著「日本人論の中の日本人」大日本図書を参照せられたい。>

「なあに、人間に変わりはないよ」というのは正しい。ひと一人に〝変〟わりはないけれど、人びとは〝代〟わる。そこで世の中が〝変〟わるのである。

人間社会に文明に、モデルチェンジの時期がやってきたとみることができる。いま後代に残しておくべきものは何かを考えると、「人間性」は、最も大切なものの一つである。コンピューター社会は、人間的接触の密度を薄め、人間的きずなを弱くする。人間的な愛とか感性とか美へのあこがれとかを、後世にしっかり引き継が

なければ、新社会は人間的に貧しいものになる。「伝統的価値観」も、ぜひ残したい。新社会で新しいものはいくらでも生産されるが、古いものは、いったん失われたらモトに戻らない。文化がそれである。文化の価値は古いものにこそある。

福澤は西洋文明へのあこがれゆえに、鑑三はキリスト教の神髄を極めたくて、それぞれ外遊し、目を開かれた。近代日本の夜明けにはアンビションを抱いた若者がいて、内側にある志ゆえに、おのずとにじみ出てくる表情が確固とした自信となり、それが結果的には、国家とか世界とか同胞を動かす原動力となった。アンビションがない、熱意がない、感じていないから「べつに」とか「まあね」としか言わなくなる。その上、小さいときから、みんなと同じことをする画一的人間に育てられているとなると、個性のある表情はみつけにくい。とにかく豊かな時代に育ったものだからモノがもったいないという観念がないし、何事につけても、全力を尽くして努力するという気迫が乏しい。もちろん、以上述べたようなことは、若者の中の一部の話であって、中には立派な考えの若苦もたくさんいよう。かといって、レア・ケースともいえないようだ。

敗戦によってわが国は、あっというまに軍国主義から民主主義の国へと変ってしまった。戦後の日本の変化は大過なかったものと評価できるとすれば、その原因の一つとして、新渡戸の名をあげていいのではないかと思うのである。

2. 新渡戸稲辺の生涯　1862～1933　教育者・農学者

・77 年札幌農学校第二期生として入学、校則に「ゼントルマンたれ」というただ一か条をかかげたクラークの帰国後ではあったが、その感化は、当時の北海道にみなぎっていたフロンティア・スピリットとあいまって、間接には深く受けた。

※“Bay's be Ambitious for fhe attainment of all that a man ought to be”

※札幌農学校出身者には、キリスト教の信仰と理学と、開拓者精神にあふれていた。東京帝大が、国家主義から超国家主義に移っていくナショナリストたちを養成したのに、札幌出身の人は、いわゆる一種のアウトサイダーとしておかれた。

'83年東京帝大文学部に選科生として入学。

※「太平洋のかけ橋」……「日本の思想を外国に伝え、外国の思想を日本に普及する橋渡しになりたい」　異質の価値体系の間の対話通路というような意味の「橋」をかけようと志した。

※“International minded man”……人の国際化・国際人とは何か。

結局、自分の国を正しく理解した上で、外国のこともよく理解し、いろいろな事象に対し国際的に通用するような物の見方、考え方のできる人。そしてこの考え方、見方は自分のことだけを考えず、他人のことも考慮に入れて物を考えることが根本である。日本を日本中心に考えず、世界の中の日本としてとらえる立場である。

'84年〜'91年米・独に渡り、農学・経済学等を専攻、クエーカー教徒となる。

'99年<Bushido — The Soul of Japan(武士道 — 日本の魂)>を出版。明治のキリスト者の背景に武士道精神があった。

'1901年台湾総督府技師、台湾糖業の基礎をつくった。

'06年〜13年第一高等学校長

※一高校長就任挨拶……「いままでの教育はメンタリティすなわち知・モラリティすなわち徳、バイタリティすなわち体、この三つに重点を置いてきたが、それだけでは個としての人間しかできない。これに加えてソシアリティすなわち社交的観念がなくては、全体としての人間は完成しない。いかにすぐれた知徳体を有していても、実社会に適用するものでなければ、価値がない、口先のうまい人になれというのではない。実社会で円満な活動のできる人間になってもらいたいのである。」

※入学式演説……「わが国の学校で最も情けない事は、訓育の欠乏していることである。〜その授けられているのは専門の学科であって、人格の感化というところまでは、なかなか手が届きかねる。〜よく心して親しき友を選び、友情の力を借りて自己の訓育を為し遂げるように努めねばならぬ。」「諸君お互いの間及び教職員に対しては礼をするようにしたい。〜誰れとまちがってお辞儀をしたとて、決して悪いことはない。皆の人が偉いのである。或る名僧は会う人ごとに合掌したとさえいう。」「諸君の中からその一生を治水のために捧げる人はないだろうか。植林のために捧げる人はないだろうか。また水害後の救済事業に志のある人は出ないだろうか。」

※告別演説……「諸君は外面の世界でいろいろなことをしようとする前に、自分の内面を省りみようではないか。自分の内から、内面から人間を築き上げていこうではないか。」「事行」(doing)の前に「存在」(being)を、「何かをなす」(to be)の前に「何であらねばならぬか」(to be)ということをまず考えよ。」

—(人は品行より品格　T・カーライル)

エピソード①インフルエンザの流行した時の講演　「葉書一枚でいいから、郷里の家族に出しなさい。文章を考えるのが面倒なら、無事勉強の四文字だけでもいい。金がないのなら、申し出なさい。一枚ずつあげるから」その日、売店の葉書は売り切れたという。

エピソード②或る日一人の学生が校長室へ入って行った。ちょうど校長は外国人と何か重要な話をしている処だったが、こちらを見ると、つと立って、外国人に会釈した。「ちょっと失礼します。学生が一身上のことで相談に来たのです。学生の相談に乗ってやることは、私の第一の義務ですからね」学生はこの一言に打たれた。そしてそれ以上に心を打たれたのはその外国人であった。この校長によって学生は救われるにちがいない。同時にまた、外国人も自身が救われたように感じたちいう。　―　「諸君は、いろいろ先のことを考えるけれども、まず、きょうの一番近い義務を果すことが大切である」（immer streben ゲーテ）

エピソード③「サーター・リザータス」この書物との出会い、「のどのかわいた者が水を飲むような気分で読んだ」と回想、一生を通じて何回も読みかえし、二回も製本し直したという。

人を人たるがゆえに重んずるという人格（パーソナリティ）の観念は、新渡戸の人生観の根本であった。この上に立って、ソシアリティを説いた。個人と個人の交わりにおいて、自己の殻に閉じこもったり、われ関せずの態度をもって生活するのでなく、"Cheerful" な態度、チャフルな顔つきで人に接し、少しでも人に親切でもして上げるという心持ちで暮せば、社会はどれほどあたたかくなるかも知れない。また、外国人との交際も多くなるに従い、日本人がチャフルな生活態度を持つことは一層必要になる。それが日本に対する外国人の誤解を除き、日本の国際的地位を高める途である。という考えを述べている。一高時代に直接薫陶をうけた、矢内原忠雄は「内村先生からは神を、新渡戸先生からは人を学びました」と。

（「余の尊敬せる人物」）

'18年初代東京女子大学長

'20年～'26年の間、国際連盟事務局次長、ジュネーヴ在職中 "慈愛の人" と別名よばれ、尊敬された。学芸協力委員会（今日のユネスコの前身）の設立者、幹事長として世界文化に貢献した。

'29年太平洋問題調査会理事長、京都で開かれた第三回太平洋会議、上海における第四回会議では、中国代表が中国東北部における日本の特殊権益を否定し、

中国国家の主権を主張した際、新渡戸が激怒したこと。また、日韓併合時におけ る植民思想など、当時の日本軍部との迎合とも見られる惜しむべきかれの限界が 飯沼二郎京大名誉教授により指摘されている。

'33年カナダ西部バンフにおける太平洋会議に日本代表として出席、ヴィクトルア市の病院で没した。

3. おわりに

「武士道」は、滞米中の1899年に英文で書かれ、翌年日本でも出版された。

武士道の体系からときおこし、義・勇・仁・礼・誠・名・忠・克己などの章に分けて日本における独自の精神的秩序を論じ、その根本は恥を知る。すなわち名誉を守る点にあると説明している。

この完成には、クエーカー教徒であるメリー・エルキントン夫人の力によるところも多かった。外国人の抱く日本への率直な疑問の主な点がどこにあるか、結婚以来の日常の会話から知らされていたわけである。

この本が出版されると、米・欧で評判になり、日本の存在を広く理解させるのに役立った。太平洋の橋。その希望の一つが達成されたのである。

「ストイシズムは体系としては滅んだが、徳としては生きている。……武士道もひとつの独立せる倫理の掟としては消えるかも知れない。しかし、その栄光は長く残るであろう」(岩波文庫　矢内原忠雄訳)

「明治の人」の中では、在来の伝統的要素と新しく西洋から摂取した文化との要素が一人の人格の中で、その人格を触媒にして、お互いにぶつかり合って燃焼していた。有名無名人にかかわらず、一種の精神の核融合反応を日本人がみんな一斉に志し、実行したのが明治の時代であった。ところが、いまや仁も誠も地に落ちた。恥を知る人が少なくなり、利欲に走り、汚職が多い、世の中は砂漠だ、などといって嘆く声をきく。発行年から85年目「その力は地上より滅びないであろう」といったそのことばは今日も妥当するであろう。

新渡戸稲造全集　全22巻　別巻1冊　教文館　刊行中

「学習意欲のわく『現代社会』を目指して」

都立大森東高等学校　木　村　正　雄

「現代社会」が新しい科目として実践されて3年、その指導内容や指導方法がそれぞれの現場に定着しつつあることは喜ばしいことである。しかし、まだ、十分に理解され、実践しているわけではない。むしろ、熱心に取り組めば取り組むほど、疑問や苦悩を味わっているのが現状である。

そこで私は以下にのべるような考えで、「現代社会」の指導を展開し、よりよい指導のあり方を探り続けていきたい。

1. 「現代社会」は、人間形成が主眼である。

(1) 自ら学び、考え、正しい判断力を身に付けさせる。

「現代社会」は、社会科の一科目であり、教科としての性格をもっている。したがって、指導内容等が学習指導要領に明示され、それにもとづいて教科書がつくられ、評定もしなければならない。しかし、その内容構成からみると、現代における青年のあり方、考え方等を学ぶにふさわしいものになっている。即ち、1つは現代社会の基本的な問題、二つめは現代社会における生き方の問題である。さらに、具体的内容として、公害、資源・エネルギー、青年の心理的、社会的特徴、青年と人間形成など、高校生にとって身近かな問題点が数多く盛り込まれている。これらの問題を広く浅く、時には深く学習することによって学習への関心をもたせ、現代社会の問題点の学習と自ら学び、考え・正しく判断していく態度を身に付けさせることができる。そのような意味で高校生の人間形成の育成に最も身近かな教科としての内容と性格をみることができる。

(2) 社会科学の学習の入門である。

また、「現代社会」は、2、3年生で学習する選択科目としての世界史、地理、日本史、政経、倫理の基礎的科目として位置づけられ、これらの科目の導入としての役割を果すことになっている。その意味でも社会科学の学習の方法について学ばせることは大切なことであり、将来、主権者として、集団にかかわる個として成長させるためにも人間形成としての役割は「現代社会」に大きな期待となっていることを認識したい。

2. 知情意の調和のある育成を目指して指導していく。

(1) 基礎的、基本的内容を徹底して身に付けさせる。

「現代社会」は、知識理解が中心でないという考えがある。しかし、知識理解力なしに考えを深めることはできない。中学校段階での知識理解の上に立って問題解決を図ろうとするのが「現代社会」と考える。しかし、このような知識理解といっても中学校において身に付いた学力が学校間において大きな差がみられたり、同一の学校でも生徒によって個々の能力差があるのである。

(ア) 目の前にいる生徒の実態を的確に把握し指導する。

したがって、現にある生徒の能力の実態を十分に把握し、指導計画を立て授業を展開していかねばならない。そのためには、入学した4月に知識理解力や興味関心度等のアンケートをとって実態を知ることもできるし、入学試験の結果を分析して実態を把握することができる。生徒の出身中学校による能力差（学習分野による偏り）もみられるし、個々の生徒の得意、不得意の分野（歴史的、地理的、公民的）も知ることができる。入学試験の結果を有効に利用したいものである。

(イ) 生徒は繰返し学習することを望んでいる

生徒の実態によるが、知育の特に必要な生徒には、基礎的、基本的なものを徹底的に身に付けさせることが大切である。同じことを幾度も繰返して記憶させ理解させることを軽視してはならない。生徒自身がそれに意欲を燃やしてそれを望んでいることを忘れてはならない。具体的には、授業のはじめの5分ぐらいに、教科書を2、3ページ各自読ませ、すぐ質問を浴せていく。机の列ごとに競争させていくと眼を輝かせてくる。用紙を配布して簡単な3分間テストもできるし、口答の質問でも男女別にして競争させると意欲もわく。英語の単語帳のように、カードの表に問題を書き、裏に答を書いて学習を楽しんでいる生徒も少なくない。小単元の学習が終るごとにテストを行い、その得点をグラフ化させ、自分の不足しているところに気づかせ、それを正していく努力をさせていくことも大切である。

(2) カウンセリングマインドをもって生徒に接していく

(ア) その時の生徒の気持ちに合わせること

今日ほど、一人一人の生徒のその時の感情を大切にする必要がある。管理社会の中で人間疎外感が高まり、家庭、学校、社会の人間関係がカサカサになっている。青年期にある生徒はそれを敏感に受けとめ、生徒自身がそれらの最もひどい被害者となっていることも事実である。高校生の反社会的、非社会的態度や非行や問題行動がそれを明瞭に物語っている。

高校生の無気力、無関心感もその一つであり、授業内容も理解はするが、興味・関心や意欲がわかない。その理解もテストでよい点をとるためのものであり、一夜づけで、テストが終れば忘れてしまうというものである。

生徒に知識理解をもとめる前に、その時の生徒の感情に合わせることである。例えば、体育の授業のあとは身体的にも感情が高ぶっていることが多いので、その気持ちを十分受けとめ「つらかったり、おもしろかったりして、まだ興奮しているようだね」と問いかければ、生徒は眼を丸くして「今日のマラソンは、オレがあいつに勝てたんだ、はじめて！　ざまあーみろ」と率直な感情がとぶ。

このような気持ちを受けとめることが授業への意欲の源泉になる。わずか2分ぐらいの時間であるが、生徒は「あの先生は自分たちの気持ちがわかってくれた」という安心感と喜びがわいてくる。これこそば今日最も大切なことではないかと思う。少なくとも、「うるさい、授業がはじまったんだ！、落ちつけ、静かにしろ！」では教師と生徒の気持ちは通じないのである。

(イ)　どんな質問や意見も誠意をもって受けとめろ

授業中における生徒の質問がピントがはずれていても決して生徒も教師も拒否的態度をとらないことである。質問のピントがはずれているからといって失笑したり批難したりしないことである。みんなで質問した生徒の気持ちをわかってやることである。

また、グループ毎の話し合いも時間をかけて、一人一人の意見や考え、感情をみんなで受けとめるよう指導を続けていくことである。自分の考えがグループのメンバーに受けとめられたという気持ちができれば発言の意欲もまたわきでてくるものである。（川喜田二郎のＫＪ法はその一つのように思う）このような態度は教師にとっても生徒にとってもすぐに身に付くものではない。時間をかけることである。あせらず少しづつ身につけていく努力が大切である。

(3)　学び方を学ばせ、生涯自ら学ぶ態度を身につけさせる。

(ア)　学習意欲の高まる授業の展開

今の高校生に学ぶ意欲があまりみられないのが現状である。これは、何をどう学ぶかということを知らないことにも起因している。生徒はテストの点をより多くとることだけが学ぶという考えになってきている。現在の世相は当然そのような考えになりやすい。生徒は正直にそれを受けとめるというか直接に影響を受ける。これでは学習意欲が減少するのは当然である。

そこで、「現代社会」は社会科の中の一科目であるが、高校教育全体の中の重要な一環として指導していくべきである。他科目との関連、他教科との関連、さらにホームルーム、生徒会、部、クラブ活動などの教育活動との連けいをはかることである。例えば、「現代社会」の「青年期の探究と人間形成」の単元ではホームルーム内の生徒の意識や生活（クラブ活動と勉強の両立の悩み、生徒と教師の人間関係など）を問題にして学習を深め、広めることである。

(イ) 自ら資料を集め、分析し、発表する

また、自ら考え、正しく判断できる生徒の育成のためには、「現代社会」の授業で、見学、調査、資料や情報の収集、分析、討議、発表、保存、活用等によって社会認識を深めることができる。あるいは、現代における人間の生き方、考え方について先哲や現代の思想状況を学ぶことによって、自ら深く考え、自分の生き方、考え方を検討させ、よりよい方向に歩ませることである。例えば、生徒がグループで、近くの警察署に行き、お話をうかがったり、資料を集めたりして、青少年の非行の実態を分析して、生々しく発表して、みんなからみとめられて、社会科が好きになり学習意欲が向上した生徒も少なくない。

(ウ) 地域の文化財を教材化する

また、地域とのかかわりを大切にすることによって郷土愛が培われる。生徒は地域の伝統的行事の調査には、録音テープをもっていき、地域の古老の昔話を収録して研究発表し、クラスの注目を浴び、文化祭にはその古老を紹いて、みんなに直接話を聞かせるなどして、地域の人々との心の交流に喜びを感じ、学習意欲を向上させた生徒もいた。同じように地域の寺社を見学し、実物にふれることによって具体的な体験として学習が身につき、さらに、同じ生徒（仲間）と先生と同じ体験をしたという喜びはさらに学習意欲をもりあげている。

(エ) 総合学習と主題学習を適切に展開する

学習内容の取りあげ方も、内容によっては総合学習を展開していく。よくあげられる例が、川とか水であるが、私は「日本の祭り」をとりあげたい。「鎌倉」は本校の地域学習の場としているため、現在でも「鎌倉」を総合学習の場として、歴史的、地理的、政治経済的、倫理的側面から学習を展開し効果をあげつつある。

(オ) 学習意欲のでる評価を行う。

形成的評価こそ学習意欲をもりあげるものと考える。これは大変な作業であるが教育は手間をかけなければ効果がうすいことを肝に銘じて、終わりとしたい。

61

生徒と読む
ー倫理の共同学習ー

都立秋川高校　水　谷　禎　憲

1

本校は周知の通り全寮制である。したがって一日中生徒達は学校敷地内にいる。昼間生徒達が学校にいるのは全日制普通科高校として当然であるが、夜間においても寮という状態で学校にいるのである。その為その夜間に学習時間（7時30分～10時30分）が3時間の日課で設けられている。しかし、この3時間が全体としてまともに機能し維持されることは、本校が現状で存在する限りありえないといっても過言ではない。寮内を徘徊する舎監泣かせのあの無為徒食の輩が続出し、舎監のしばしばの巡回にもかかわらず時として寮内は大パニック状態に陥る。その為舎監は鬼面し竹棒を握りしめ大立まわりを演じ奔走しつづけるのである。卒業生が言うには、この学習時間の状態は本校開設当時からそう変化はないそうである。もちろん質的にはずい分変ったろうと思うが。現状の低学力、学習習慣の欠如したる者を多くかかえた今日、下手をするとイザという進級や受験、定期考査や平時の予習・復習はもちろんに呆然自失、寮の部屋の状態にもよるが、しまいには足のひっぱり合いとなり、学習に取り組む者をすら妨害するに至る。こうなると一種の犯罪行為である。そうした事から私自身舎監の頃は大巡回行脚をしながら叱り廻って疲れはてた覚えがある。遠まわりをしてしまった。本稿の主題は、この学習時間、場合によっては放課後に設けられている授業外における生徒と教師との学習面での触れ合いの場である「共同学習」の事である。

2

共同学習の性格について触れてみよう。20年の歴史の本校創設より「共同学習」はあったらしい。当初は生徒自身の創意に基づき生徒が各個教員に依頼し、授業の延長もしくは補講として小ゼミ形式の学習を行っていたようである。いつしか生徒学力低下に伴ない教師主導型の補習的傾向が強くなっていった。所謂「落ちこぼれ」対策の一面である。また、「考査対策」即ち「アカテン防止対策」や「受験対策」の共同学習が主流となってきた。しかし、授業中心といった点から開講者自身疑問を持ちながら止むを得ず開講している場合もある。そしてさらに文化教養講座といった側面を持つ共同学習も存在する。本稿に述べる倫理の共同学習はこの後者に属し、あの3時間の学習時間中に開講した。狙いは、少しでも向学心を持ち学習意欲

を持つ生徒を学習時間に一定の場所に集める事。また本校に欠如しがちの文化的土壌と知的雰囲気の育成と言ってもよかろう。

3

「倫社」の授業の回顧談を生徒達から聴くことがある。その中で「現実性」の欠如を云々する生徒がしだいに増えていた。実に傑作な話だが先哲の存在そのものをすら疑うのである。日く「そんな奴本当にいたのか」「先生が勝手に話をつくっているのではないか」と、先哲の存在も思想も「先生の嘘」呼ばわりするのである。実に面白い、爆笑してしまった。だが、笑ってばかりもいられない。分析すると次のような結論に達した。先哲の存在や思想は、書物の中にしか具現していないのである。いくら現実の生活＋社会との接点を強調していっても読書という行為から無縁の者や書物が身近かでない者にとって何の近親性があろうか。先哲の生き方考え方を通して生徒の「現在」へと切り込もうとしても先哲の存在そのものが疑がわれていてしまってはレアリテは欠如しよう。先哲へとひらかれていく、導かれていく方途や如何。直接に書物へとぶつかって行くがよい。しかし、生徒の読書力はない。それでは一緒に読もうとなった。

読書会方式は今年度はじめての試みである。従来は共通一次対策の共同学習をやっていた。昨年不思議な傾向があった。いわば趣味で共同学習を受講している者がいた。この傾向は担当学年で生じた異変かと思っていた。ところが、今年度もっと驚くべき事が生じた。2年生が自主的に開講を依頼してきた。「現社でよくわからなかったのでやって下さい」授業で話したソクラテスやイエスの話などがどうもよくわからなかったらしい。どうしようかと思っているところ、他にも読書会方式で共同学習をやられている先生がおり、それに示唆されて読書会へと踏み切った。生徒は求めている。

馬を水の近くへとつれて行く話がある。幸い馬の方で水飲み場へ近づいてきた。ちょっと引っぱりよせて無理矢理口の中に注いでみようと言うのである。嚥下せず吐き出してしまうかもしれない。

『ソクラテスの弁明』　1～2学期

『マルコ伝』　前田護郎訳　2学期

『人生論ノート』　三木清　2～3学期

一時期は約20名にも受講者が増大したが序々に10程の適正規模となった。時間も1回1時間からしだいに2時間、3時間へと延長していった。だいたい週2回

程のペースである。『弁明』を読むといってもギリシア語などわからないので、5種類の翻訳にあたった。生徒には角川文庫を指示した。一字一句一緒に読み説明したり討論した。雑談も多くなっていった。

『マルコ伝』はコピーを用意して配布した。

『人生論ノート』も文庫本を指示。

4

最近は読む事そのものより、メンバーでの討議の方が目的となっている。むしろ雑談と呼んだ方がよいかもしれない。生徒らもこちの方がお目当のようだ。

生徒から学ぶことはずい分とあった。そのいくつかを述べてみたい。

まず感じたのはソクラテス的生き方を評価しえない事である。なんて自己中心的な人物なのかと批判的である者もいた。ソクラテスの生き方を自己の生き方に引きつけて考えていない。平くいえば「自己の信念に基づき行動する」「真実の為には死をも辞さない」などといった文言は生徒達の世界からははるかに遠い遠い架空の世界での出来事であるかの様だ。メンバーの一人の生徒が学校の夏休みの読書感想文の課題に『弁明』を使用した。彼なりの拙い理解であったが、ソクラテス的真実を彼なりに「正しい生き方」ととらえていたようだ。しかし、これを自分の生き方として生きていけないという苦悶が語られ、理想としては感じられるがその生き方への決意が語られるのではない。むしろ挫折が語られる。

予断と臆測ばかりで全く見当ちがいかもしれないが、現代の青年達の自我の一つの変調期が訪れているのかもしれない。

三木清は『人生論ノート』の中で次の様に言っている。

どんな方法でもよい、自己を集中しようとすればするほど、私は自己が何かの上に浮いているように感じる。いったい何の上にであろうか。虚無の上にというのほかない。自己は虚無の中の一つの点である。この点は限りなく縮少されることができる。しかしそれはどんなに小さくなっても、自己がその中に浮き上っている虚無と一つのものではない。……(「人間の条件について」)

生徒の全員にこれを自分のものとしてイメージできるかと問うてみた。しかし、メンバーの誰しも首をかしげるのみであった。大都市の消費社会での成育が近代の把握してきた実存的自我の諸相を無効にしはじめているのではないか。今私はそれを考えはじめている。

知る権利の保障について
ー 情報公開制度 ー

都立北野高等学校　井　川　哲　夫

1. 埼玉県における情報公開制度の実態について

現代社会にはこれまで見られなかった新しい人権、環境権、プライバシーの権利、知る権利、平和に生きる権利などがある。この稿では住民の知る権利の保障を具体的に実施している埼玉県の自治体をとりあげ、情報公開制度の実態について考察する。情報公開制度はだれもが行政機関の保有する情報を、必要とする時にいつでも自由に入手することができるよう、情報の公開を求める権利を法令によって保障し、行政機関等に公開することを義務づける制度である。県では県政の発展を目的とした情報公開条例を昭和57年12月に制定、58年6月1日から総務部公文書センターで発足した。

2. 情報公開制度への歩み

昭和55年　5月	情報公開準備検討委員会の設置
〃　56〃　7〃	情報公開準備検討委員会の報告
〃　56〃　9〃	適用除外文書調査の実施
〃　56〃10〃	県民意識調査の実施
〃　56〃10〃	情報公開推進委員会の設置
〃　56〃11〃	情報公開検索システムの開設
〃　57〃　8〃	情報公開懇話会の提言
〃　57〃　8〃	プライバシー保護に関する報告
〃　57〃　8〃	情報公開推進基本計画の策定
〃　57〃12〃	情報公開条例の制定
〃　58〃　4〃	公文書センターの設置
〃　58〃　6〃	情報公開制度の発足

3. 情報公開制度の基調

(1) 制度の理念

情報公開制度は、一般的には行政機関等が保有する情報を、住民の請求に応じて公開することを行政機関等に義務づけ住民の「知る権利」を保障する制度である。情報公開の制度は、1776年、スウェーデンの「出版の自由法」に始まり、第二次

世界大戦後は、1951年、フィンランドの「文書公開法」。1966年アメリカの「情報の自由法」など欧米諸国において制度化が図られている。これら欧米諸国の制度はいずれも、情報公開の原則をうち出し、または知る権利を制度的に保障している。県の目指す行政情報公開制度もまた、住民の知る権利を具体的に保障しようとするものである。県の保有する情報を県民が知りたい時にいつでも自由にえることができるようにすること「知る権利の制度的保障」は民主主義の基礎であり、日本国憲法の定める地方自治の本旨に即し、自治と連帯による県づくりを進め、あわせて県政の公正かつ効率的運営に資する上で必要不可欠であるとし、それは時代の要請にこたえるものである。

(2) 制度の必要性

県の目指す制度は、知る権利の制度的保障により、地方自治の本旨に即した県政の民主化を一層充実させることを基本とした三つの柱が位置付けられている。

ア．県民の参加型地方自治の確立

イ．県政の公正な執行と県民の信頼の確保

ウ．県民の知る権利の確立

(3) 制度の立法形式

知る権利を行政的に保障するということは、日本国憲法上の抽象的な権利としての「知る権利」を具体的な権利として、実定法上保障しようとするものであり立法形式は条例とする。

(4) 知る権利とプライバシーの保護

知る権利とプライバシーの保護との調和をどこに求めるかということは、制度化及び制度運営に当って考慮しなければならない極めて重要な課題である。県の保有する情報には、プライバシーにかかわるものが相当量存在する。プライバシーの権利もまた、憲法の保障する「個人の尊厳」にかかわる基本的人権の一つであり、知る権利とプライバシーの権利とが、行政情報の公開という仕組みの中で、相互に調和を図るべきものとして併存することとなる。県行政情報公開推進委員会の中にプライバシー保護専門部会の報告書を基に、公開しない情報の範囲を設定、開示請求に対する諾否の決定、自主情報コントロールの取り扱いについて適切な対応を図るものとする。

(5) 情報管理体制の確立と段階的実施

情報管理については、知事部局において導入したファイリングシステムを中心と

して県民と行政との総合的利用という新しい視点に立って確立する。また情報検察システムについては、電子計算機を活用したシステムを中心とする。県では一定の情報管理体制の下に県文書館と県政資料サービスセンターにおける事実上情報を実施してきた。

(6) 制度と情報提供

従来から実施している広報活動をさらに積極的に推進するとともに、県政資料サービスセンター等の機能の強化及び各執行機関の情報提供の積極化等により県民の望む「自由で豊かな情報」の流れを確立する。

4. 情報公開制度の特色

(1) 情報の管理と検索体制の整備

ア．文書管理の適正化（ファイリング・システムの定着、文書事務の試行と公・非判定事務の適正化、2段階方式）

イ．県立文書館における文書管理の適正化（新館の建設管理委任方式、件名目録、索引カードの作成

ウ．コンピュータによる検索システム — 文書管理の適用

地方自治情報センターと協同開発

エ．職員の意識改革

文書公開審査員の設置と研究等の徹底

(2) 公開窓口の一元化

ア．総務部公文書センターの設置

県立文書館内に併設し公開業務の一体化を図る。

イ．諾否決定の一本化

コンピュータ等により迅速的確な検索と公開

(3) 情報公開制度とプライバシーの保護

ア．プライバシー保護の方法

イ．自己情報のコントロール権

(4) 救済制度

オンブズマン類似制度の導入

(5) 情報公開と情報提供の運動

ア．公文書を対象とした情報公開システム、総務部公文書センター(58.4.1設置）

イ．県民資料を対象とした情報提供システム

県民部自治文化振興課　県政資料サービスセンター（58.6.1設置）県政情報資料室（39.4.1設置）各地区　川越、秩戸、本庄、熊谷、春日部の各県民センター内、県政資料コーナー（53以降設置）

(6) 段階的な制度の実施

目録等検索体制が整備されたものから逐次公開。

5. 情報公開制度の現況

(1) 請求・申請・相談等の種類別件数　（S 58.6.1 ～ S 59.5.31）

番号	種類	件数	主な内容
1	自治問題	974	市町村合併史資料、昭和59年度県当初予算
2	その他	724	自衛官の募集に関する文書、所沢米軍基地施設
3	農林業	557	見沼代用水路、農業共済組合の合併、自作農創設維持
4	労働	480	県職員採用試験の本人の順位、美容師、はり師の本人の得点
5	学校教育	472	県立高校生徒の指導等の文書、学校法人の職員の名簿
6	商工業	461	県工業団地建設計画、産業文化センターの基本構想
7	交通網	276	大宮、伊奈新交通システム、川越線の整備計画
8	土地利用	273	国有地の境界査定、通勤新線の開発、浦和市の都市計画
9	住宅環境	173	県内団地開発計画、中枢都市圏構想、都市再開発計画
10	県民参加	102	県議会議員、衆議院議員選挙関係書類
11	文化	100	宗教法人の設置認可、県内社寺関係文書
12	災害	45	災害時における県内市町村での避難経路　避難場所
13	社会福祉	30	老人の生きがい対策、児童福祉施設
14	自然保護	13	県民休養地実施計画、ふるさと埼玉の緑を守る条例
15	公害	12	市の一般廃棄物処理計画、処理実績
16	保健衛生	10	地域医療整備、保健所、救急医療の整備状況
17	水資源	6	県内の飲料水に関する水質調査
18	生涯学習	3	社会教育関係文書
19	青少年	2	青少年健全育成条例、非行問題行動等の実態調査
20	スポーツ	2	県営射撃場
21	交通安全	1	交通安全施策の概要
	計	4,715	

(2) 請求・申請等の受付、処理件数　（S 58. 6. 1 ~ S 59. 5. 31）

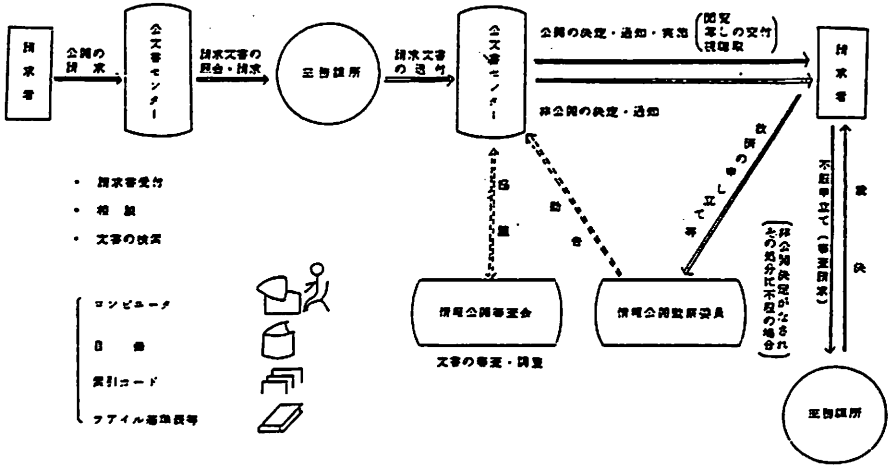
	公　開	部分公開	非公開	資料提供	その他	検討中	計
請　求	3,785件	20件	14件	14件	24件	0件	3,857件
申　請	626	2	0	0	0	0	628
小　計	4411（98.4）	22	14	14	24	0	4,485
相談等		－		230	0	0	230
合　計	4,411	22	14	244	24	0	4,715

(注)請求……県内に住所を有する者からのもの
　申請……上記以外の者からのもの　（　　）は公開率

(3) 自己情報の請求、申請件数

請　求	384件
申　請	66
計	450

(4) 行政情報公開事務処理の流れ



まとめ

埼玉県における情報公開制度は全国の自治体に先がけて「住民の知る権利の保障」を具体化した。今後知る権利の保障が各地方自治体に与える影響は大きいといえよう。住民は身近かな場面から政治に参加させ、意識を高めることは民主主義の基礎である。「地方自治は民主主義の学校である」というブライスの真の意味が理解される。

「現代社会　こんな㊞マルシュク」

都立江北高等学校　宮　崎　宏　一

1. はじめに

「新年明けまして、おめでとうございます。先生の㊞のおかげで、新聞も少しずつ興味をもって読めるようになりました。今年も一生懸命頑張りますので、よろしくお願いいたします」………この年賀ハガキを手にしたとき、久しぶりにジワッとしたものが、胸にこみあげてきた。現代社会を教えている1年生（男子生徒）からの初便りである。教師も生徒に励げまされながら、また勇気づけられながら前進していくものなのだなあと痛感させられた。半信半疑で現代社会を担当して2年目になるが、とにかく悪戦苦闘の連続である。昨年度の都倫研紀要には『グループ研究を生かした現代社会の授業』というテーマでまとめたが、本年度もこのグループ研究発表の授業形態は継続させながら、もう一つ㊞にも力を入れてみた。

さて、この㊞マルシュクというのは、宿題、つまり課題のことである。その課題・テーマはその時々の国内・国外における現代社会のさまざまな様子を広くとらえさせ、自ら社会の諸問題に、興味と関心をもって、少しでも自分で考えてみる習慣が身につくような内容を選ぶように心がけてみた。

2. ㊞の展開と方法

授業の冒頭または最後に、私が三秒前!!というと生徒達は筆記用具を出し、一斉にノートをとる準備をする。そこで本日の㊞のテーマをゆっくりと大声で筆記できる速さで読みあげる。新聞記事の切りぬきとそのコメント（感想・意見）を書かせることが多いので、なるべく早く出題をし、関心が高まっているうちに点検をし、発表させるようにしている。㊞は、次の現社の授業までにやってくることがほとんどなので、翌日授業のあるクラスは悲鳴をあげることがある。㊞のノート点検は、授業の最初に行い、 Very good の特製ゴム印を押して回る。忘れた者には、手を頭にのせ、“努力!!”と激をとばす。点検が終ると次は、隣りの者とのノート交換をする。その際、必らず「読ませてもらいます。」とひとこと言ってノートを受け取るようにする。テーマによっては、読ませてもらった隣りの生徒がさらに感想などを書くように指示をすることがある。読み終ったノートは、「ありがとうございました」と丁寧に返すように指導をしておく。そしていよいよ発表である。男女

1～2名を選び、自分のノートを朗読させる。新聞切りぬきの場合には、何新聞か、見出しはどのようにつけてあるか、記事の内容は、そして自分のコメントを読むようにする。テーマによっては、クラス全体のディスカッションやフリートーキングなどに発展することがある。この㊪のテーマのなかから定期考査に出題することもあり、自分でしっかりと考えをまとめておく必要がある。

3. 昭和58年度の主な㊪のテーマ

①高校生に関する新聞記事を切りぬき、コメントをつけなさい。

②東南アジアの地図を描き、ASEAN諸国を記入しなさい。

③サミットとは何か、またサミットに関連する新聞記事を切りぬき、コメントをつけなさい。

④比例代表制とは、どのような選挙の方法であるか。また参議院議員選挙の結果をまとめておきなさい。

⑤大韓航空機撃墜事件に関する新聞記事を切りぬき、コメントをつけなさい。

⑥「敬老の日」に関する新聞記事を切りぬき、あなたの考えを自由に論述せよ。

⑦ロッキード事件に関する判決記事を切りぬき、あなたの考えを自由に論述せよ。

⑧レーガン来日に関する新聞記事を切りぬき、日米間の問題についてあなたの考えを自由に論述せよ。

⑨衆議院が解散され、総選挙がおこなわれることになったが、衆議院と参議院のちがいについて、できるだけ詳しく調べてきなさい。

⑩三井有明の事故に関する新聞記事を切りぬき、わが国の災害対策のあり方について、あなたの考えを自由に論述せよ。

ポイント
- (1) 高度な先進技術について
- (2) 労働条件について
- (3) 人命の尊重について

4. 昭和59年度の主な㊪のテーマ……（4月～昭和60年1月10日現在）

①世界地図を描き、教科書グラビア「市場と人びと」に出てくる国名・主都名・気候区名を書き入れなさい。

②東大生のボート転覆事故に関する新聞記事を切りぬき、それについてのあなたの意見・感想を自由に論述せよ。

③次の人物について、できるだけ詳しく調べてきなさい。

(1) ムンク　(2) ジャコメッティ　(3) ロダン　(4) ピカソ

④金属バット殺人事件の判決に関する新聞記事を切りぬき、この事件判決についてのあなたの意見、感想を自由に論述せよ。

⑤ソ連、ロス五輪不参加（ボイコット）に関する新聞記事を切りぬき、その問題についてあなたの意見、感想を自由に論述せよ。

⑥次の人物について、できるだけ詳しく調べてきなさい。

(1) ゲーテ　　(2) パスカル

⑦韓国全大統領の来日に関する新聞記事を切りぬき、日韓関係についてのあなたの考えと感想を自由に論述せよ。

⑧「敬老の日」に関する新聞記事を切りぬき、あなたの老後問題についての考えと意見などを自由に論述せよ。

⑨グリコ・森永脅迫事件に関する新聞記事を切りぬき、あなたの感想・意見を自由に論述せよ。

⑩新しい1万円札（福沢諭吉）、5千円札（新渡戸稲造）、千円札（夏目漱石）について、人名事典などをひいて、その人物、思想等について調べてきなさい。

⑪ガンジー首相暗殺事件に関する新聞記事を切りぬき、各自コメントをつけよ。

⑫中曽根改造内閣に関する新聞記事を切りぬき、コメントを自由につけなさい。

⑬レーガン大統領圧勝に関する新聞記事を切りぬき、あなたの感想を自由に論述せよ。また教科書P162のアメリカ合衆国の政治制度について学習しておきなさい。

⑭わが国の人口問題（統計）に関する新聞記事を切りぬき、あなたの感想、意見を自由に論述せよ。

⑮中国残留孤児に関する新聞記事を切りぬき、あなたの感想、意見を自由に論述せよ。

⑯今年は、「国際青年年」IYYである。あなたから見た"現代の若者の姿"について自由に論述せよ。

5. おわりに

瞳を輝やかせながら、ノートに新聞記事を貼りつけ、赤鉛筆でサイドラインやアンダーラインを入れ、堂々とノート点検を待っているその姿は実に高校生らしい爽やかな雰囲気がある。㊪を忘れた者は、「次の時間までには、やってきます。」と素直に頭を下げ、ザンゲするポーズはこれまた可愛いいものである。

現代社会を教えているというよりも、むしろ生徒と一緒になって、社会のさまざ

まな出来事や問題について考えていこうといった姿勢でのぞむようにしている。今年は「国際青年年」でもあり、若者をもう一度見直しながら、この「現代社会」を積極的な形でとらえていきたいと思う。

″世界を知り、日本を知り、そして自己を知る〃という自ら立てたスローガンに少しでも近づけるように、生徒をもとに、生徒の身についた学習を展開していかねばならない。それにはまず、現代社会の動きに敏感でなくてはならない。また社会の諸問題を生徒自ら興味と関心をもってとらえ、自ら考えていこうとする生き生きとしたものが絶対条件として必要であろう。

この㊔が「現代社会」を学ぶうえでの、ささやかなきっかけとなり、学習意欲の向上にいくらかでも役立っているとなれば、こんな嬉しいことはない。

″自らとらえ、考える能力を〃しっかりと身につけてほしいものである。

あ と が き

「現代社会」が実施されて三年目を迎えた本年は、過去二年間の経験をふまえて授業内容の基礎についての研究を中心にすえました。「現代社会」を二領域に分け、選択「倫理」を加えて三分科会を設け、毎回文献、著作等を共に読み学んできました。毎回8時、9時まで熱心な話し合いが行われ、場所を移しての「tri-nken」では、話は、教育、人生、思想などに渡り、談論風発深更に及んで帰りはいつも終電車という具合でした。教員同士の疎遠さが問題とされる昨今、このような「人間的」側面が都倫研のよき伝統だと思います。

本年度の研究活動は、三分科会とも6月～2月に各々6回研究会がもたれ、のべ約110名の先生方が参加されました。ここ数年では最も参加人数が多く、活発であったと思います。本紀要は、日頃努力されている先生方の研究活動の成果です。どの頁にも熱い息吹きが伝わってくるようです。教育をめぐる状況は困難を加えつつありますが、生徒から学び、熱い情熱と人間的成長への確信に支えられつつ一層努力して私達の教師としての力量を高めていきたいと願うものです。

最後になりましたが、本年度の研究活動を支えていただいた世話人の先生方、研究会に御参加いただいた先生方、原稿をお寄せいただいた先生方にあつく御礼申しあげます。

（研究部） 小嶋 孝、幸田雅夫、水谷禎憲、和田倫明

東京都高等学校倫理・社会研究会規約

1. 名　称　この会は、東京都高等学校倫理・社会研究会といいます。
2. 目　的　この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理」「現代社会」教育を振興することを目的とします。
3. 事　業　この会は、次の事業を行います。
   (1) 「倫理」「現代社会」教育の内容および方法などの研究
   (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
   (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. 事務局　この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. 会　員　この会の会員は次の通りです。
   (1) 正会員　学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
   (2) 賛助会員　この会の目的に達成し、会の活動を援助する団体または個人
6. 顧　問　この会に顧問をおくことができます。
7. 役　員　この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
   (1) 会　長　（1　名）
   (2) 副会長　（若干名）
   (3) 常任理事　（若干名）
   (4) 幹　事　（若干名）
   (5) 会計幹事　（若干名）
8. 総　会　総会は毎年5月に会長が召集し、次のことを行います。
   (1) 役員の選任
   (2) 決意の承認、予算の議決
   (3) その他重要事項の審議
9. 年　度　この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終ります。
10. 経　費　この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかないます。
    会費は次の通りです。
    (1) 正　員　学校または研究団体を単位として年額　1,800円
    (2) 賛助会員　年額　1口　2,000円
11. 細　則　この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を作ることができます。
12. 規約の変更　この会の規約は、総会の議決によります。

附　記

1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみとめられた。
3. 昭和55年申総会で、本研究会の名称を「倫理」「現代社会」研究会から倫理社会研究会に変更することがみとめられた。

昭和59年度　都倫研紀要　23

発　行	昭和60年3月25日［非売品］
発行者	東京都高等学校倫理・社会研究会
著作者	東京都高等学校倫理・社会研究会
	代表　寺　島　甲　宏
事務局	東京都台東区元浅草1－6－22
	東京都立白鷗高等学校
	電話　(843) 5678
印　刷	(有)　稲　谷　印　刷　所
	住所　東京都千代田区麹町3－1
	電話　(234) 7851